

篠ノ井遺跡群(4)

—— 聖川堤防地点 ——

1992・3

長野市教育委員会

序

善光寺平は、東縁に上信越国立公園山系より延びる火山性の東部山地、西縁を海底等の隆起による堆積性の犀川丘陵山地に囲まれ、南北に長く盆地が形成されています。そして盆地内部においても、千曲川によりもたらされた沖積地、それに注ぎ込む大小の河川による扇状地が発達しております。このような複雑多岐にわたる地形の上に私達の長野市が成り立っています。そこにはそれぞれの地形や立地に応じて様々な生活や生産活動が見られ、古代から営々と続いてきた人々の英知の集合を見ることができます。

ここに長野市の埋蔵文化財第46集として刊行いたします本書は、長野市篠ノ井塩崎地区に所在する篠ノ井遺跡群における発掘調査報告書であります。昭和55年度から平成3年度にかけて、聖川改修事業及び、県道改良事業にともない継続的に調査を実施いたしました。当遺跡は、千曲川左岸に発達した自然堤防上に営まれた広大な集落遺跡であり、隣接する塩崎遺跡群とあわせて、県内でも有数規模を誇る遺跡といえます。発掘調査により得られた成果は、我々の過去を物語る先人の足跡のなかで、わずかな部分に過ぎませんが、地域史解明の一助としてお役立ていただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが、長期にわたる調査のなかで多大なご支援ご助力をいただいた長野県長野建設事務所等、関係者各位に対して、本書の上梓をもって深く感謝の意を表すものです。

平成4年3月

長野市教育委員会

教 育 長 奥村 秀雄

例 言

- 1 本書は、小規模河川(聖川)改修事業および、一般県道(篠ノ井稲荷山線)道路改良事業にともない、昭和55～57年度・平成元～3年度にわたり継続して実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査事業は、長野県長野建設事務所長と長野市長との契約に基づき、長野市教育委員会が担当し、長野市遺跡調査会(昭和55～57年度)、長野市埋蔵文化財センター(平成元年度～)が実施した。
- 3 発掘調査地籍は、長野市篠ノ井塩崎字浄光・北畑・山崎東にわたる。周知の埋蔵文化財「篠ノ井遺跡群」範囲内とし、調査位置を明示するため、地点名として「聖川堤防地点」と呼称する。
- 4 本書では、調査によって確認された遺構・遺物について、その概要を提示することに主眼を置いた。資料掲載の要領は次のとおりである。
 - ・ 検出した遺構との概要は、調査範囲の地区毎に、III章において記述した。
 - ・ 遺構と遺物(土器)の詳細については、IV章-1～7において時代別に記述した。ただし現在まで整理の途上にあるため、全てを資料化して掲載するには至らない。良好と思われた一部分を抽出したに留まる。
 - ・ 土器を除くその他の遺物については、一括して分類検討した。その成果について、写真とともにIV章-7に掲載した。
 - ・ 金属製品のうちの一部は、保存処理・復元の過程も含めて、検討成果をIV章-8に掲載した。
- 5 本書作成における作業は、各調査員が分担し、執筆分担は次のとおりである。
 - IV章-7 森泉かよ子(一部を寺島孝典)
 - IV章-8 白沢勝彦(長野県埋蔵文化財センター調査研究員)
 - その他 青木和明・寺島孝典なお、遺物実測・写真撮影を、青木一男・千野浩・飯島哲也・中殿章子・横山かよ子が補助した。
- 6 調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会(担当 長野市埋蔵文化財センター)で保管している。

目 次

序

例言

I 調査経過

- 1 調査に至る経過…………… 1
- 2 発掘調査の経過…………… 2
- 3 調査体制…………… 4

II 篠ノ井遺跡群の環境…………… 6

III 調査概要

- 1 調査方法と範囲…………… 9
- 2 I 区の概要…………… 16
- 3 II 区の概要…………… 17
- 4 III 区の概要…………… 22
- 5 A 区の概要…………… 25
- 6 SIA 区の概要…………… 33
- 7 C 区の概要…………… 38
- 8 SIB・SIC・SID 区の概要…………… 40
- 9 B 区の概要…………… 45
- 10 D 区の概要…………… 47

IV 各 説

- 1 弥生時代 I 期…………… 54
- 2 弥生時代 II 期…………… 56
- 3 弥生時代 III 期…………… 61
- 4 弥生時代 V 期…………… 67
- 5 古墳時代…………… 80
- 6 平安時代…………… 93
- 7 石器・その他…………… 99
- 8 周溝墓出土の弥生時代金属製品…………… 128

挿表目次

- 表 1 年度・地区別事業概要…………… 2
- 表 2 地区別検出遺構…………… 15
- 表 3 時代別検出遺構…………… 15
- 表 4 I・II 区検出遺構…………… 21
- 表 5 III・A 区検出遺構…………… 28
- 表 6 SIA 区検出遺構…………… 34
- 表 7 C・SIB～D 区検出遺構…………… 41
- 表 8 B・D 区検出遺構…………… 48
- 表 9 石器・その他 出土状況と分類…………… 121

挿図目次

図1	調査の実施範囲と字名	1	図36	SDZ-4・5	71
図2	篠ノ井遺跡群と周辺の遺跡群	6	図37	土器棺出土状態	72
図3	篠ノ井遺跡群・塩崎遺跡群の調査位置	7	図38	SDZ-4土器棺	72
図4	調査範囲と調査区	9	図39	SK-10	73
図5	調査地の土層	10	図40	SK-10・SDZ-7出土土器	74
図6	調査区全体図①	11	図41	SDZ-6～8・SK-10～14	75
図7	調査区全体図②	13	図42	SDZ-6出土土器①	76
図8	I・II区全体図	19	図43	SDZ-6出土土器②	77
図9	III・A区全体図	31	図44	SDZ-6出土土器③	78
図10	SIA区全体図	35	図45	SB-70	80
図11	C・SIB～D区全体図	43	図46	SB-70出土土器①	81
図12	B区全体図	49	図47	SB-70出土土器②	82
図13	D区全体図	51	図48	SB-116	83
図14	SK-105出土土器①	54	図49	SB-116出土土器	84
図15	SK-105	55	図50	SB-118	85
図16	SK-105出土土器②	55	図51	SB-118出土土器	85
図17	排水路出土土器	55	図52	SDZ-1	86
図18	SK-42出土土器	56	図53	SDZ-1出土土器①	86
図19	B区下層出土土器	57	図54	SDZ-1出土土器②	87
図20	SB-107	58	図55	SDZ-3	88
図21	SB-107出土土器①	59	図56	SDZ-3出土土器	88
図22	SB-107出土土器②	60	図57	SDZ-9出土土器	89
図23	SB-10	61	図58	SDZ-9・10	91
図24	SB-10出土土器①	61	図59	SDZ-10出土土器	92
図25	SB-10出土土器②	62	図60	SB-22・29	93
図26	SB-14	63	図61	SB-29出土土器	93
図27	SB-14出土土器	64	図62	SB-22出土土器	94
図28	SB-55	65	図63	SB-44	95
図29	SB-55出土土器①	65	図64	SB-44出土土器①	95
図30	SB-55出土土器②	66	図65	SB-44出土土器②	96
図31	SB-6	67	図66	D区水田面出土土器	97
図32	SB-6出土土器①	67	図67	SB-83	98
図33	SB-6出土土器②	68	図68	SB-83出土土器	98
図34	SB-6出土土器③	69	図69	井戸-39出土土器	98
図35	SDZ-4出土土器	71	図70	周溝墓出土金属製品	129

I 調査経過

1 調査に至る経過

埋蔵文化財包蔵地が集中的に存在する長野市篠ノ井塩崎地籍においては、昭和63年度着工の高速道路「長野自動車道」建設事業を中心として、各種関連事業による土木工事が活発化し、埋蔵文化財記録保存のための発掘調査が継続的に実施されている。このうち、県教育委員会の主導により埋蔵文化財の保護がはかられる高速道路用地内を別として、高速道路用地周縁の各種関連事業も含めてのその他の事業に伴う保護措置に関しては、県教育委員会の指導により、市教育委員会が担当することとされている。

長野建設事務所は千曲川左岸の水防対策として、昭和54年度に大規模自転車道整備事業として堤防改修を実施し、引き続いて、千曲川増水にもない氾濫の危険を常にはらんできた千曲川支流聖川に関して、小規模河川改修事業に着手することとなった。事業は、現堤防を付け替え・かさ上げするとともに、河川流路幅員を拡張し、千曲川との合流地点から上流へと向かって、継続的に実施される計画であった。事業計画地は周知の埋蔵文化財「篠ノ井遺跡群」範囲内に位置するため、県教委・市教委と長野建設事務所との協議を経て、記録保存のための発掘調査実施が決定された。調査は昭和55年度に着手し、以降事業進捗にあわせて継続されることとなる。

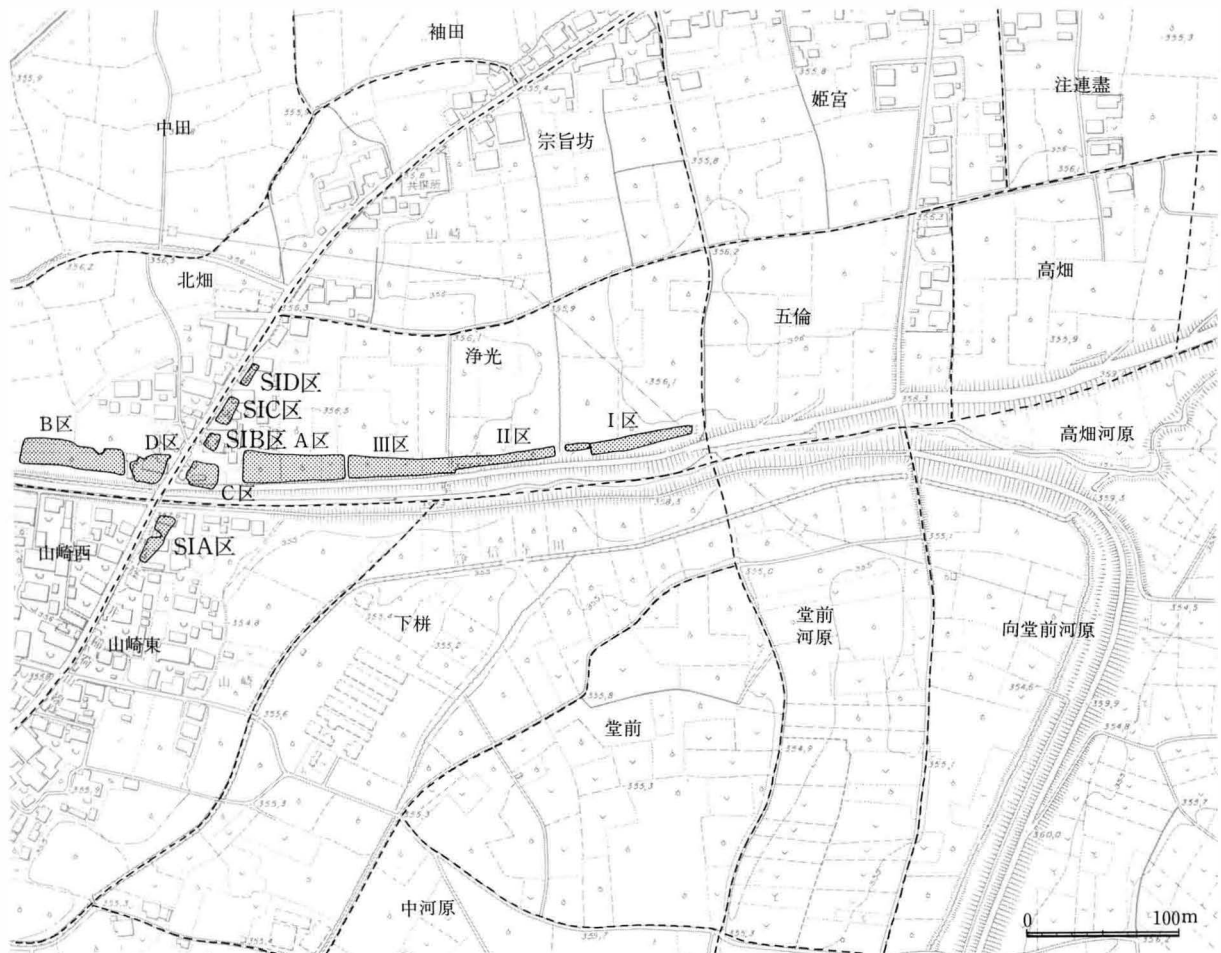


図1 調査の実施範囲と字名 (1:5,000)

2 発掘調査の経過

昭和55年度に着手された小規模河川改修事業にともなう埋蔵文化財発掘調査は、昭和57年度までの3次にわたって、保護対象の約5割において調査を完了した。それぞれの調査範囲は地区名称としてⅠ～Ⅲ区と命名した。その後、6年間の施工中断により、発掘調査も休止をみたが、高速道路建設事業の開始により、河川改修事業にも拍車がかかり、平成元年度に至って、残りの部分についての発掘調査が再開されることとなった。調査対象地は県道篠ノ井稲荷山線をはさんだ東西に別れ、それぞれをA・B区と命名した。翌2年度には、県道沿いに残された橋梁施工範囲C・D区についての発掘調査を完了し、河川改修事業に伴う保護対象の予定範囲において全ての発掘作業を完了するに至った。

河川改修事業に関連し、県道篠ノ井稲荷山線聖徳橋付近においては、橋梁の付け替えおよび道路拡張を主とした一般県道改良事業が計画された。河川改修事業と並行して埋蔵文化財記録保存のための発掘調査に着手することとなり、平成2年度に橋梁をはさんだ南北部分をSIA・SIB区とし、平成3年度には残りの北側部分をSIC・SID区として発掘作業を完了するに至った。

以上の発掘作業と並行して整理作業を実施し、平成3年度に両事業にかかわる調査報告書の刊行に至った。

各事業・年度別の経過概要は次表のとおりである。



聖川と事業対象地



昭和55年度（Ⅰ区）

小規模河川改修事業	年度	昭和55年度	昭和56年度	昭和57年度	平成元年度		平成2年度	
	地区	Ⅰ区	Ⅱ区	Ⅲ区	A区	B区	C区	D区
	字名	浄光	浄光	浄光	浄光	北畑	浄光	北畑
	面積	550㎡	510㎡	910㎡	1340㎡	1210㎡	320㎡	500㎡
調査日数	11/4～11/20 15日	11/15～11/26 12日	10/15～11/10 25日	6/12～12/13 80日	7/31～10/9 46日	6/30～8/8 30日	7/30～9/14 27日	
一篠ノ井道稲荷山線	年度	平成2年度		平成3年度				
	地区	SIA区	SIB区	SIC区	SID区			
	字名	山崎東	浄光	浄光	浄光			
	面積	420㎡	110㎡	160㎡	80㎡			
調査日数	8/30～11/13 47日	10/30～11/19 15日	7/8～8/5 19日					

調査面積は、遺構測量部分の単純面積であり、実質の調査範囲面積を示してはいない。

また、平成元年度以降は、重層的に存在している遺構群に対応するため、検出面を2～3面設定している。実質の調査面積は単純面積をはかるに上回る。

表1 年度・地区別事業概要



昭和57年度 (III区)



平成元年度 (A区・東)



平成元年度 (A区・西)



平成元年度 (B区)



平成元年度 (B区・下層)



平成2年度 (C区)



平成2年度 (D区)



平成2年度 (D区・下層)

3 調査体制

(1) 昭和55～57年度の調査体制（職名・所属は当時）

長野市遺跡調査会の組織

会 長 中村博二（長野市教育委員会教育長）
委 員 米山一政（長野市文化財保護審議会会長）
桐原健（長野市文化財保護審議会委員）
千野和徳（長野市教育委員会教育管理部長）
小池淳美（長野市教育委員会教育次長）
関川千代丸（長野市教育委員会文化財専門主事）
矢口忠良（長野市教育委員会主事）
監 事 田中穂積（長野市教育委員会総務課長）
事務局長 関口仁（長野市教育委員会社会教育課長）
局 員 吉池弘忠（長野市教育委員会社会教育課課長補佐）
根津伸夫（長野市教育委員会社会教育課主事）

調査団の構成

団 長 森嶋稔（上山田小学校教諭）
調査主任 矢口忠良（長野市立博物館主事）
調 査 員 山口明 青木和明（長野市立博物館主事）
石上周蔵 小林秀行 竹内稔 直井雅尚 田中正治郎 白田美智子 宮城孝之
白崎卓 馬場長光 込山秀一 石渡俊一 奥山元彦 大竹庄司 小島秀典 平尾佳代
深井幸人 山下俊幸（以上信州大学考古学研究会）
市村勝巳 大林育葉 倉島千智 坂口清子 樋口良江 水品紫乃（以上長野市立博物館）
参 加 者 沓掛政夫 矢島憲之 宮崎保雄 伊藤忠治 太田豊一 山岸義久 北村政春 矢島忠恒
矢島秀子 駒村より子 三宅秀子 矢島喜和子 広瀬政子 樋口太一 田中信子 百瀬京子
北村秀一 三宅清 宮崎美裕 深沢優子 北沢やすい 小出金人 田中利夫 深沢伊喜栄
三宅利正 山岸すめる



平成2年度（SIA区・北）



平成2年度（SIA区・南）

II 篠ノ井遺跡群の環境

長野市南部の篠ノ井地区に広がる千曲川左岸の氾濫原には、大規模な自然堤防が発達している。この自然堤防上は、当該地において水稲耕作が開始されて以来、好適な集落立地条件として選択され続けてきたらしく、ほぼ間隙なく遺物の散布が確認されており、その全域が埋蔵文化財包蔵地として周知されている。この自然堤防上の埋蔵文化財包蔵地はいくつかの遺跡群として区分され、そのなかで、自然堤防を開削して千曲川に合流する聖川と岡田川とはにさまれた地域が篠ノ井遺跡群であり、当該調査地はここに包括されることになる。

篠ノ井遺跡群と同様の立地をとる、千曲川自然堤防上の遺跡を列举すると、左岸では上流から「八幡遺跡群」（更埴市）・「塩崎遺跡群」・「篠ノ井遺跡群」・「横田遺跡群」（長野市）、右岸では、「粟佐遺跡群」・「屋代遺跡群」・「土口遺跡」（更埴市）があり、ほぼ連続した集落遺跡範囲が設定されている。さらに、その後背湿地は、左岸・右岸ともに条里的な地割を残す水田地帯として知られ、それぞれ「石川条里遺跡」（長野市）「更埴条里水田址」（更埴市）という生産遺跡範囲が設定され、集落域と生産域とが一体となった、きわめて良好な歴史的景観が形成され

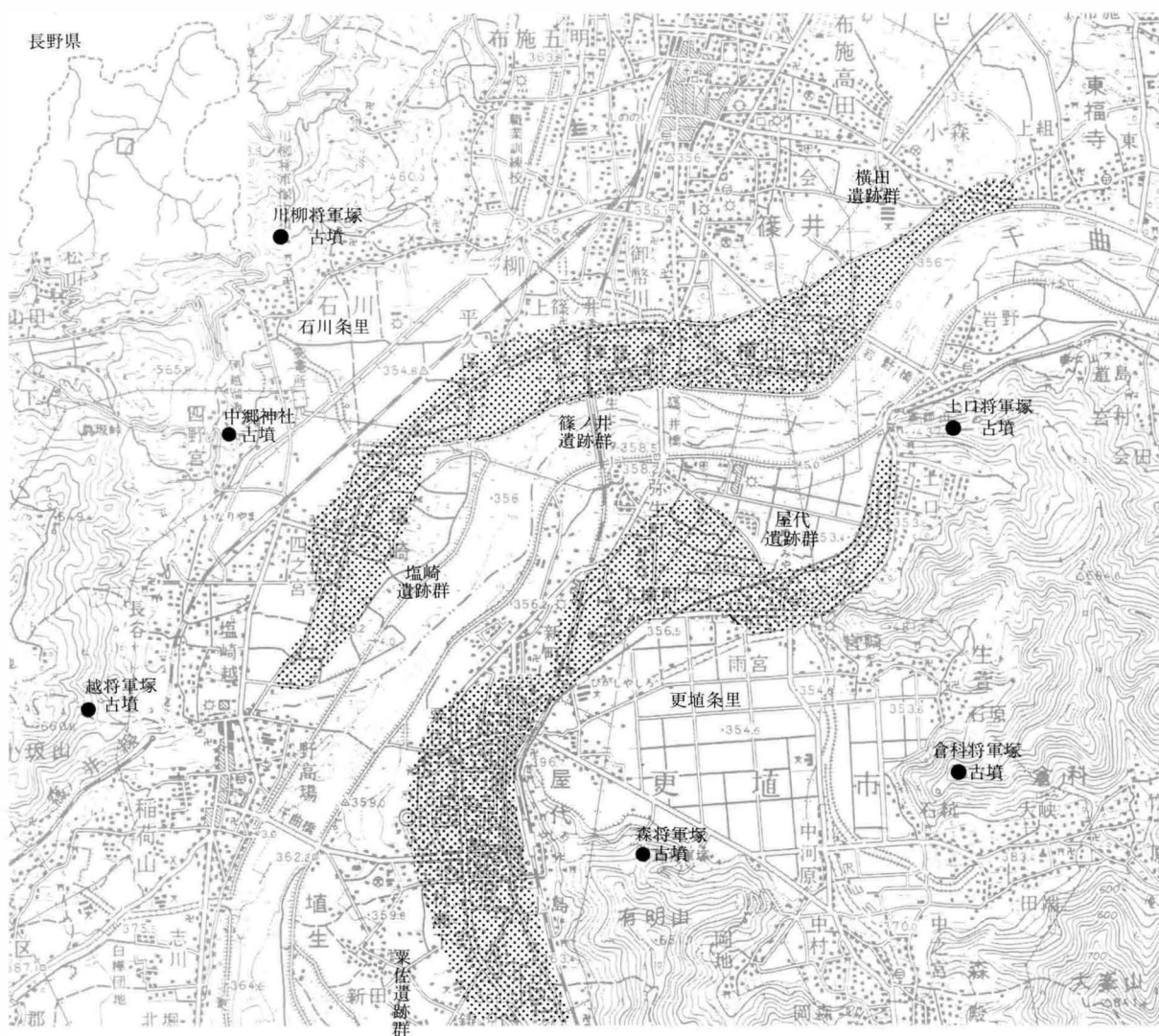


図2 篠ノ井遺跡群と周辺の遺跡群（1：50,000）

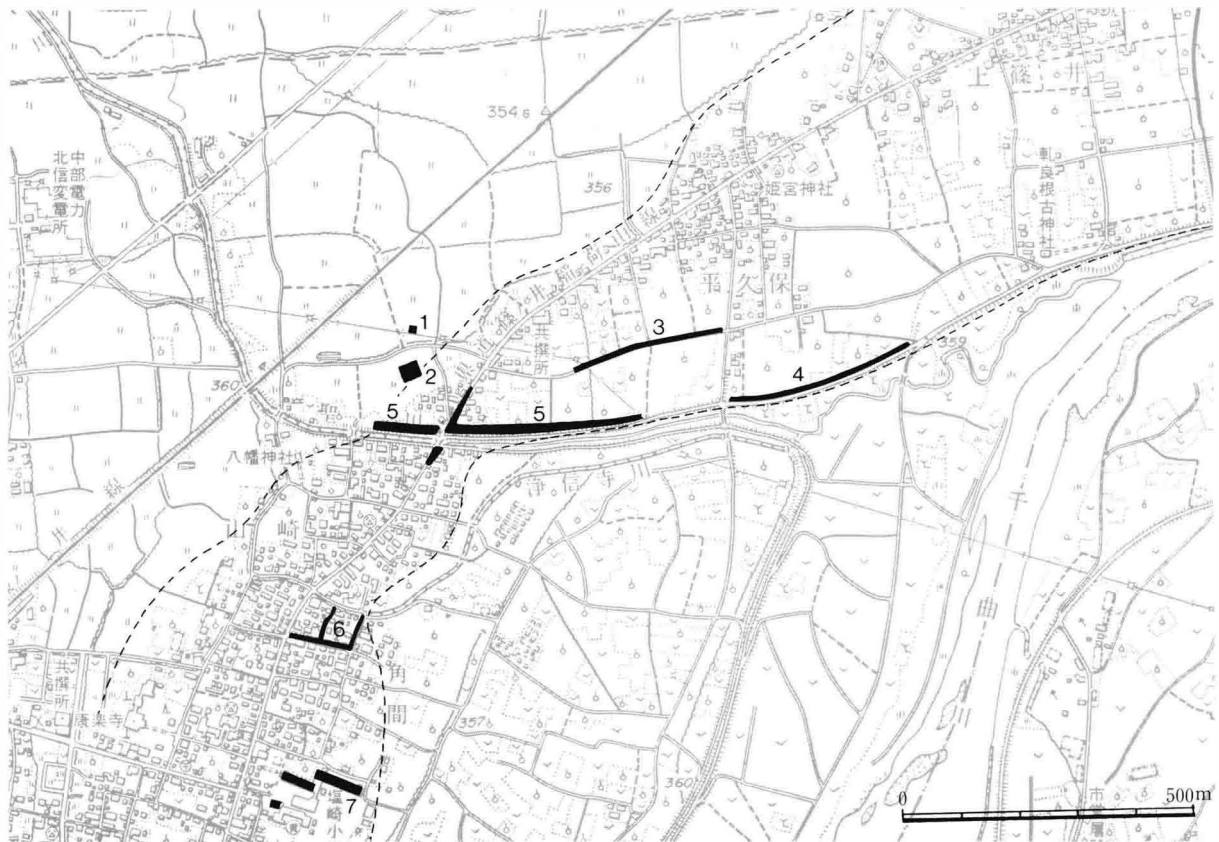


図3 篠ノ井遺跡群・塩崎遺跡群の調査位置 (1 : 13,000)

1. 中部電力鉄塔地点 2. 市営塩崎体育館地点 3. 市道山崎唐猫線地点 4. 大規模自転車道地点
 5. 聖川堤防地点 6. 市道角間線地点 7. 塩崎小学校地点 (破線内は想定される居住域の範囲)

ている。昭和63年度以来、県埋蔵文化財センターにより継続して発掘調査が進められている高速道路用地内においては、石川条里遺跡で弥生時代から近世に至るまでの各時代にわたる埋没水田遺構、篠ノ井遺跡群で弥生時代後期の環濠集落等の検出が報じられており、大規模集落群とその成立の背景となる広大な生産基盤との関係を解明するうえで、その成果に大きな期待がかけられている。

居住域となる自然堤防上に広範囲に設定された篠ノ井遺跡群での埋蔵文化財調査は、昭和54年の大規模自転車道建設にともなう発掘調査が端緒となっている。その後いくつかの開発行為にともない、埋蔵文化財発掘調査が継続的に実施され、今回報告する発掘調査地を含めて5地点を数えることとなった。

昭和54年度 「大規模自転車道地点」(平久保区) 字堀之内・高畑・五倫 『篠ノ井遺跡群』1980

昭和63年度 「市道山崎唐猫線地点」(平久保区) 字姫宮・五倫・宗旨坊・浄光 『篠ノ井遺跡群II』1989

平成元年度 「中部電力北信坂城線鉄塔地点」(山崎区) 字中田 『篠ノ井遺跡群III』1990

平成元年度 「長野市営塩崎体育館地点」(山崎区) 字北畑 『篠ノ井遺跡群III』1990

昭和55年度～平成3年度 「聖川堤防地点」(山崎区) 字浄光・北畑・山崎東

発掘調査により明らかとなる調査地点により、検出遺構・遺物の所属年代や密度にそれぞれの特色を見出すことができる。しかしそれ以上に重要な所見は、集落の痕跡がほぼ間断なく連続して認められ、遺構の空白地帯を認め難い点にある。長野市教育委員会では、この調査所見を重視して、地籍名等に基づく遺跡名称の新たな設定を保留し、篠ノ井遺跡群のなかの地点として報告することを基本姿勢としてきた。地点といっても、対象が複数の地籍(字)にまたがる場合が多いため、調査の起因となる事業(建造物・道路)の名称を冠して、位置を明示することとしている。現時点において我々は、遺跡群内を個別遺跡に分割する明確な根拠、あるいは、遺跡群内に地区割を施す統一的な基準を提示するに至っていない。遺跡群の複合的な構成についての解明を試みるためには、調査成果に基づいて個別遺跡の集合体として整理分割して見せる作業や、地区・地点を特定するために合理的な地区割が必要となることは明らかである。ここでは、その作業を将来的な課題として残し、再検討を期するものである。

なお、今回報告に及んだ聖川堤防地点は、調査年度と位置により11地区に分割してある。このうちSIA区に関しては、聖川以南の自然堤防上に位置しているため、従来の認識からすれば「塩崎遺跡群」範囲内にある。次章で述べるとおり、平安時代における遺構分布とその連続状態から、一連の遺跡と判断することが妥当と考え、本書では他地区とあわせて「篠ノ井遺跡群」範囲として取り扱うこととした。この判断について若干の補足説明をしておきたい。

「篠ノ井遺跡群」と「塩崎遺跡群」とが聖川により区分された経緯は、地形的な観点から便宜的にその境界が設定されたという。ただし、詳細は不明確ではあるが、現在の河川位置は江戸時代の改修工事により固定されたものと伝えられており、歴代の流路については現在の位置に固定されるべきものではない。現地地形から見れば、旧来の主たる流路は、聖川現流路の約100m南に位置する浄信寺川付近に求められる可能性が指摘され、塩崎遺跡群「市道角間線地点」の発掘調査においても、奈良・平安時代の集落遺構が空白となる凹地が確認されている。一方、今回の調査ではD区において弥生時代中期の凹地の一部と推定される地形の落ち込みが検出されており、現在の流路付近もある時期の地形的な断絶として侮ることはできない。B・D区における平安時代水田の成立もこれに連動するものであろう。これらを総合して判断すれば、時代ごとの自然や人為の要求により聖川流路が変移してきたこと、集落の構成もそれと連動して推移してきたことが示唆されよう。遺跡群の境界としてのみならず、生活用水として遺跡群の成立と密接な関係を有するべき聖川について、各時代における人為も含めた流路変更や分岐等の変遷を明確にすることも、遺跡群構造把握の面からは極めて重要な課題として残される。

III 調査概要

1 調査方法と範囲

調査範囲

河川改修及び道路改良事業の拡幅部分にあたる調査地は、用地幅が最大で20m程度ながら、延長は聖川堤防沿いで東西450m、県道沿いで南北150mという狭長な範囲であり、調査年度単位で11か所の地区割が設定された。調査の実施が多年度に分割され、河川法等による規制のほか安全面における配慮、あるいは生活道路等の確保や構造物の存在から多くの制約が生じた。このため、調査対象の全てにおいて調査を実施することが叶わず、各調査区は互いに接合しない場合が多い。また、調査区のうちⅠ・Ⅱ区は高速道路用地とほぼ接する位置関係にあるため、後に実施されることとなった高速道路用地内の発掘調査検出遺構とは連続関係を有することとなる。

調査方法

東側から漸次着手された調査のなかで、自然堤防の中央部に向かって調査が進むほど、遺構密集度が増す傾向が認められた。さらに遺構の存在位置が各時代重層的に存在することが認識され、遺構の検出面を複数設定しながら、作業を進める必要に迫られた。しかしながら、僅か1mの厚さの包含層中に弥生時代の初期から平安時代

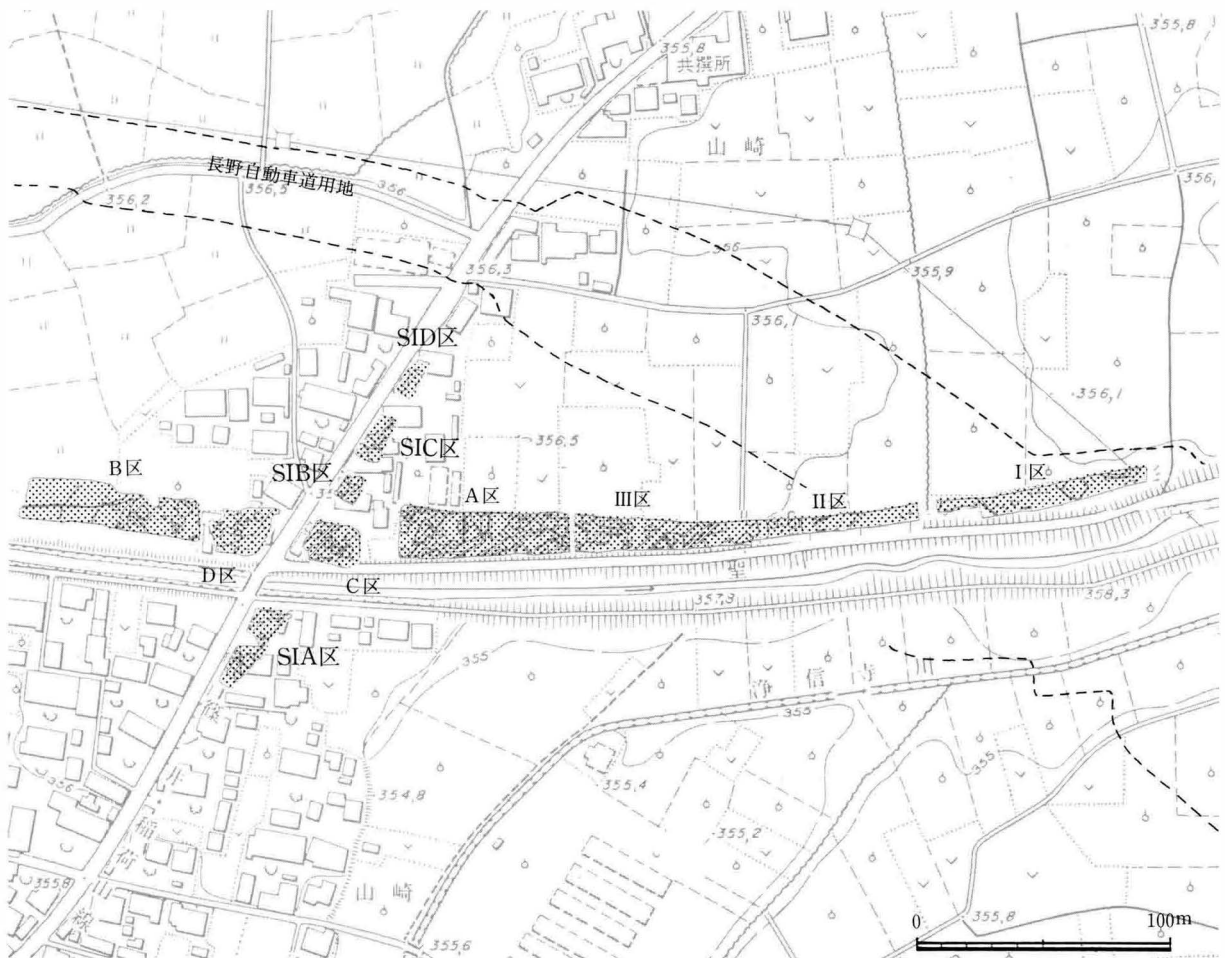


図4 調査範囲と調査区 (1 : 3,000)

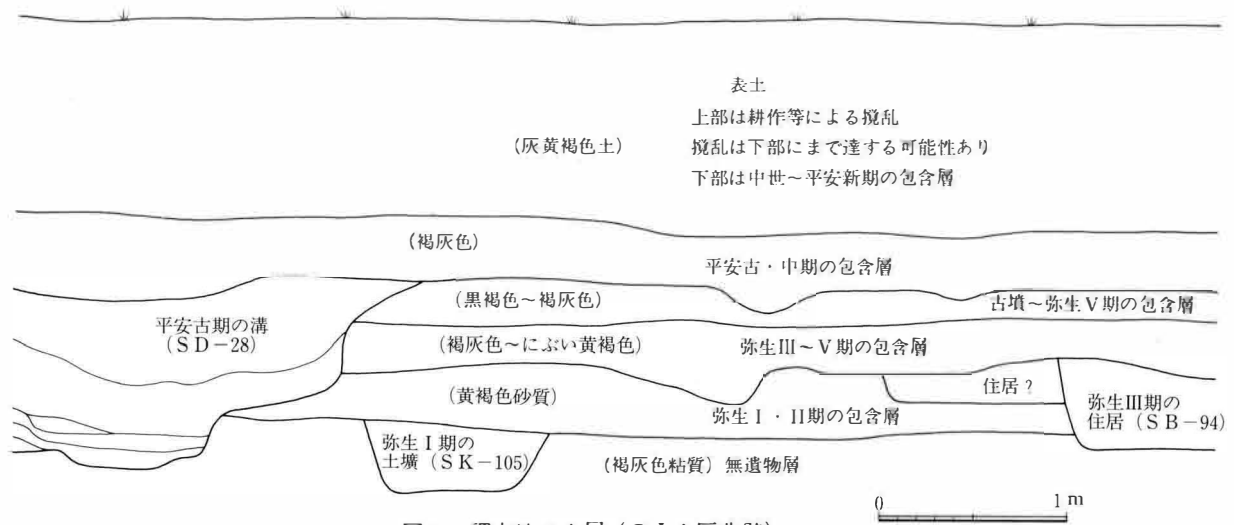


図5 調査地の土層 (S I A区北壁)

に至るまでの各時代遺構が激しく重複する部分では、遺構確認において判別困難な状況もあり、必ずしも分層的に調査を成しえたとは言い切れない。上部遺構とそれに伴う遺物、下部遺構とそれに伴う遺物が混在して検出される例は数多く存在している。また、誤認されたままの遺構のほか、検出を完了できなかった遺構と未確認のまま残された遺構も多く存在しているといわざるをえない。天井川を呈する聖川に近接して、下層の検出面ではほぼその河床と同レベルの位置で作業を進めることとなったため、著しい湧水により遺構の検出が不十分となっている。調査成果の公表にあたっては、まずはこれらの不確定要因の存在について注意しておきたい。

遺物整理作業は、現場において作成した遺物台帳をもとに進めたが、台帳の整備と出土遺物総体としての把握にとどまり、そのほとんどが整理の途上にある。土器に関しては一部を除いて接合復元にまで着手していない。石器とその他の遺物に関しても実測図作成にまで至っていない。遺構図の整理作業も途上に位置している。同じく調査遺構を総体として把握することに主眼を置いたため、一部を除いて測量成果を個別に提示する作業には着手していない。以上整理作業を完了できないまま本書作成に至っていることを明記しておく。

なお、平成元年度以降の調査では、国土座標第VIII系を基準として遺構測量を実施し、測量成果のほとんどに座標値が備えられているが、それ以前の調査(I～III区)はこの範囲ではない。両者を整合させるために、座標値を持たないI～III区の遺構図整理にあたっては、建設事務所作成の三斜状量図等を基礎として、調査範囲の座標値を一部復元し、目安として表示してある。

調査地の土層

調査対象地の全域を通して、土層序の顕著な変化は認められない。色調を除いて堆積土壌は自然堤防特有の砂質土に終始している。ただし、自然堤防の後背湿地側に位置するB・D区では、平安時代の水田層を形成する粘質土層とそれを被覆する細粒砂層の存在が例外的である。畑地及び宅地として近世以降連続的に利用されてきた調査対象地は、地表下1m近くまでは、多くの範囲で耕作等による攪乱が及んでいると考えてよいだろう。この地表下1mまでを除外してそれ以下の約1mの厚さの土層中に、弥生初期から平安時代、一部は中世に至るまでの遺構とそれに伴う遺物が包蔵されている。土層と遺構との関係が明確に把握できたSIA区における土層断面図を提示する。各検出面の設定位置は調査区によって流動的であるが、基本的には調査対象地全域での認識に一致している。おおむね、弥生後期から平安時代までは上部黒褐色土層中に、弥生中期以前は下部黄褐色土層中に、遺構掘り込み面が存在するらしく、それぞれに検出面が設定される。

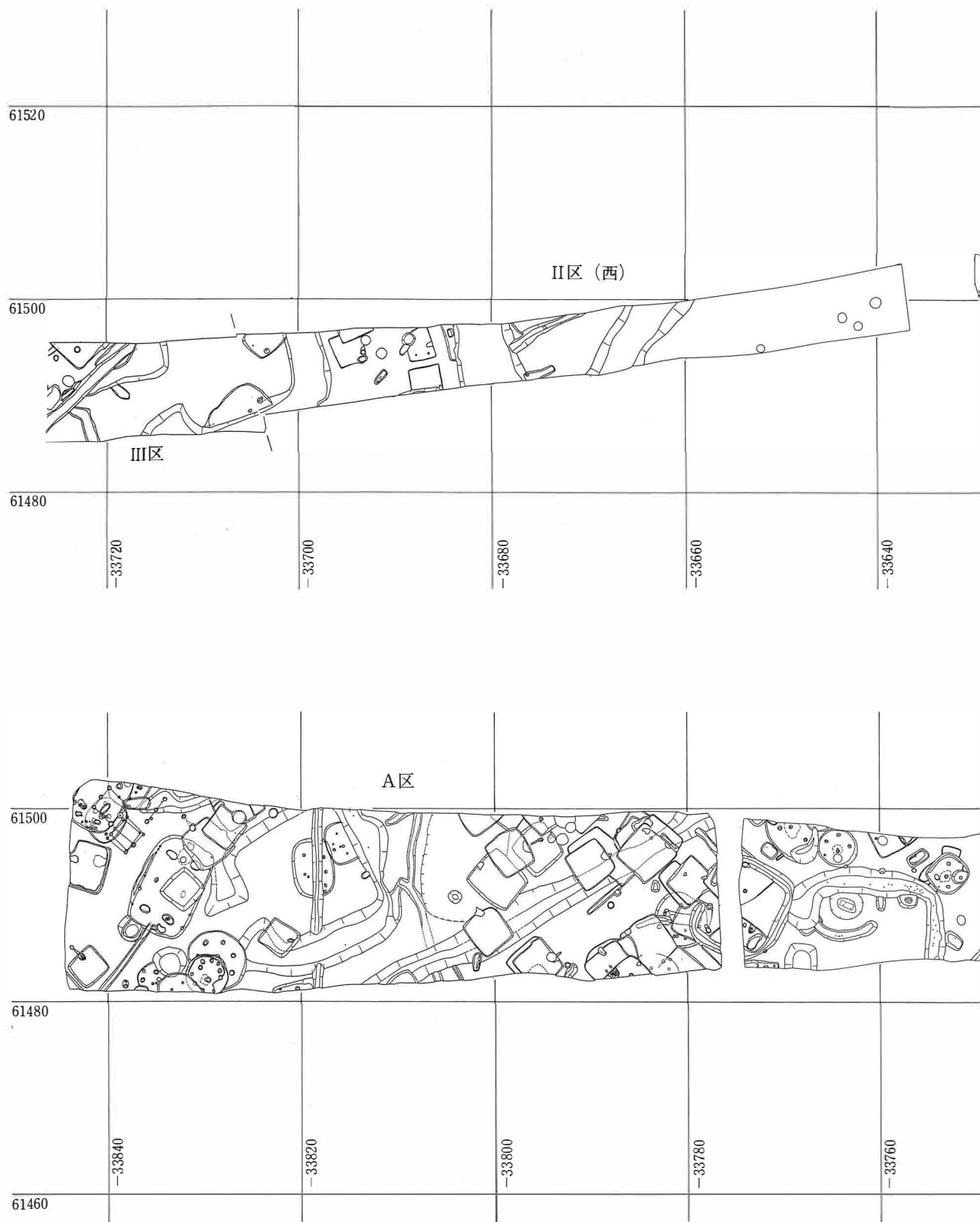


図6 調査区全体図

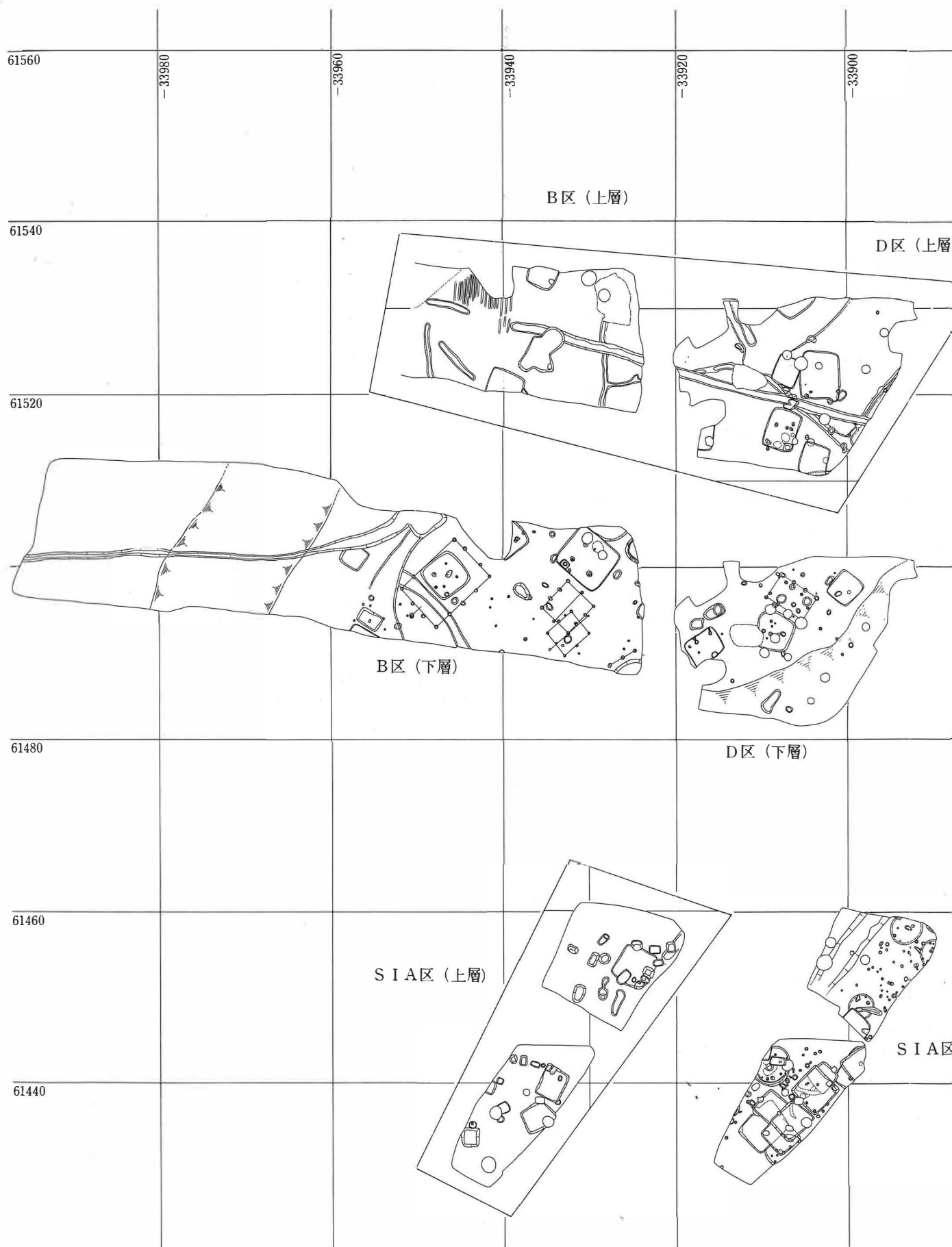


図7 調査区全

地区	住居	軒	溝	本	土壙・井戸	基	その他特記
I	SB-1~2	2	SD-1	1	井戸-1~23	23	古墳時代周溝墓第1群 (SDZ-1・2)
II	SB-3~8	6	SD-2~6	5	SK-1~4 井戸	13	古墳時代周溝墓第2群 (SDZ-3)
III	SB-9~18	10	SD-8~13	6	SK-5~15井戸	20	弥生時代周溝墓群 (SDZ-4 ~8)
A	SB-19 ~63	45	SD-14 ~21	8	SK-17 ~36	20	古墳時代周溝墓第3群 (SDZ-9・10) 掘立柱建物 3
B	SB-64 ~73	10	SD-22 ~24	3	SK-37 ~43	7	掘立柱建物 3 平安時代水田 石囲炉
C	SB-74 ~81	8	SD-25・26	2	SK-44 ~70	26	掘立柱建物 1 炭焼窯
D	SB-82 ~88	7	SD-27	1	SK-71 ~89	19	掘立柱建物 1 平安時代水田 弥生時代地形落ち込み
SIA	SB-89 ~108	20	SD-28・29	2	SK-90 ~123	34	石囲炉 (SB-108)
SIB	SB-109~113	5	SD-30 ~32	3	SK-124~127	4	
SICD	SB-114~120	7	SD-33・34	2	SK-128~134	7	
総計		120		33		173	

表2 地区別検出遺構

検出遺構と分布

11か所に分割された調査区において、確認することができた遺構は竪穴住居跡120軒をはじめとして多くを数える。遺物出土の認められない遺構に関しては番号付けしていないため、実数はこれを上回る。調査区によって、遺構の密度と、分布する遺構の種類、所属年代に格差があり、時代別の遺跡空間利用にいくつかの傾向を指摘することができそうである。検出遺構の所属年代については、出土土器により次の時期を設定した。詳細は次章に譲るが、それぞれの時期における指標を示しておく。

- 弥生時代・I期 氷式及びその直後
- 弥生時代・II期 庄ノ畑式とその周辺
- 弥生時代・III期 栗林式とその周辺
- 弥生時代・V期 箱清水式
- 古墳時代・前期 須恵器出現以前
- 古墳時代・後期 須恵器出現以降
- 平安時代・古期 底部ヘラ削の土師器坏
- 平安時代・中期 底部糸切の土師器坏
- 平安時代・新期 須恵器消滅
- 中世 内耳土器とカワラケ

時代	遺構	I区	II区	III区	A区	B区	C区	D区	SIA	SIB	SIC	SID	総計
弥生 I	住居					2			5				7
	溝 土壙				2	5	18		2				27
弥生 III	住居			4	10			1	2			1	18
	溝 土壙			1	2	5	3	2			1		12
弥生 V	住居		2	1	3				1				7
	溝				1								1
	土壙 周溝			5	5								5
古墳	住居				1	6	2	2		1	2	1	15
	溝		1		1	2	1			1			6
	土壙				2		1	4					7
	周溝 掘建	1	1		2								4
平安	住居					3	1	1					5
	溝	1	4	5	31	2	6	4	12	4	3		72
	土壙		2	4	4	1	1	1	1	1	2		17
	掘建		4	4	7			5	4	11	2	2	39
他・不明	住居												3
	溝 土壙 周溝	1											3
平安時代・古期	住居	1											1
	溝	1	2	1					1	1			6
平安時代・中期	住居	23	9	11	4	2		9	21	2	1	3	85
	溝	1											1

表3 時代別検出遺構

2 I区の概要

幅員10m弱、延長68mにわたって調査されたこの地区では、中世井戸群と古墳時代周溝墓が検出された。調査地の南側では地形が緩く傾斜する傾向が認められ、また、聖川対岸部分での試掘調査によると、地表下約1.8mからグライ化した粘土・砂の互層が確認されており、千曲川流路への落ち込みを示す可能性がある。

中世井戸群

総数23基が検出されている。いずれも円形を呈し、1m内外の直径を測る。底面まで検出に及んでいないため深さは不明、6基から内耳土器等が出土し、中世の所産と判断される。

古墳時代周溝墓第1群

検出された2基をもって、周溝墓第1群とする。隣接する高速道路用地内では他に2基が確認されたとのことがある。SDZ-2からは中世の遺物が比較的多く出土しているため、古墳時代周溝墓に該当させることには問題が残るかもしれない。周溝内より一括の土器出土を見たSDZ-1については次章で詳述する。



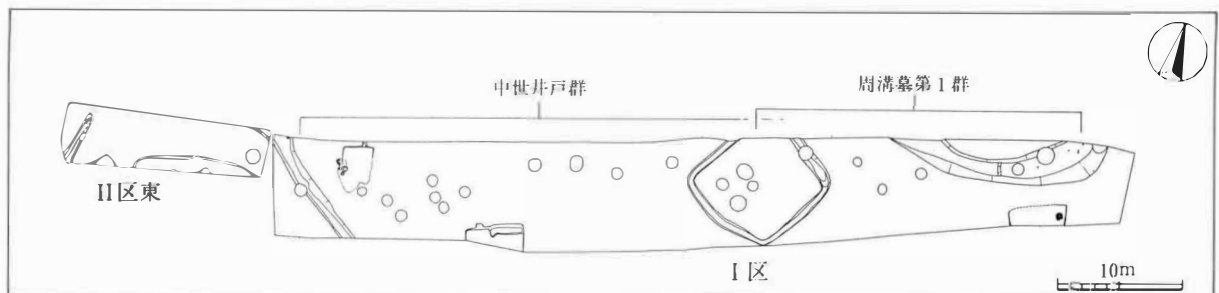
中世井戸群



周溝墓第1群 (SDZ-1)



(SDZ-2)



3 II区の概要

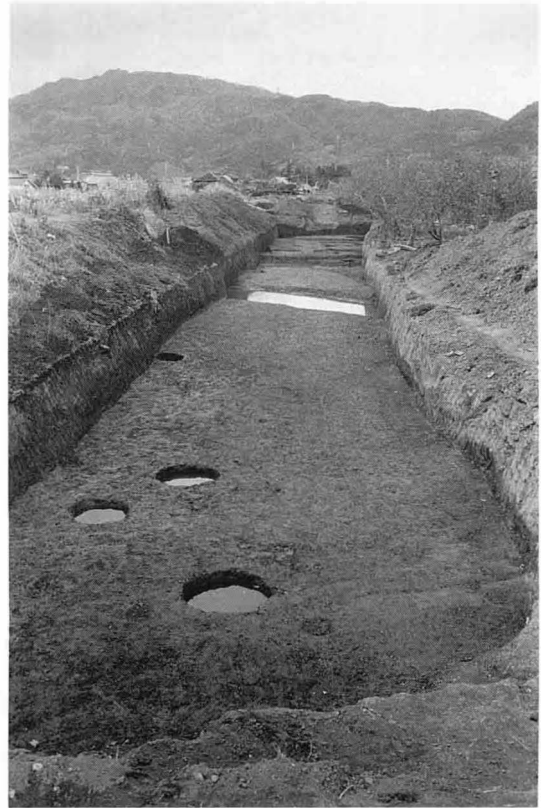
排水路をはさんで東と西に分断されている。東では中世遺物と井戸群、調査面積の大半を占める西側では、平安時代の大溝と住居群、古墳時代の大溝と周溝墓、弥生時代後期の住居群が検出された。

中世井戸群

7基が検出され、I区から連なる帯状の分布を形作っている。この分布域には、比較的該期の遺物出土が多く、居住域としての利用を想定すべきであろうか。

平安時代古期大溝・住居群

SD-5は6mを測る大溝であり、多数の土器類出土が認められた。一部の遺物は奈良時代にまでさかのぼることが予想され、長期にわたり機能した水路と位置付けておく。この溝を境として、西側には同時期の住居が4軒検出されており、大溝により居住域が区画されていた可能性が認められる。なお、大溝からは、解体されたと考えられる馬骨が比較的多く出土している。該期の馬骨出土に関しては、祭祀的な面から検討される場合があるが、農耕馬の普及と食生活のあり方も含めて、その意味を多角的に検討したいところである。



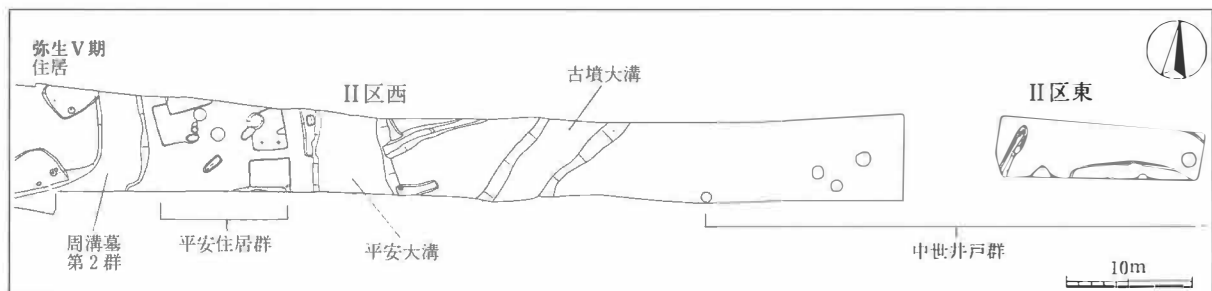
II区全景（東より）



平安時代大溝（SD-5）



古墳時代大溝（SD-3）



古墳時代大溝

幅5mのSD-3肩部から底部穿孔の赤色塗彩壺1個体が出土をみている。頸部に接合する同一個体破片がSDZ-3より出土し、ほぼ同時代に機能していたものと判断される。底面までの深さは約1m、覆土上部には該期周溝墓に特有のレンズ状黄褐色土の堆積が存在する。周溝墓との関連において注意される。

古墳時代周溝墓第2群

III区にまたがって検出されたSDZ-3をもって周溝墓第2群とする(高速道用地内では他に1基が検出されているとのご教示)。詳細は次章に譲るが、突出部をもつ前方後方形を呈し、最大長24mを測る大形周溝墓である。

弥生時代V期住居群

2軒検出されている。SB-6からは多量の土器類が出土している。詳細は次章。SB-8は、床面の直上に多量の炭化材が認められ、火災の痕跡をとどめている。土器類の出土は少ないが、床面の一部に炭化した敷物が遺存し、貴重な資料となっている。



周溝墓第2群(SDZ-3)東半



同上西半



弥生V期住居(SB-6)



(SB-8)

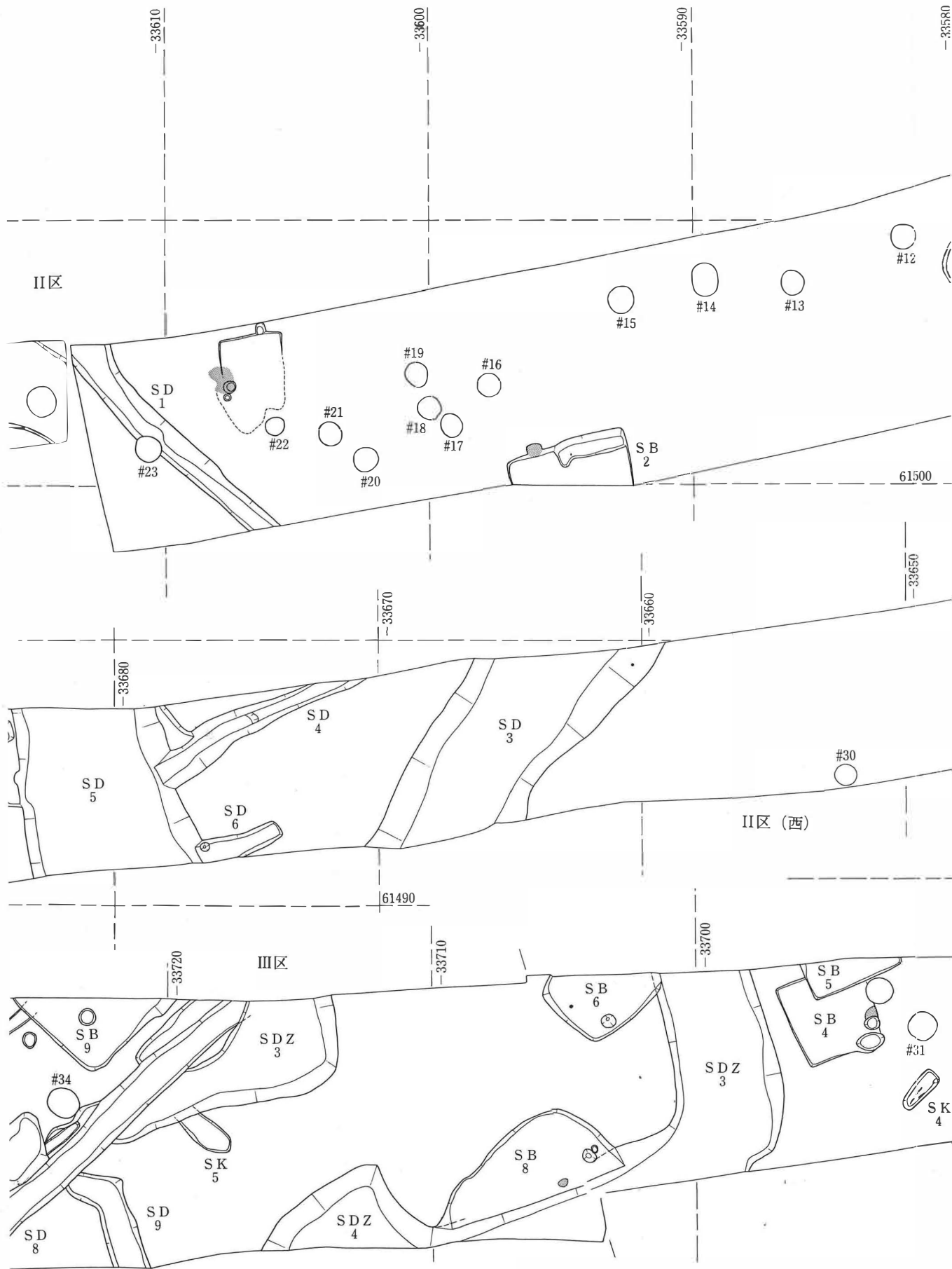
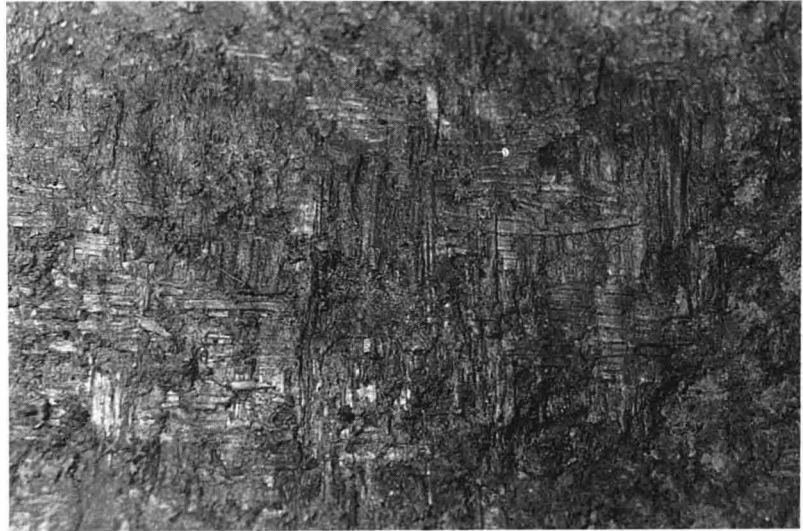


图8 I区·II区全图

炭化した編物

弥生時代V期の住居跡SB-8出土の炭化した敷物は、多量の炭化材の下、床面の一部分にのみ遺存していた。遺存を確認した範囲は80×40cm程度、イネ科植物と推定される茎を網代のように編んでおり、住居床の敷物であったと考えられる。当時の住生活を物語る資料といえる。



弥生V期の炭化編物 (SB-8)

地区	遺構 No.	時代・期	遺構		遺物		
			規模・平面形	施設等	量	土器 概要	その他
I	SB-1	中世?	4.5× 方形	東カマド	少		
I	SB-2	平安?	4.6× 方形	北カマド	少		
II	SB-3	平安・古	3.3×2.8 方形	西カマド	少		
II	SB-4	平安・中	3.3×3.2 方形	西カマド	中		
II	SB-5	平安・古	3.6× 方形		少		
II	SB-6	弥生・V	×3.3 長方形		多	土器一括廃棄	
II	SB-7	平安・新?	3.3× 方形	西カマド	少		
II III	SB-8	弥生・V	6.8× 長方形	火災住居	少	炭化材・炭化編物	
I	SD-1	中世	幅1.3～		少		
II	SD-2	?	幅0.8～	集石	—		
II	SD-3	古墳・前	幅5.8～		少	穿孔壺1 (SDZ-3)	
II	SD-4	平安・古	幅1.4～	SD-5と接続	多		
II	SD-5	平安・古	幅6.3～	SD-4・6と接続	多	獣骨多数	
II	SD-6	?	幅0.6～	SD-5と接続	—		
I	SDZ-1	古墳・前	幅3.5～前方後方?	周溝墓	中	溝内埋没土器5個体	
I	SDZ-2	中世?	幅1.0～ 方形	周溝墓?	少	中世土器出土	
II III	SDZ-3	古墳・前	幅4.0～前方後方形	周溝墓	少	穿孔壺破片 (SD-3)	
II	SK-1	平安?	—		少		
II	SK-2	?	径0.7 円形		—		
II	SK-3	平安?	×1.2	墓?	—		
II	SK-4	平安?	1.7×1.1	墓	—	人骨	
I	井戸	中世	No.6・9・16・21・25・29		少		
II	井戸	平安	No.24		少		
I	検出面						
II	検出面						

表4 I・II区検出遺構

4 III区の概要

幅員10~15m、延長70mにわたって調査されたこの地区では、各時代の住居や溝とともに弥生時代V期の周溝墓群が検出された。調査範囲の西側では、各時代の遺構が密集し、居住域の中心部に該当する。

平安時代溝群・住居群

II区にかけて検出された古墳時代周溝墓第2群の西側に、ほぼ同じ方位をもって掘削された大小の溝が4本並列している。幅員5mを測る大溝SD-13からは、奈良時代の遺物を含む平安古・中期の土器類が多量に出土している。規模の小さいSD-8・11・12からは遺物出土が少ないが、大溝と一連の機能をもつ溝群となろう。生活用水あるいは耕作に関連した水路と推定しておく。これより西側には同時期の住居が5軒確認され、A区へと連なる該期の住居密集域に属する。

弥生時代III期住居群

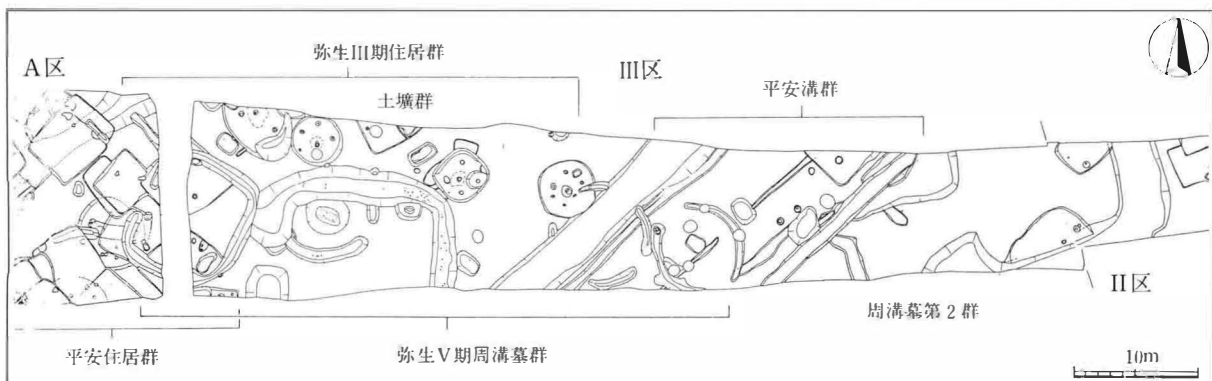
調査区の西半に4軒検出され、該期の住居群が形成されている。重複関係を持たないが、住居平面形態や出土土器から、その存続には若干の時間差を考慮すべきか。



III区東半の全景

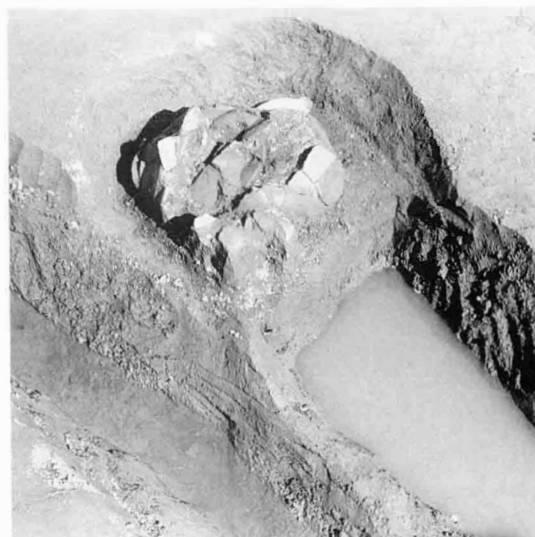


平安時代溝群と弥生周溝墓・住居





弥生V期周溝墓 (SDZ-4)



周溝内の土器棺

弥生時代V期周溝墓群

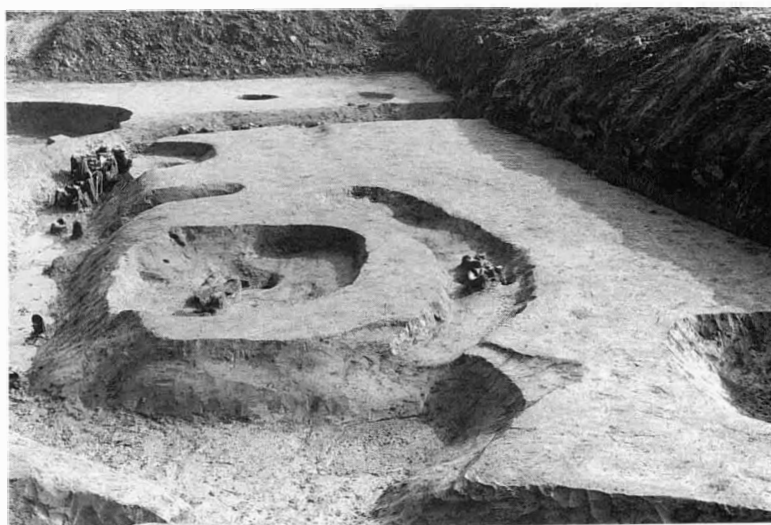
円形周溝3基 (SDZ-4・5・7) と方形周溝2基 (SDZ-6・8) が確認されている。連続的に構築された該期の周溝墓群としてとらえられるが、出土遺物や重複関係からある程度の時間差を考慮すべきであろう。

円形周溝墓は、径7～8m程度の小規模周溝であり、複数の開口部が確認される。隣接して構築された2基のうちSDZ-4の溝中には大形壺2個体を利用した土器棺が埋置される。方形周溝SDZ-6が重複し北半分が失われているSDZ-7は浅い掘り込みの溝により、土器数個体が一括出土している。埋葬施設と目される土壌(SK-10)からは、人骨とともに各種副葬品が検出されている。

方形周溝墓は、最大長16mを測る大形のSDZ-6と、一辺10m内外のSDZ-8が隣接して構築される。両者ともに周溝一辺の中央に開口部が設けられ、溝の掘り込みは0.7m近くの深さが確認される。SDZ-6の溝中からは多量の土器出土が認められる。



Ⅲ区西半の全景



弥生V期周溝墓群 (SDZ-6・7)

弥生時代V期土壙群

方形周溝墓SDZ-6周辺には、4基の土壙が確認されている（SK-11~14）。長さ2m内外の長方形を呈し、3基からは人歯を含む骨片の遺存が確認され、いずれも墓壙の可能性をもつものである。SK-12には木棺の痕跡と判断される掘り方が認められ、木棺墓となる可能性は高い。出土遺物としては、SK-11より鉄鏃、SK-12・14からは鉄釧の出土がある。時期特定の確実な資料とはならないが、弥生時代V期の所産と判断しておきたい。

土壙群の分布状態から、周溝墓との関係が想定され、両者一連となって該期の墓域が構成される可能性が指摘される。周溝墓群は、該期でも古相の土器出土が認められる小形の円形周溝墓と、新相の大形の方形周溝墓の存在が明らかである。土壙群は、そのいずれかとの連関において理解すべき性格をもつといえよう。

個別遺構の詳細と出土遺物に関する記載は次章に譲る。



弥生V期周溝墓（SDZ-8）東半



（SDZ-8）西半



弥生V期土壙（SK-12）



土壙内出土鉄釧（SK-12）

5 A区の概要

幅員23～16m、延長67mにわたって調査されたこの地区では、比較的広い面積での調査が実施され、平安時代住居群、古墳時代溝・周溝墓、弥生時代各期の住居群など、各時代にわたる濃密な遺構分布が検出された。特に平安時代・弥生III期の中心的居住域に該当する。

平安時代住居群

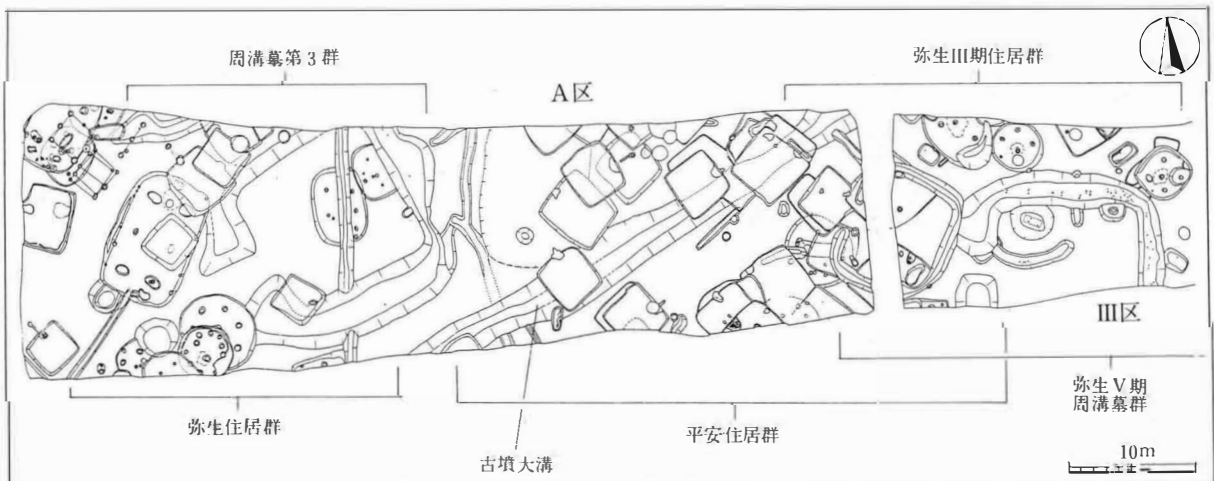
調査範囲の東半に平安時代住居跡24軒が激しく重複しながら密集して分布する。新期に属する1軒を除いて、古・中期の所産であるが、それぞれがさらに重複関係をもつため、全てを同時存在ととらえることはできない。一定範囲において連続的に住居位置を移動した結果とみることが妥当である。古期は北西カマド、中期は北東カマドとなる傾向も指摘される。これにたいして、西半の範囲には該期の住居分布が疎となる。このうちのSB-44・45は千曲川氾濫砂により覆われており、仁和年間の大洪水による同時埋没が想定され、見逃せない資料である。



A区東半の全景



A区西半の全景





平安時代掘立柱建物



平安時代住居の重複 (S B-40付近)



平安時代住居の重複 (S B-25付近)



平安時代住居の重複 (S B-50付近)



古墳時代大溝 (S D-15)



溝底の土器出土状態 (S D-15)

古墳時代周溝墓第3群

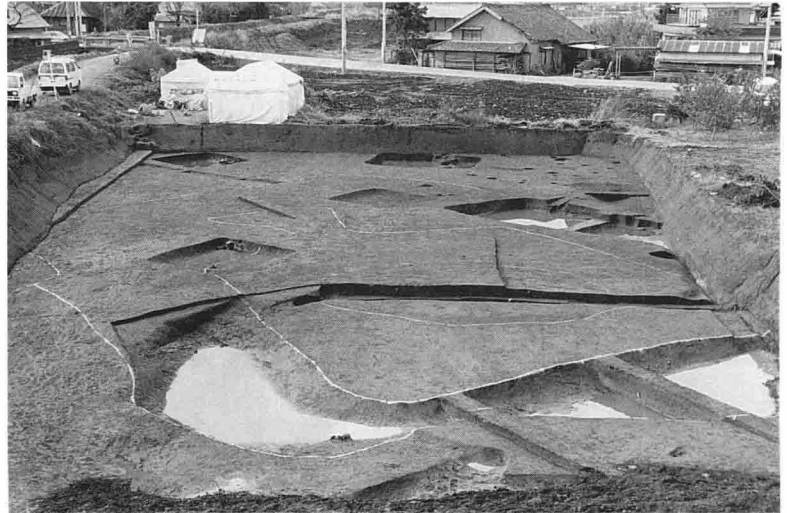
最大長21mを測る大形の周溝墓SDZ-9と、周溝の一部のみ確認されたSDZ-10をもって、該期の周溝墓第3群とする。両者とも突出部をもつ前方後方形を呈し、周溝内から底部穿孔壺を含む土器出土が認められる。詳細は次章に譲るが、SDZ-9区画内には平安時代遺構の掘り込みが認められず、同時期においては、おそらくは墳丘が意識されていたらしいことが示唆される。

古墳時代大溝

調査範囲東半を斜めに縦断するSD-15は、最大幅4m深さ1m近くに達する大規模な溝である。西から東へ若干の比高差を有するが、延長30mでその差は僅か20cm程度であり水路としてはやや落差が足りない。溝底からは完形に近い数個体の土器出土があるものの、生活に関連した遺物廃棄は認め難い。溝の方位が周溝墓の主軸と一致していることも重視され、周溝墓群との関連において理解すべき溝施設と位置付けたい。

弥生時代住居群

調査範囲西半には、III期8軒(SB-54~58・60~62)と、V期2軒(SB-52・59)の住居が検出されている。III期の住居は一部で激しく重複しており、該期の住居としては特異な密集域を見せる。これに付属するらしい、断面漏斗形を呈する井戸(SK-31・34)も存在する。V期の住居では長軸10mを測る大形住居の存在が注目される。SD-19とした完掘していない遺構も該期大形住居となる可能性がある。



周溝墓第3群の検出状態 (SDZ-9)



周溝墓の全景と大きさ (SDZ-9)



弥生時代住居群



弥生III期の住居 (SB-55・57)



(SB-54・56・58)

地区	遺構 No.	時代・期	遺構		遺物		
			規模・平面形	施設等	量	土器 概要	その他
II III	SB-8	弥生・V	6.8 × 長方形	火災住居	少	炭化材 炭化編物	
III	SB-9	弥生・V	—	—	中		
III	SB-10	弥生・III	径4.6 円形	炉	多	土器一括廃棄	
III	SB-11	平安・中	3.6 × 方形		少		
III A	SB-12	平安・古	5.0 × 方形	北東カマド	中		
III A	SB-13	平安・中	5.4 × 方形		中		土錘
III	SB-14	弥生・III	楕円形?	炉	多	土器一括廃棄	
III	SB-15	弥生・III	径4.1 円形	炉	少		管玉・太型蛤刃・扁平片刃
III	SB-16	平安?	方形	別住居重複?	少		
III	SB-17	弥生・III	5.0 × 4.8 隅丸方形	炉	中		石鏃
III	SB-18	平安?	方形		少		
A	SB-19	平安・新	4.1 × 3.6 方形	東カマド	2		
A	SB-20	平安・古	4.0 × 3.9 方形	北東カマド	9	墨書	釘?・鉄滓
A	SB-21	平安	2.7 × 4.6 長方形	北東カマド	2	墨書	
A	SB-22	平安・古	4.8 × 4.6 方形	北東カマド	15	墨書	鑿・刀子・鉄滓
A	SB-23	平安・中	方形	北東カマド	2		
A	SB-24	弥生・V	方形		1		
A	SB-25	平安・古	4.3 × 方形	北西カマド	1	墨書	鉄滓
A	SB-26	平安・中	4.3 × 方形		3		
A	SB-27	平安・古		北西2連カマド	7		
A	SB-28	平安?	4.2 × 方形		5		
A	SB-29	平安・古	4.2 × 4.1 方形		8		刀子・鹿角
A	SB-30	平安・中?	方形		2		鎌
A	SB-31	平安・古	4.4 × 方形	北西カマド	6		
A	SB-32	平安・中	4.6 × 4.5 方形	北西カマド	11	墨書	
A	SB-33	平安・中	4.4 × 4.1 方形	北東カマド 煙道	13	墨書	鉄滓
A	SB-34	平安・中	方形		6		
A	SB-35	平安・中	方形		4	黒色耳皿	
A	SB-36	弥生・III	径5.9 円形		3		磨製石斧
A	SB-37	平安・古	4.5 × 4.2 方形	北西カマド	9		鉄滓

表5 III・A区検出遺構

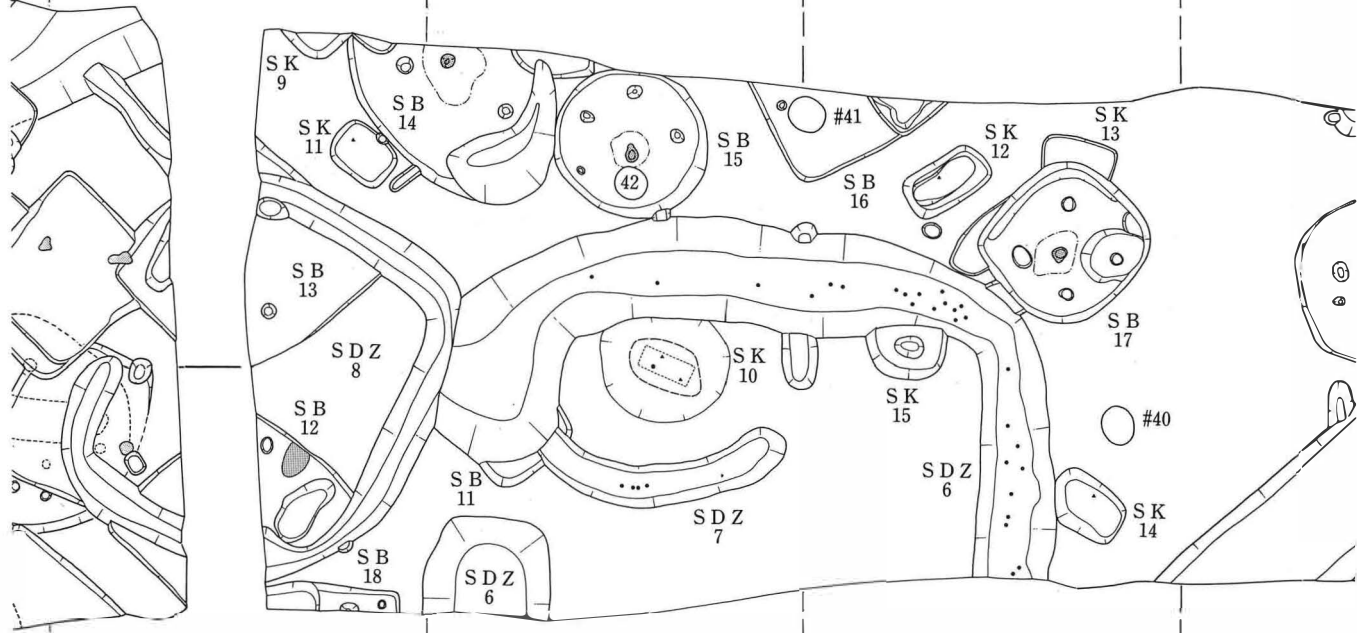
地区	遺構 No.	時代・期	遺構		遺物		
			規模・平面形	施設等	量	土器 概要	その他
A	SB-38	弥生・Ⅲ	円形		3		
A	SB-39	平安	方形		1		
A	SB-40	平安・古	5.2 × 4.7 方形	北西カマド	11	墨書	鉄滓・鹿齒
A	SB-41	平安・古	方形		4		
A	SB-42	平安・古	4.2 × 4.0 方形	北西カマド	6		
A	SB-43	平安	方形		1		
A	SB-44	平安・中	3.6 × 3.5 方形	氾濫埋没 北東カマド	5	仁和一括遺物	
A	SB-45	平安・中	3.4 × 3.2 方形	氾濫埋没	3		
A	SB-46	古墳・後	4.9 × 3.8 長方形	北西カマド	11		紡錘車・耳環
A	SB-47	平安・古	3.4 × 3.3 方形	北西カマド 煙道	7		
A	SB-48	平安?	3.8 × 3.5		3		
A	SB-49	平安・古	4.5 × 4.3 方形	北西カマド 煙道	10		
A	SB-50	平安・古	4.7 × 方形	南西カマド	7		刀子
A	SB-51	平安・古	方形		2		
A	SB-52	弥生・Ⅴ	× 5.0 隅丸長方形		10		
A	SB-53	平安?	—		1		
A	SB-54	弥生・Ⅲ	径4.4 円形	炉	5		有孔円板・鉄滓? 石鏃・石斧
A	SB-55	弥生・Ⅲ	4.4 × 隅丸長方形		6	漆彩文鉢等一括出土	石鏃
A	SB-56	弥生・ⅢⅣ	隅丸長方形		12		石鏃・扁平片刃・石斧
A	SB-57	弥生・Ⅲ	6.1 × 4.4 隅丸長方		8		石鏃・管玉
A	SB-58	弥生・Ⅲ	径6.4 円形		3		石鏃・扁平片刃・有孔円板
A	SB-59	弥生・Ⅴ	10.2 × 6.8 方形	炉 側壁柱穴	11		石鏃・石包丁・石斧・ガラス小玉
A	SB-60	弥生・Ⅲ	円形?		3		骨針・石鏃・石斧
A	SB-61	弥生・Ⅲ	隅丸?		5		石斧・鹿角
A	SB-62	弥生・Ⅲ?	円形?		3		
A	SB-63	平安	方形?		4		
Ⅲ	SD-8	平安?	幅2.4 ~		少		
Ⅲ	SD-9	弥生?	幅1.2 ~	SDZ-3 との関係は不明	少		
Ⅲ	SD-10	平安?	幅0.5 ~		—		
Ⅲ	SD-11	平安?	幅1.1 ~		—		
Ⅲ	SD-12	平安?	幅0.5 ~		—		
Ⅲ	SD-13	平安・古	幅5.0 ~	複数溝の重複?	多		
A	SD-14	平安・古	幅0.7 ~		1		ふいご羽口
A	SD-15	古墳・前	幅4.0 ~		23	溝底土器5個体	刀子?
A	SD-16	弥生・Ⅲ?	幅1.1 長さ3.7		2		磨製石斧
A	SD-17	平安?	幅0.5 ~		2		
A	SD-18	弥生・Ⅲ	幅0.9 ~		2		
A	SD-19	弥生・Ⅴ	8.4 × 弧形	住居上面?	7		
A	SD-20	平安?	幅0.6 ~		1		
A	SD-21	平安	幅1.2 ~		3	人骨2体	
ⅡⅢ	SDZ-3	古墳・前	前方後方形	周溝墓	少	穿孔壺破片(SD-3)	

表 5 - 2

地区	遺構 No.	時代・期	遺構		遺物		
			規模・平面形	施設等	量	土器概要	その他
Ⅲ	SDZ-4	弥生・Ⅴ	径7.2 円形 開口2	周溝墓	中	周溝内壺棺等	ガラス小玉(土器棺)
Ⅲ	SDZ-5	弥生・Ⅴ	径8.4 円形 開口4	周溝墓	少		
Ⅲ	SDZ-6	弥生・Ⅴ	16.7× 方形	周溝墓	多	周溝内土器一括出土	
Ⅲ	SDZ-7	弥生・Ⅴ	径7.7 ? 円形?	周溝墓 SK-10 墓墳	中	周溝内土器一括出土	
Ⅲ A	SDZ-8	弥生・Ⅴ?	10.3×8.8 方形	周溝墓	少		銅指輪
A	SDZ-9	古墳・前	幅4.2 ~ 前方後方		57	溝内埋没土器7	SB-54・58・59 の混入多い
A	SDZ-10	古墳・前	幅3.0 ~ 前方後方		9	溝内埋没土器4	
Ⅲ	SK-5	平安?	×1.0	墓	—	骨片	
Ⅲ	SK-6	弥生?		墓	少	骨片	
Ⅲ	SK-7	弥生・Ⅲ	3.2 ×2.4		多	土器一括出土	
Ⅲ	SK-8	平安	1.6 ×1.1	SDZ-4 と無関係	少		
Ⅲ	SK-9	平安		住居?	少		
Ⅲ	SK-10	弥生・Ⅴ	径3.4	SDZ-7 墓墳 木棺?	少	高坏	人骨・ガラス小玉・鉄剣・鉄釧
Ⅲ	SK-11	弥生・Ⅴ?	1.7 ×1.2	墓?	—		鉄鏃
Ⅲ	SK-12	弥生・Ⅴ?	2.4 ×1.2	墓 木棺痕跡	少		骨片・鉄釧
Ⅲ	SK-13	弥生・Ⅴ?	1.9 ×	墓	—		骨片
Ⅲ	SK-14	弥生・Ⅴ?	2.1 ×1.4	墓	少		鉄釧・骨片・人歯
Ⅲ	SK-15	平安	2.1 ×	炭化物堆積	少		
A	SK-17	平安	1.2 ×0.9 楕円		1		
A	SK-18	弥生?	×0.9 弧形	溝?	2		
A	SK-19	中世	径1.1 円形	井戸	2		
A	SK-20	平安・中	径2.2 円形	井戸 氾濫砂覆土	2		
A	SK-21	平安・中	径1.3 円形	井戸	1	土器投げ込み	
A	SK-22	平安・新	1.9 ×0.9 長方形	墓	4	副葬土師坏3	人骨
A	SK-23	中世	径1.0 円形	井戸	1		
A	SK-24	古墳・前	×0.9 楕円形		1		
A	SK-25	平安・中	径1.9 円形		2		土鏃
A	SK-26	平安	2.9 ×1.2 矩形		2		鹿歯
A	SK-27	古墳	1.4 ×0.6 楕円形	墓	2		人歯・管玉
A	SK-28	平安?	径0.8 円形	井戸	1		
A	SK-29	弥生・Ⅲ	径1.3 円形		1	甕1 個体	
A	SK-30	弥生・Ⅲ?	×0.7 楕円形		2		
A	SK-31	弥生・Ⅲ	径3.5 円形	井戸 断面漏斗形	3		石鏃
A	SK-32	弥生・Ⅲ?	1.5 × 楕円形?		1		
A	SK-33	?	0.8 ×0.6 楕円形		1		
A	SK-34	弥生・Ⅲ	径3.0 円形	井戸 断面漏斗形	4		管玉・石鏃・石斧
A	SK-35	弥生・Ⅱ?	—		1		
A	SK-36	弥生・Ⅱ?	—		2		
Ⅲ	井戸	中世	No.34・36・37・39・42			No.39より完形内耳	
A	掘建	平安	2.5 ×2.5				
A	検出面				93		石器各種

表5-3

61500



A区

61480

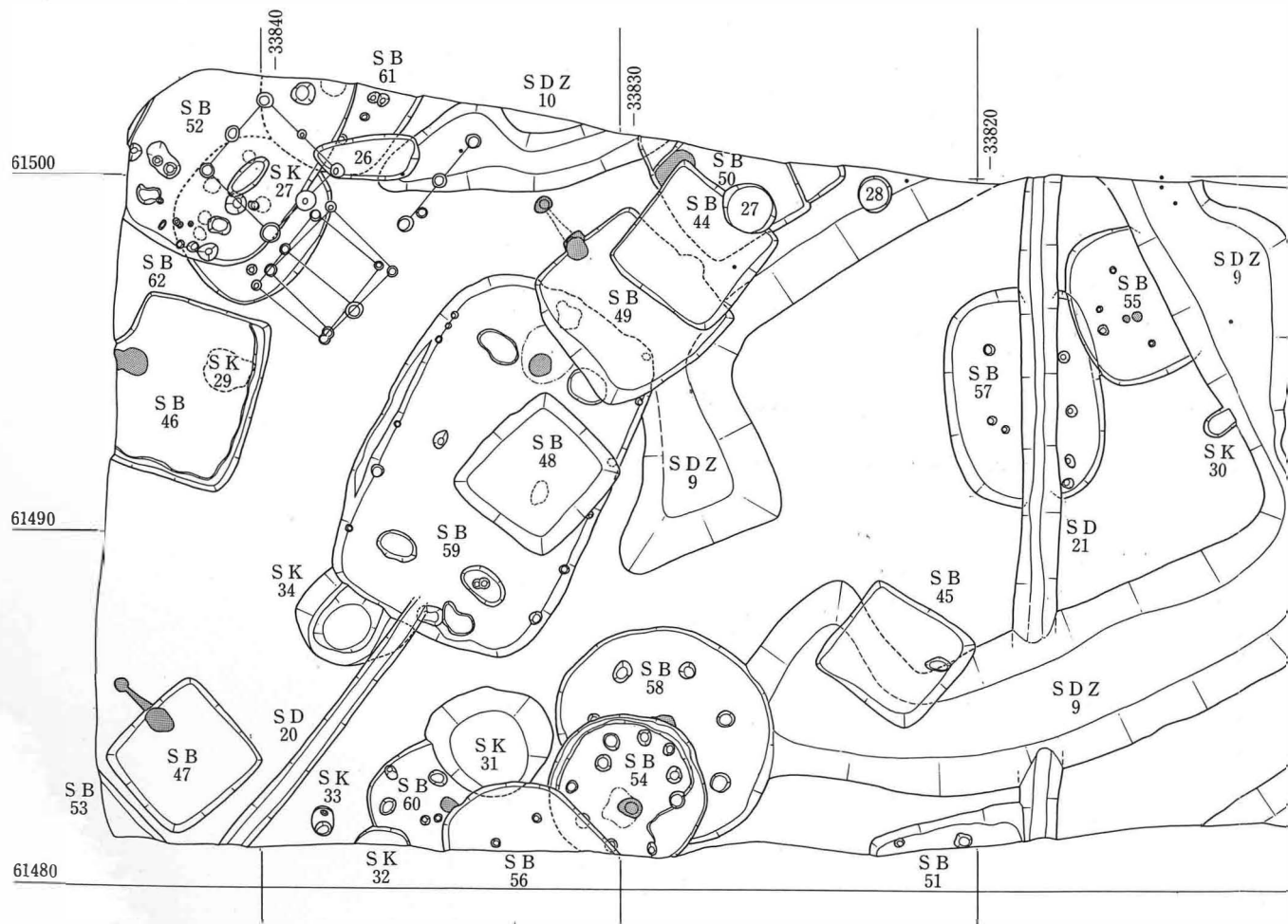


图9 III区·A区

6 SIA区の概要

聖川の南側に位置するこの地区では、平安時代住居群と弥生Ⅰ・Ⅱ期の遺構が集中して検出された。

平安時代住居群

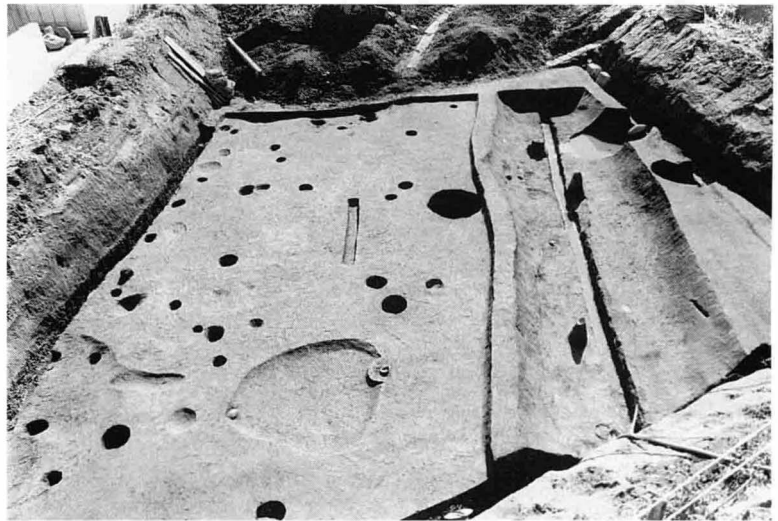
C区で検出された平安時代の大溝SD-26に連続するSD-28が確認されたことにより、現在位置への聖川固定が、これをさかのぼる時期にないことが確定した。大溝より東に重複しながら分布を見せる古・中期の住居8軒は、A・C区の該期住居群と一連の集落を形成するものとなる。なお、上層では平安時代新期の住居跡とともに土壌が多数検出されているが出土遺物は少なく、形態も不明瞭であり、性格は不明である。

弥生時代Ⅱ期住居群

4軒が検出され、いずれも円形を呈するものと推定される。SB-106・107は、比較的明瞭に検出されたが、かなり浅い掘り込みであり、床などの構造には不明確な点が多い。調査範囲北半に分布する柱穴群の多くも、該期に属する可能性が高い。

弥生時代Ⅰ期

最下層で検出に及んだSK-105は、掘り込みがやや不明確であるものの、弥生時代Ⅰ期の指標とした「氷式」土器が一括出土している。平安時代の大溝SD-28底面直下に検出された石囲炉(SB-108)では、炉石に凹石・磨石が利用されており、該期に属する可能性は極めて高い。このほか遺構として明確に確認できなかったものの、石蓋をもった埋甕と打製石斧の集積が平安住居(SB-99)の床下から検出されている。また、検出面からの該期遺物出土は調査地全域で最も顕著に認められるところであり、該期の中心的な居住域として把握されるものである。



SIA区北半の全景(下層)



SIA区南半の全景(平安時代)





S I A区南半（下層）



S I A区南半（最下層）



石囲炉（S B-108）



打製石斧集積（S B-99床下）

地区	遺構 No.	時代・期	遺構		遺物		
			規模・平面形	施設等	量	土器 概要	その他
SIA	SB-89	平安・新	4.6 × 4.3 方形	東カマド	4		刀子
SIA	SB-90	弥生・II	径3.3 円形		2		石斧
SIA	SB-91	弥生・II	径3.0 円形		3		石鏃
SIA	SB-92	平安・中	4.5 × 方形	南東カマド	3		石鏃
SIA	SB-93	弥生・III	径3.8 円形	炉	2		
SIA	SB-94	弥生・III	—		2		磨製石斧
SIA	SB-95	平安・新	3.7 × 3.0 方形	北カマド	4	緑釉	鉄滓
SIA	SB-96	平安・中	3.7 × 3.1 方形		4		鉄滓
SIA	SB-97	平安・中	4.1 × 3.5 方形	北西カマド	3		
SIA	SB-98	平安・中?	3.7 × 3.2 方形	北東カマド	3		刀子
SIA	SB-99	平安・古	5.3 × 4.1 方形	北西カマド	12		下部に弥生I期埋甕・石斧集積
SIA	SB-100	平安・古	3.2 × 方形	北西カマド	5		
SIA	SB-101	平安・古	4.2 × 4.2 方形	北東カマド	2		鉄滓
SIA	SB-102	平安・中	方形		2		鉄滓
SIA	SB-103	平安・古	方形		4		

表6 S I A区検出遺構

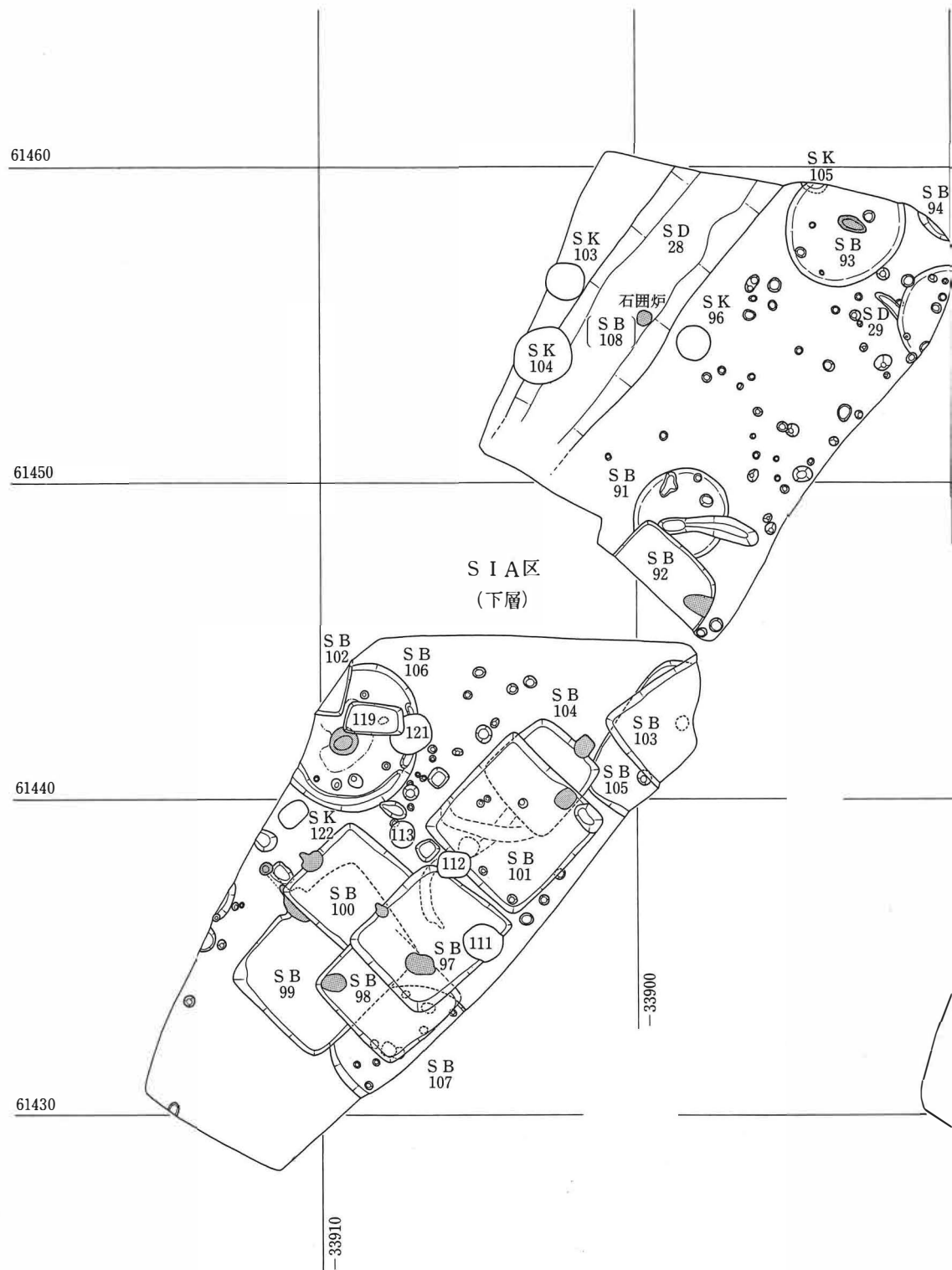


図10 S I A区

地区	遺構 No.	時代・期	遺構		遺物		
			規模・平面形	施設等	量	土器 概要	その他
SIA	SB-104	平安・古	2.9 × 2.9 方形	北東カマド	4		
SIA	SB-105	弥生・V	5.1 × 長方形?	炉	3		
SIA	SB-106	弥生・II	径4.8 円形	炉	4		石鏃
SIA	SB-107	弥生・II	径4.5 楕円形?	炉	5	工字文鉢	
SIA	SB-108	弥生・I	—	石囲炉 SD-28 底面	2		炉石凹石・磨石
SIA	SK-90	平安	1.2 × 0.9 方形		1		
SIA	SK-91	平安	1.3 × 0.9 方形		1		銅
SIA	SK-92	?	1.2 × 楕円形		1		
SIA	SK-93	平安	1.3 × 楕円形		1		
SIA	SK-94	?	—		1		
SIA	SK-95	?	1.8 × 1.1 長方形		1		
SIA	SK-96	?	3.1 × 1.0 楕円形		1		
SIA	SK-97	?	1.5 × 0.7 長方形		1		
SIA	SK-98	中世	径1.3 円形	井戸	3	青磁	
SIA	SK-99	?	1.7 × 0.9 長方形		1		
SIA	SK-100	?	1.2 × 0.8 方形		1		
SIA	SK-101	?	1.1 × 1.3 楕円形	溝付属	1		
SIA	SK-102	?	2.1 × 1.3 楕円形		1		
SIA	SK-103	?	径1.2 円形	井戸	1		
SIA	SK-104	?	径1.8 円形	井戸	1		
SIA	SK-105	弥生・I	0.7 × 円形?		3	土器一括出土	滑石原石
SIA	SK-106	?	2.2 × 2.2 方形		1		
SIA	SK-107	平安	径0.8 円形	炭化物堆積	1		
SIA	SK-108	?	径0.8 円形		1		
SIA	SK-109	平安	1.2 × 方形?		2		
SIA	SK-110	?	0.6 × 0.4 楕円形		1		
SIA	SK-111	平安	径1.3 円形		2		
SIA	SK-112	中世	1.2 × 0.8 方形	井戸?	2	内耳	
SIA	SK-113	近世	径0.8	井戸	2	陶器	
SIA	SK-114	平安	1.2 × 0.8 方形		1		鉄滓
SIA	SK-115	平安	0.8 × 0.7 方形		1		
SIA	SK-116	平安	1.6 × 方形?		1		
SIA	SK-117	?	1.1 × 0.6 長方形		1		
SIA	SK-118	?	径0.7 円形		1		
SIA	SK-119	平安	1.8 × 0.9 長方形		1		
SIA	SK-120	平安	—		1		鹿歯
SIA	SK-121	弥生?	径1.3 円形		1		
SIA	SK-122	弥生?	0.9 × 0.6 方形		1		
SIA	SK-123	弥生・II	—	埋甕	2		錘
SIA	SD-28	平安	幅3.0 ~	SD-26 の連続	7		
SIA	SD-29	弥生?	幅0.3 ~		1		

表6-2

7 C区の概要

古墳時代と平安時代の溝・住居群、弥生時代の井戸などが検出された。このほか、調査範囲の南端では近世か近代に使用されたと推定される炭焼窯(SX-3)1基が、弥生時代II期前後の包含層からは、黒曜石塊の集積が検出された。黒曜石集積は、10cm前後の大塊8点により、石器素材として埋納保持されたものであろうか。

平安時代住居群と大溝

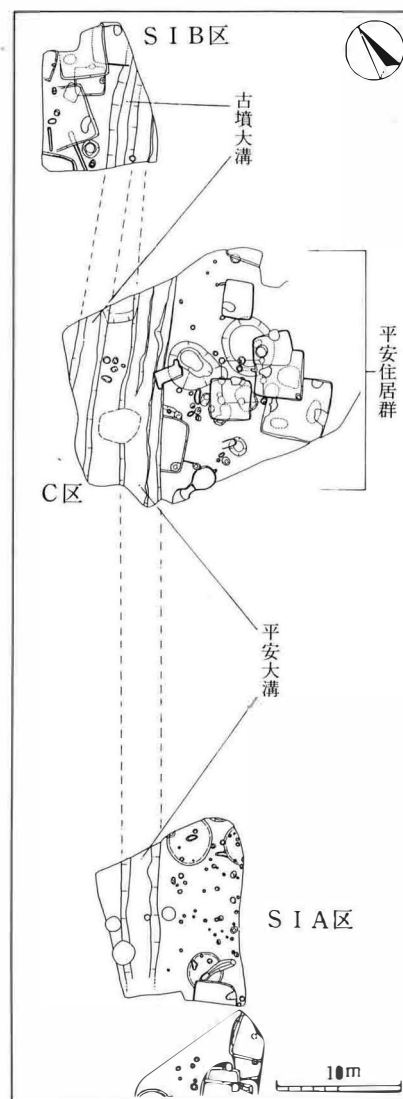
古・中期に属する住居6軒が重複した状態で検出され、このうち千曲川氾濫砂により埋没したSB-74は、A区の2軒と同時存在が想定できる。大溝(SD-26)はこの住居群とB・D区で検出されることとなる該期水田域とを区画する形で南西方向へと緩やかな傾斜をもって構築されている。覆土には砂礫の堆積が認められ、水路として機能したことが明らかである。ただし千曲川大洪水により水田が廃絶する時点では、この溝は既に埋没した状態にあり、覆土中に氾濫砂層の堆積は認められない。出土遺物は一部奈良時代の遺物を含み、構築年代を示唆しているが、構築目的が水田の造成に深く関与している可能性も指摘されよう。なお、大溝を境として西側は低地に属していたらしく、氾濫砂層の薄い堆積が一律に認められ、水田域として利用されていた可能性も予想されるところである。氾濫砂層はこれ以西で厚さを増し、水田域にその堆積範囲を広げている。



C区の全景(平安時代)



平安時代と古墳時代の溝(SD-25・26)



古墳時代の溝・住居・土壙

平安時代大溝に並行して検出されたSD-25は、古墳時代前期の所産であり、最大幅2.3 mの規模で南西方向へ緩やかな傾斜を示す溝である。この調査区では、東側に同時期の住居2軒の残欠(SB-80・81)が存在するが、これより西側に位置する各調査区には、さらに濃密な住居の分布が認められ、該期の居住域と周溝墓群を中心とした墓域とを区画する性格をもつと予想される。覆土中には、局部的に多量の破損土器が廃棄され、A区検出のSD-15と比較してより生活に密着した機能も想定される。なお、かろうじて遺存が確認されたSK-45からは、人歯とともに勾玉・管玉6点が出土し、該期あるいはやや時代を下げた墓域の一部を構成する資料となっている。

弥生時代Ⅲ期の井戸

SK-49・70の2基が確認される。確認面での平面規模4 m前後の円形を呈し、断面が漏斗形を呈する。掘り込みが深く底面までの検出に至らないが、検出面下1 mまで皿形に掘り込まれた後、直径1 m前後でさらに1 m以上掘削されていることが確認されている。該期井戸と位置付けて大過ないものとする。



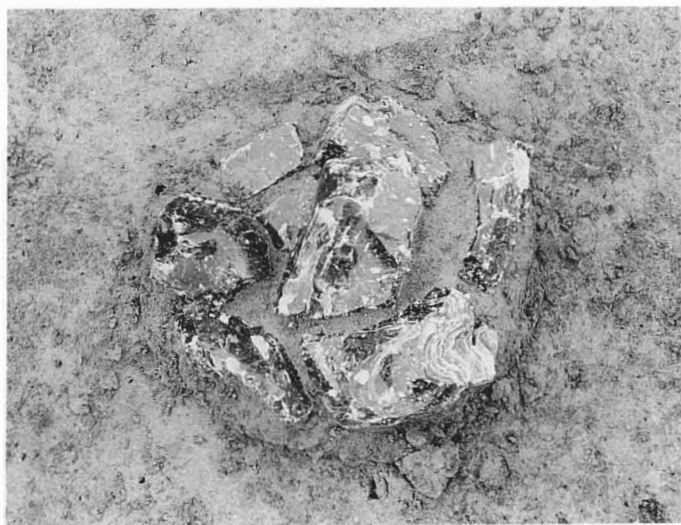
弥生時代の遺構群



弥生Ⅲ期井戸の断面 (SK-49)



古墳時代土壙 (SK-45)



黒耀石の集積弥生Ⅱ期

8 SIB・SIC・SID区の概要

いずれも小範囲に分断されたSIB・SIC・SID区では、平安時代と古墳時代の住居・溝が検出され、各時期の居住域の広がりを確認することができた。この他に弥生時代Ⅲ期の住居と井戸が検出されている。

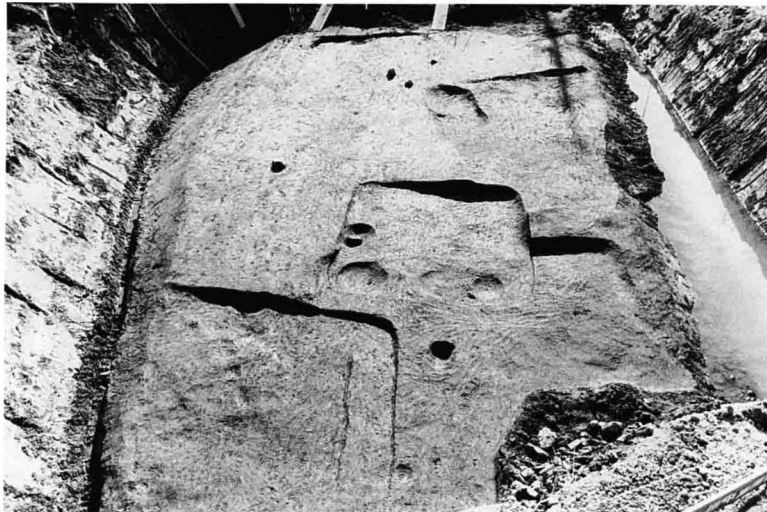
平安時代の住居群と溝

C区で確認された平安時代大溝の連続がSIB区においてかろうじて検出されている(SD-30)。水田として利用された大溝西側の低地範囲収束を示すものであろう。同時期の住居はSIC区にも分布を見せるが、密集度は大溝東側のそれと比較して疎と判断することができる。このほかSK-131からは馬骨の一部出土が確認され、埋葬施設の可能性も指摘されるところである。

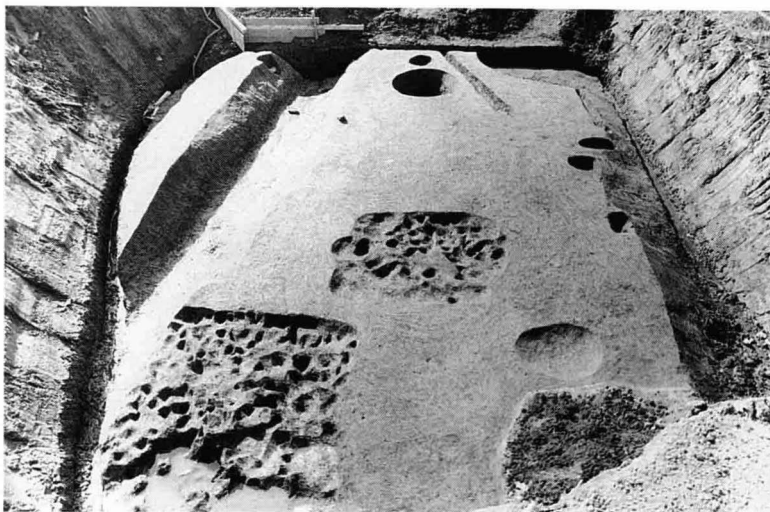
古墳時代前期の住居群と溝

C区において検出された古墳時代溝の連続SD-30の西側に、3地区あわせて4軒の住居が検出されている。重複することなく、やや間隔をおいた分布状態を示すものであり、B・D区のそれと共通した様相を示しながら、

良好な集落景観を見せている。個別住居の形態と出土遺物については次章において詳述するが、その構築年代には若干の時間差が含まれることは考慮されよう。



SIB区 (上層)



SIB区 (下層)





SIC区(下層)



SID区

地区	遺構 No.	時代・期	遺構		遺物		
			規模・平面形	施設等	量	土器 概要	その他
C	SB-74	平安・中	3.3 × 3.3 方形	氾濫埋没 北東カマド	5		鉄滓
C	SB-75	平安・中	4.0 × 3.8 方形	北西カマド	5		
C	SB-76	平安・中	3.0 × 2.4 長方形	北西カマド	1		
C	SB-77	平安・中	方形?		2		
C	SB-78	平安・古	3.2 × 2.8 方形	北西カマド	6	耳皿	
C	SB-79	平安・中	5.1 × 5.0 方形	北西カマド	3	墨書	
C	SB-80	古墳・前	4.4 × 方形?		5		
C	SB-81	古墳・前	方形?		3		
SIB	SB-109	平安	4.2 × 3.8 方形		1		
SIB	SB-110	平安・新	4.8 × 方形?	南西カマド	3		鉄滓
SIB	SB-111	平安・中	3.2 × 方形?	北東カマド	3		
SIB	SB-112	平安	2.4 × 2.3 方形	北東カマド	2		
SIB	SB-113	古墳・前	方形?	周溝	1		
SICD	SB-114	平安・中	4.1 × 3.7 方形		3		鉄滓
SICD	SB-115	平安・中	方形?		2		
SICD	SB-116	古墳・前	5.3 × 方形	炉	4		
SICD	SB-117	弥生・ⅢⅣ	5.3 × 楕円形?		5		磨製石斧
SICD	SB-118	古墳・前	5.4 × 方形?	炉 周溝	5		
SICD	SB-119	平安・古	3.3 × 3.1 方形	北東カマド	3		
SICD	SB-120	古墳・前	方形?	周溝	4		
C	SD-25	古墳・前	幅2.3 ~	SD-31 に連続	17	土器一括出土	
C	SD-26	平安・古	幅3.5 ~ 階段状	SD-28・30に連続	6		
SIB	SD-30	平安	—	SD-26・28に連続	1		
SIB	SD-31	古墳・前	幅2.2 ~	SD-25 に連続	7		管玉
SIB	SD-32	弥生	幅0.3 ~		1		
SICD	SD-33	平安	幅1.1 ~		1		

表7 C・SIB~D区検出遺構

地区	遺構 No.	時代・期	遺構		遺物		
			規模・平面形	施設等	量	土器 概要	その他
SICD	SD-34	平安?	幅1.2 ~		3		
C	SK-44	平安?	2.3 × 1.1 長方形	突出部	1		
C	SK-45	古墳	×0.6 長方形	墓	1		勾玉・管玉・人歯
C	SK-46	平安?	1.4 × 0.7 楕円形	SB-74 床下?	1		
C	SK-47	平安?	1.8 × 1.1 楕円形	SB-74 床下?	1		
C	SK-48	平安?	径1.2 円形		1		
C	SK-49	弥生・Ⅲ	4.0 × 3.7 楕円形	井戸 断面漏斗形	3		石鏃
C	SK-50	弥生・Ⅱ?	径1.3 円形		2		
C	SK-51	弥生・Ⅱ?	—	図無し	1		
C	SK-52	弥生・Ⅱ?	径2.3 円形		2		骨
C	SK-53	平安	径1.3 円形	SB-79 床下?	1		焼骨
C	SK-54	弥生・Ⅱ?		井戸	1		
C	SK-55	弥生・Ⅱ?	1.3 × 0.4 楕円形		1		
C	SK-56	弥生・Ⅰ?	径0.5 円形		1		
C	SK-57	弥生・Ⅱ?	径0.4 円形		1		
C	SK-58	弥生・Ⅱ?	1.0 × 0.6 楕円形		1		
C	SK-59	弥生・Ⅱ?	径0.8 円形		1		石鏃
C	SK-60	弥生・Ⅱ?	径0.8 円形		2		
C	SK-61	弥生・Ⅲ	2.0 × 1.5 楕円形		2	土器一括出土	
C	SK-62	弥生・Ⅱ?	径1.1 円形		1		
C	SK-63	弥生・Ⅱ?	径0.6 円形		1		
C	SK-64	弥生・Ⅱ?	0.8 × 0.4 楕円形		1		
C	SK-65	弥生・Ⅱ?	径0.5 円形		1		
C	SK-66	弥生・Ⅱ?	径0.4 円形		1		
C	SK-67	弥生・Ⅱ?	径0.4 円形		1		
C	SK-68	弥生・Ⅱ?	径0.3 円形		1		
C	SK-69	弥生・Ⅱ?	方形?		1		
C	SK-70	弥生・Ⅲ	径4.5 円形	井戸 断面漏斗形	5		石鏃
SIB	SK-124	平安	径1.3 円形	井戸	1		
SIB	SK-125	平安	1.0 × 0.7 楕円形		1		
SIB	SK-126	?	2.5 × 方形?		1		
SIB	SK-127	?	1.3 × 1.1 方形		1		
SICD	SK-128	中世?	径1.6 円形	井戸	0		
SICD	SK-129	中世?	径1.1 円形	井戸	2		
SICD	SK-130	?	径0.5 円形		1		
SICD	SK-131	平安・中	径1.8 円形	馬墓?	2		馬骨一括出土
SICD	SK-132	平安・新	1.5 × 0.8 楕円形		0		
SICD	SK-133	弥生・Ⅲ	径4.8 円形		1	井戸	
SICD	SK-134	?		図無し	1		
C	SX-3	近世・近代	1.9 × 1.7 楕円形	炭焼窯	1	瓦破片など	
C	掘建	古墳	3.3 × 3.3 方形	2 × 2間 総柱	1		

表 7 - 2

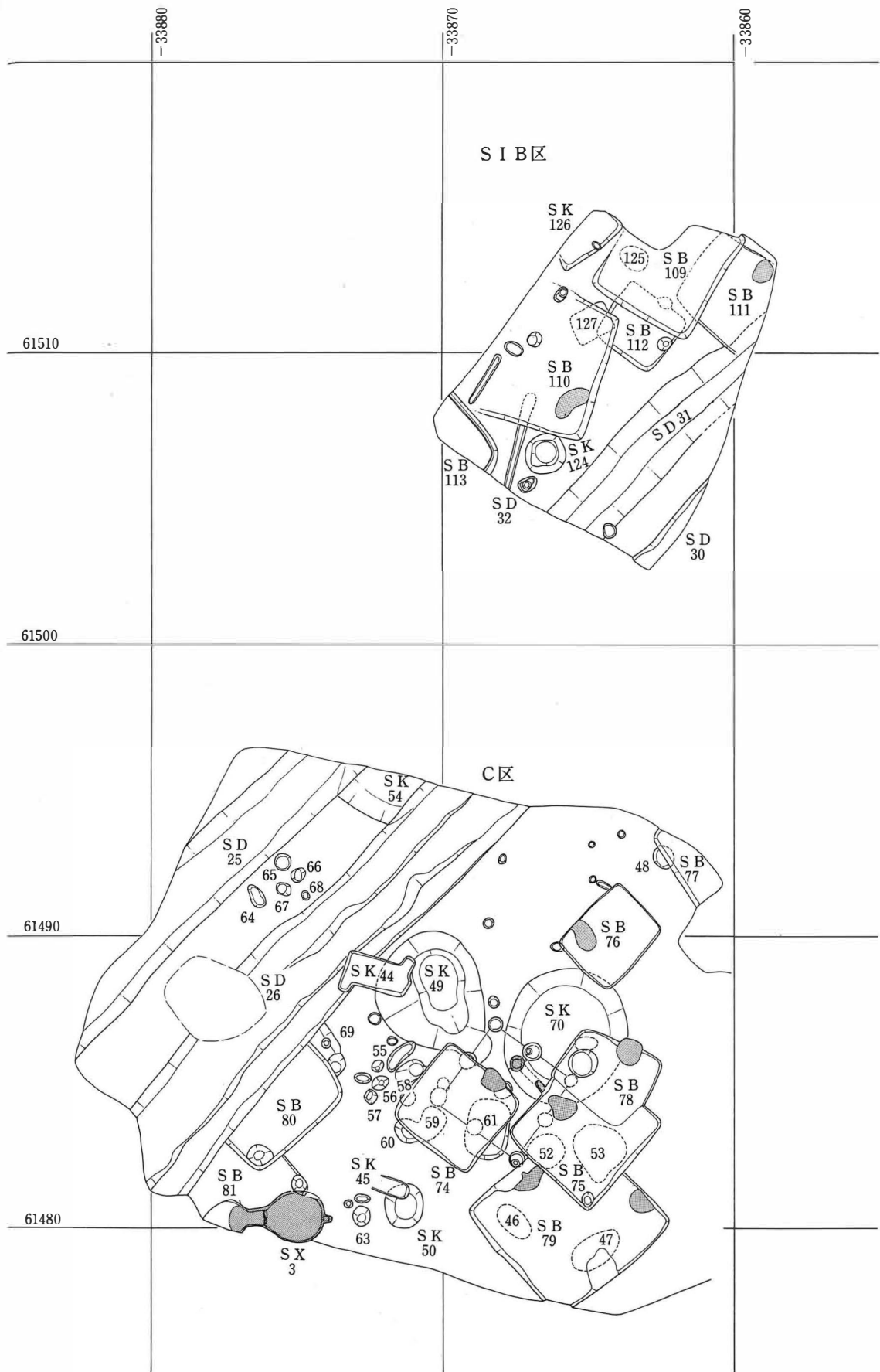


图11 C区·SIB区·SIC区·

9 B区の概要

延長74mにわたって調査されたこの地区では、上層に平安時代水田遺構とその後に構築された住居群、下層には古墳時代前期住居群と弥生時代Ⅰ・Ⅱ期の居住域が検出された。居住域としての利用は限定的であり、地形的には後背湿地への移行を示す。

平安時代水田遺構と住居群（上層）

調査範囲の東半には、地表下1mの位置に、厚さ30cm程度の砂層堆積が存在し、それに覆われる形で畦畔と水田面の一部が検出されている。西側にゆくほど砂層の堆積が薄くなり、遺構としての検出には及ばないものの、水田層の連続状態からみて、ほぼ全域が水田として利用されていたものと推定される。この地区における水田遺構は、仁和4年(888)千曲川の大洪水ともなう埋没と想定される石川条里遺跡水田遺構へと連続することは明らかであろう。該期の水田遺構の広がりを示す例となる。

なお、氾濫砂層を掘り込んだ新期住居2軒(SB-64・65)・溝等が検出されている。水田埋没後は復旧がかなわず、居住域に利用されたことを示す。

古墳時代前期の住居群と大溝（下層）

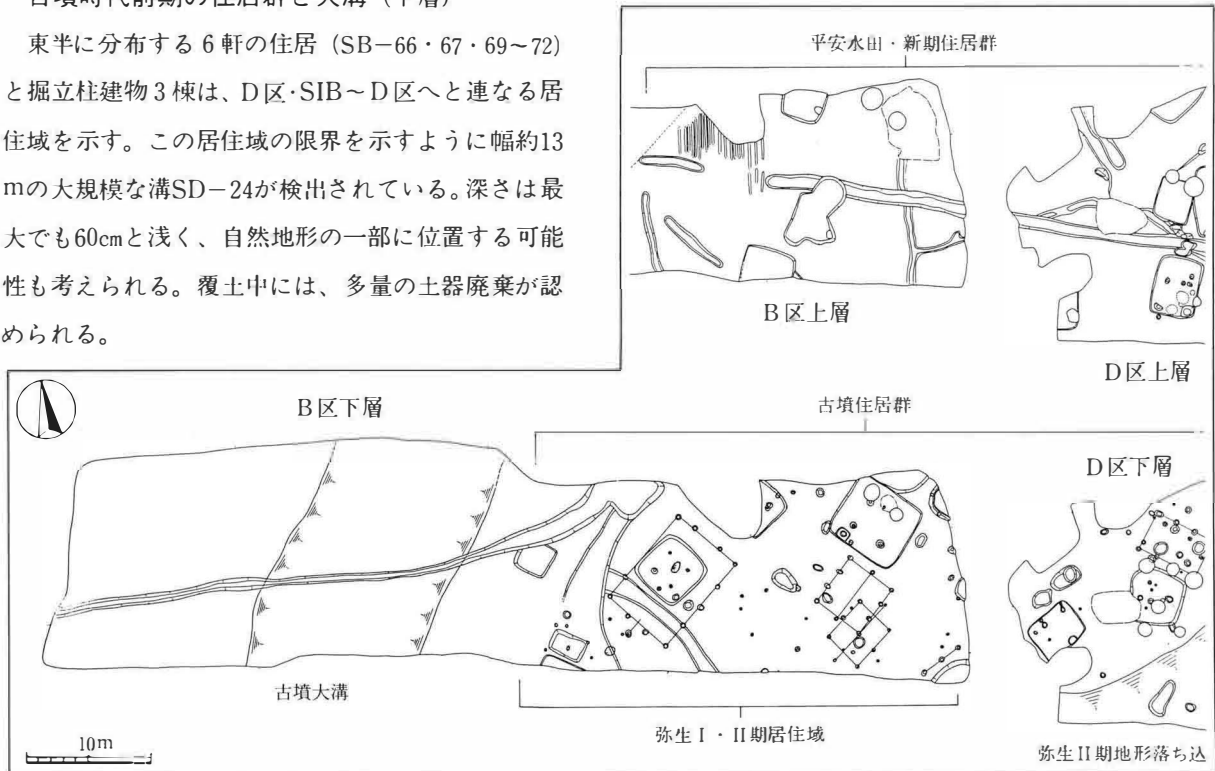
東半に分布する6軒の住居(SB-66・67・69~72)と掘立柱建物3棟は、D区・SIB~D区へと連なる居住域を示す。この居住域の限界を示すように幅約13mの大規模な溝SD-24が検出されている。深さは最大でも60cmと浅く、自然地形の一部に位置する可能性も考えられる。覆土中には、多量の土器廃棄が認められる。

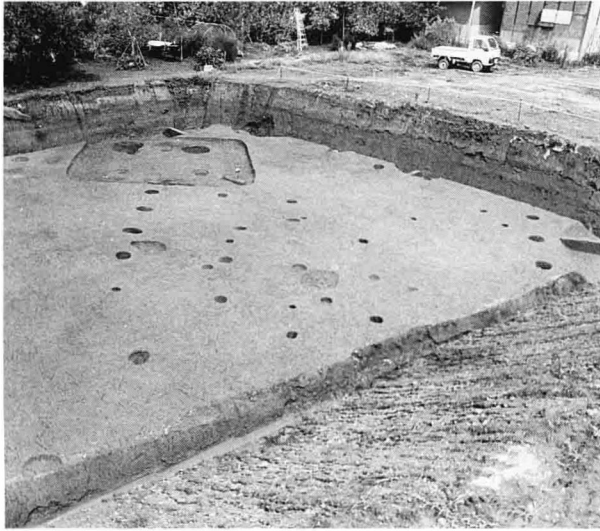


平安時代水田遺構（東より）



同上（西より）





古墳時代住居と掘立柱建物



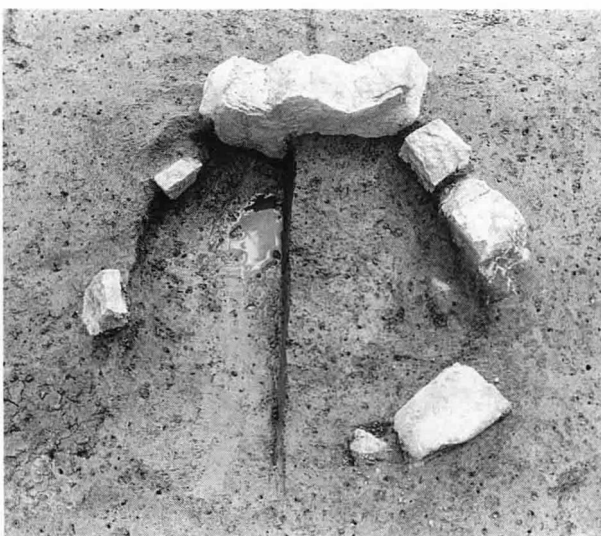
古墳時代大溝 (SD-24)

弥生時代Ⅰ・Ⅱ期の居住域 (最下層)

居住域としての利用が時間的に限定され、上部遺構の攪乱が少ないため、この地区では弥生Ⅰ・Ⅱ期の遺物包含層が比較的良好に遺存している。遺物出土の目立つ東半に限り、試掘坑を設定しながら包含の掘り下げを試みたが、50cmの厚さをもつ包含層は、黄褐色を呈して下層ほど砂質となり、明確な遺構検出に及んだものは少ない。Ⅱ期では壺を埋納したSK-42、方形小形の住居跡SB-73、Ⅰ期では石囲炉といくつかの地床炉などが確認される。包含層出土土器は「氷式」の直後段階が多数を占め、打製石斧類の一括出土(埋納)なども検出されている。



弥生Ⅰ・Ⅱ期包含層の検出



弥生Ⅰ期の石囲炉



打製石斧の集積

10 D区の概要

B区に連続する位置にあり、平安時代水田遺構・住居、古墳時代住居等共通した分布様相が認められる。このほか弥生III期住居1軒とII期の地形の落ち込みが検出された。

平安時代の水田遺構と住居

B区に連続する水田遺構をほぼ全域で検出した。B区から伸びる東西方向の畦畔は、屈曲して45°程度の傾きをもつ。屈曲部分には道路状の高まりが接続し、変則的な地割を見せている。なお、水田面からは完形土器3点が検出されている（後述）。

水田遺構埋没後に構築された平安新期の住居は5軒を数え、同期居住域としては密な状態にある。調査範囲を東西に縦断して一部B区に達する幅1m前後の溝(SD-27)は該期に属するが性格は不明である。

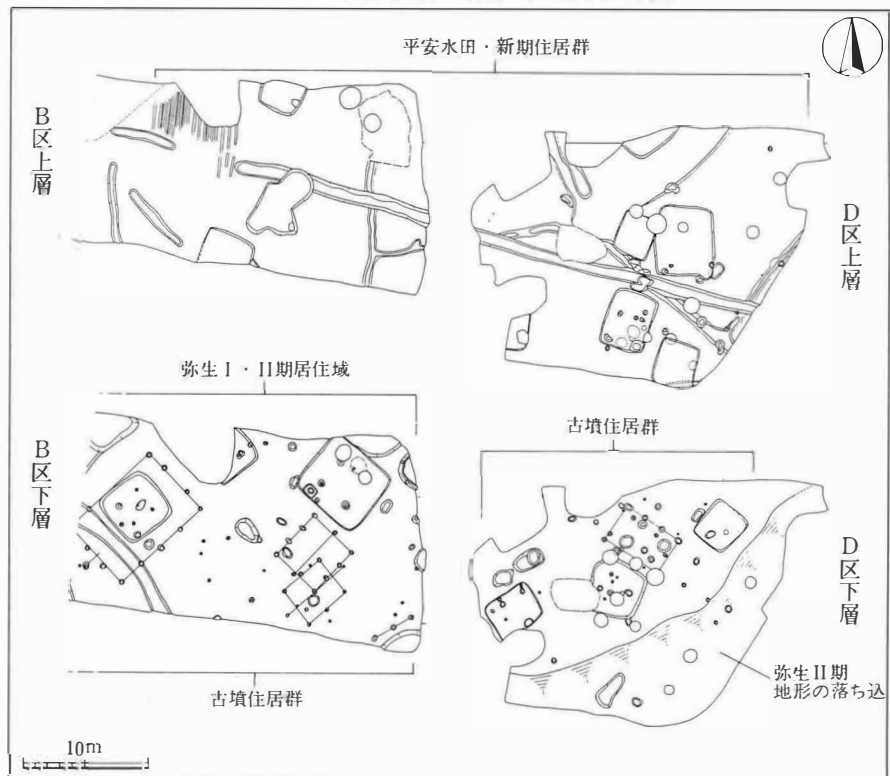
弥生時代II期の

地形落ち込み

調査範囲の南東側においては、弥生時代II期の遺物包含層が、大きく南東方向へと落ち込む状態で検出された。当初溝等の人為的な掘り込みとも考えたが、角度約20°、ほぼ直線的な傾斜を確認するに至り、埋没する自然地形として判断することとした。傾斜地上には土器破片と炭化物を多く含んだ黒褐色土が20cmの厚さで堆積し、その上部を厚い黄褐色土が被覆する。該期遺物包含層に黒褐色土層を認める例は他になく、この傾斜地



平安時代水田遺構と土器出土状態



がかなり低湿な環境下にあったことが示唆される。また、上部の厚い黄褐色土の存在は、急激な堆積作用によりこの落ち込みが埋没した状況を物語る。現在平坦面が形成されている自然堤防上にも、該期あるいはそれ以前に、自然堤防の形成途上として、起伏に富む地形が存在したことを想定しておこう。その後の時代の水田域としての利用や、聖川流路改修位置としての選定も、この自然地形の存在と無関係ではなかっただろう。



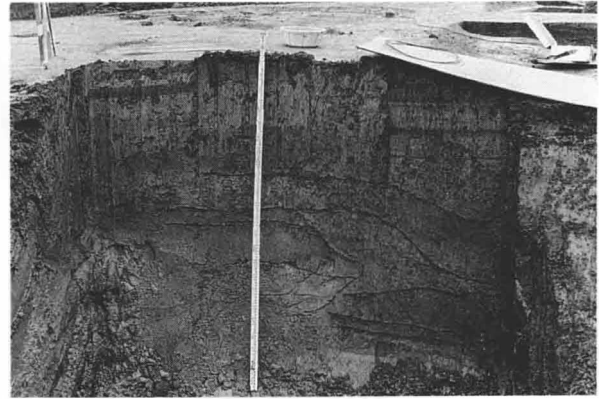
下層の土層と住居



弥生II期地形落ち込み



弥生II期の地形落ち込みの土層断面



さらに下層の土層断面

地区	遺構 No.	時代・期	遺構		遺物		
			規模・平面形	施設等	量	土器 概要	その他
B	SB-64	平安・新	3.5 × 方形	東カマド	1		
B	SB-65	平安	4.1 × 方形		2		
B	SB-66	古墳・前	方形?	周溝	2		
B	SB-67	古墳・前	6.2 × 5.6 方形	炉	7		
B	SB-68	弥生・I?	円形?		7		石斧
B	SB-69	古墳・前?	3.8 × 方形		2		
B	SB-70	古墳・前	4.6 × 4.5 方形	炉	7	土器一括出土	
B	SB-71	古墳・前	2.8 × 2.7 方形		4		
B	SB-72	古墳・前?	方形?		1		
B	SB-73	弥生・II	2.8 × 1.8 長方形	炉	2		
D	SB-82	平安・新	5.5 × 4.7 長方形		4		
D	SB-83	平安・新	4.8 × 3.7 長方形	東カマド	5		
D	SB-84	平安・新	× 3.2 長方形		1		

表8 B・D区検出遺構

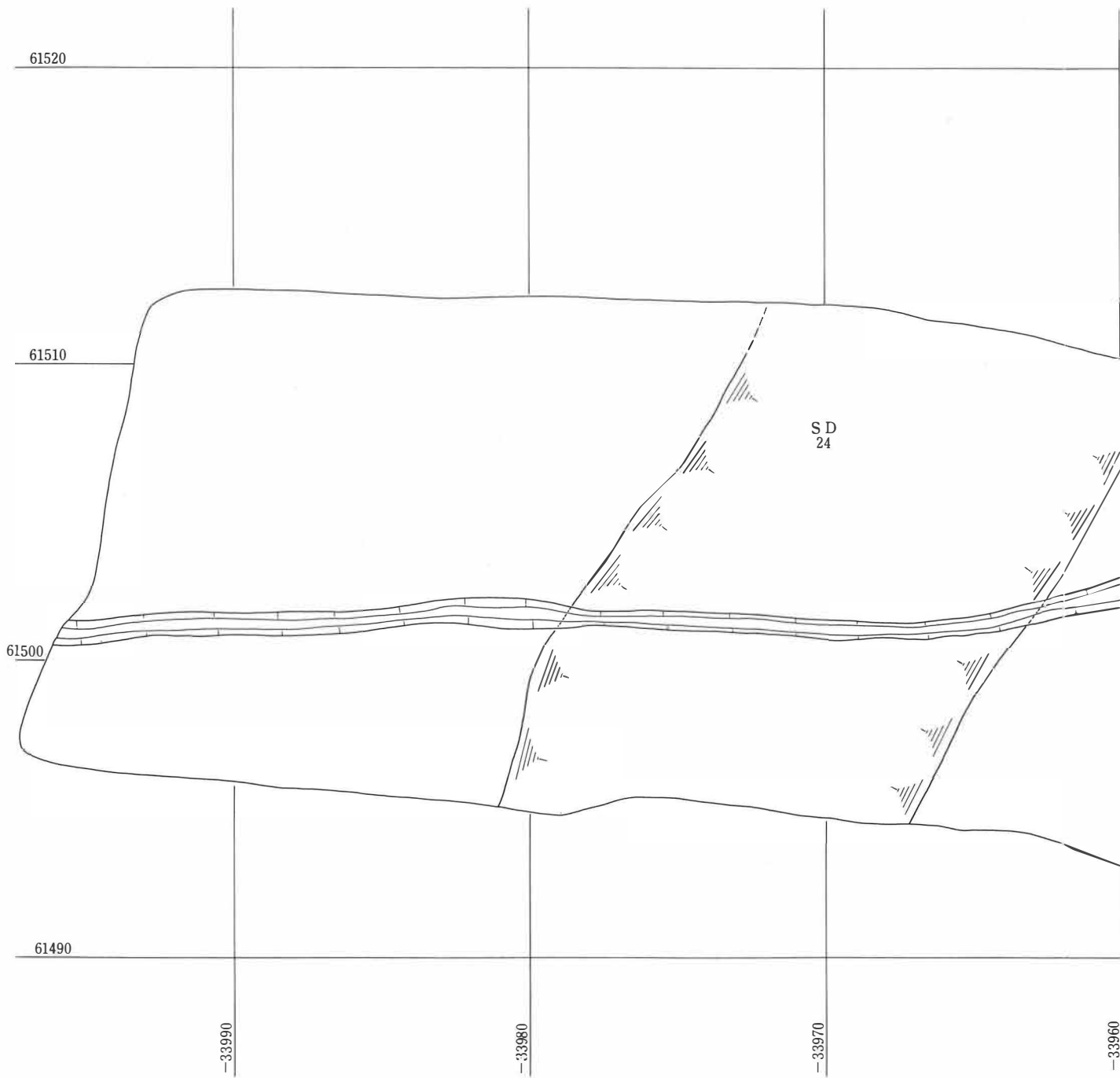


图12 B区全图

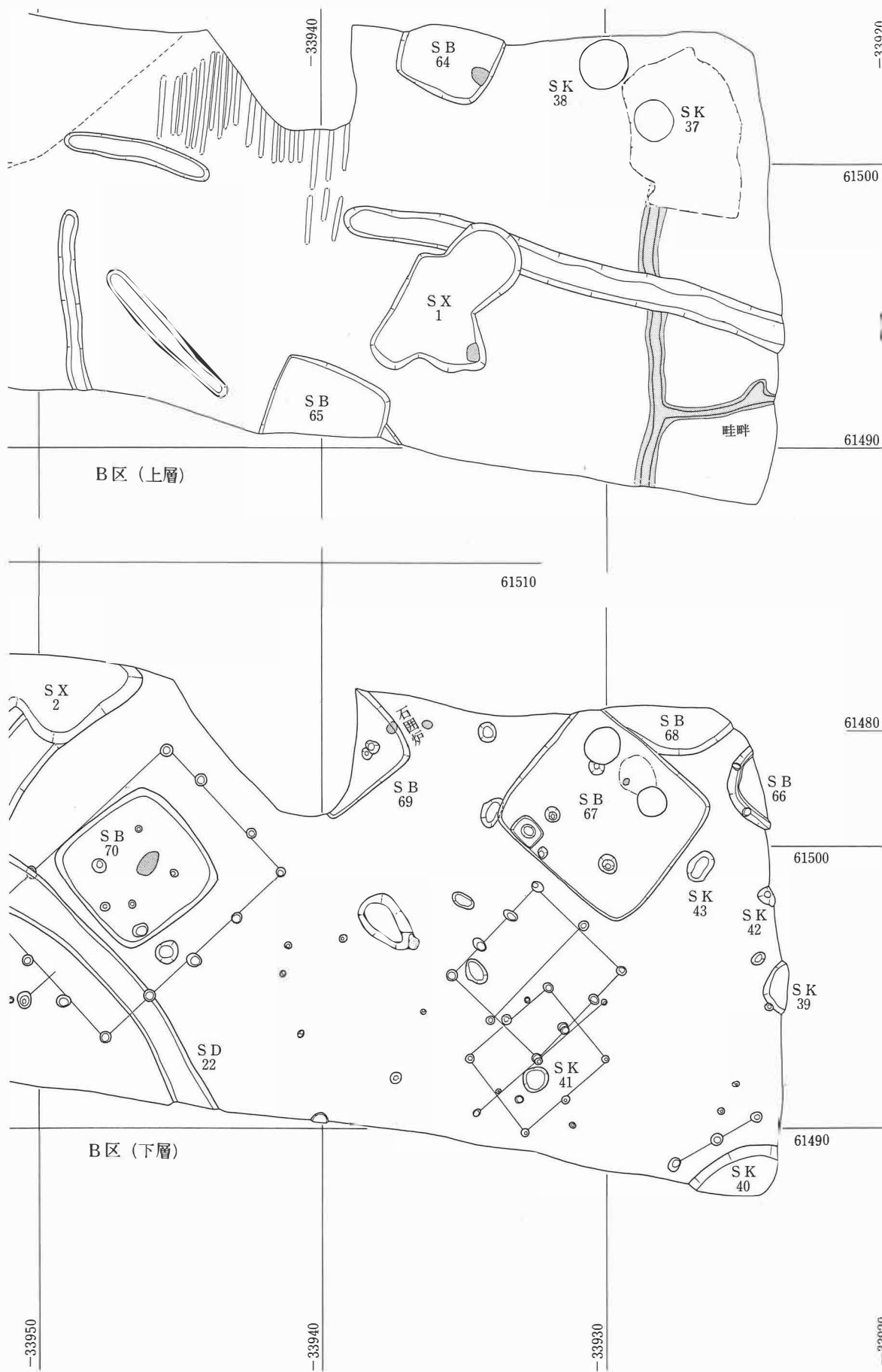


图13 D区全图

地区	遺構 No.	時代・期	遺構		遺物		
			規模・平面形	施設等	量	土器概要	その他
D	SB-85	平安・新	方形?	東カマド	3		馬歯
D	SB-86	弥生・Ⅲ	4.5 × 4.3 隅丸方形	炉	4		
D	SB-87	古墳・前	4.1 × 3.3 長方形		2		
D	SB-88	古墳・前	3.5 × 3.3 方形	炉	1	S字C類	
B	SD-22	古墳?	幅1.8 ~		2		
B	SD-23	平安	幅1.9 ~		7		
B	SD-24	古墳・前	幅13.2~	自然地形?	23	土器一括出土	
D	SD-27	平安	幅1.3 ~		1		
B	SK-37	中世?	径1.3 円形	井戸	1		
B	SK-38	中世?	径1.7 円形		1		
B	SK-39	弥生・Ⅱ?	楕円形?		1		
B	SK-40	弥生・Ⅰ?	円形?		1		
B	SK-41	弥生・Ⅱ?	径0.8 円形		1		
B	SK-42	弥生・Ⅱ	径0.6 円形	墓 土器棺	1		
B	SK-43	弥生・Ⅱ	1.2 × 0.7 楕円形		1		
D	SK-71	平安	径1.0 円形	井戸	2		
D	SK-72	平安	1.3 × 0.8 長方形		1		
D	SK-73	古墳・前	径1.1 円形	井戸?	2	土器一括出土	
D	SK-74	欠番	—				
D	SK-75	古墳・前?	径0.8 円形		1		
D	SK-76	古墳・前	径1.2 円形		2		
D	SK-77	中世	径0.9 円形	井戸	1	青磁	
D	SK-78	平安?	径0.7 円形	井戸	1		
D	SK-79	平安	2.9 × 1.5 楕円形		2		
D	SK-80	?	径1.4 円形		1		
D	SK-81	欠番					
D	SK-82	弥生・Ⅱ	径1.0 円形		1		
D	SK-83	弥生?	径0.5 円形		1		
D	SK-84	弥生?	径0.7 円形		1		
D	SK-85	弥生?	径0.5 円形		1		
D	SK-86	弥生?	径1.1 円形		1		
D	SK-87	弥生?	径0.6 円形		1		
D	SK-88	古墳・前	0.8 × 0.4 長方形		1		
D	SK-89	弥生・Ⅱ	2.5 × 1.4 楕円形		2		骨
B	SX-1	平安・新	6.3 × 不整形	竪穴住居?	7		
B	SX-2	古墳・前	4.2 × 不整形	竪穴住居?	2		
B	炉址	弥生・Ⅰ?		石囲炉	2		
B	掘建	古墳・前	3棟				
D	掘建	古墳・前	1棟	1 × 3間			
B D	水田	平安・中		氾濫埋没	3	水田面埋没土器	
D	落ち込	弥生・Ⅱ		自然地形?	8		石鏃

表 8 - 2

IV 各 説

1 弥生時代 I 期

SK-105 (SIA区)

全形を検出できなかったため、形態が明確ではないが、径0.7mほどの円形土壇と想定される。土壇内からは土器大破片が重なりあって出土し、波状口縁の浮線網状文大形浅鉢(1)、浮線文大形深鉢(2)の2個体が復元される。その他の個体は小破片にとどまり、浮線文浅鉢(3)、沈線文深鉢(4)、及び細密条痕(5~7)、捺糸文(8・9)破片が存在する。浮線網状文(1)は、石川日出志氏分類による、浮線文a3に属し、大洞A式新段階・馬見塚式に平行する可能性のある浮線文第2群として位置付けられる(『中部地方以西の縄文晩期浮線文土器』『信濃37-4』 1985)。

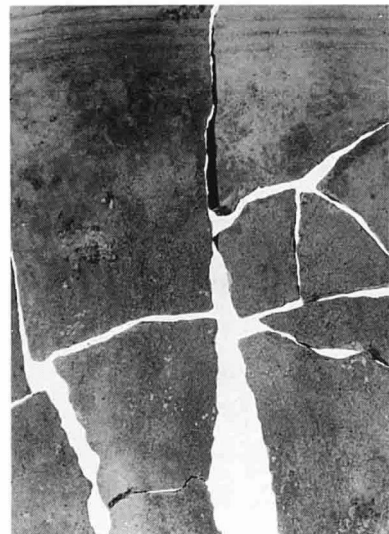
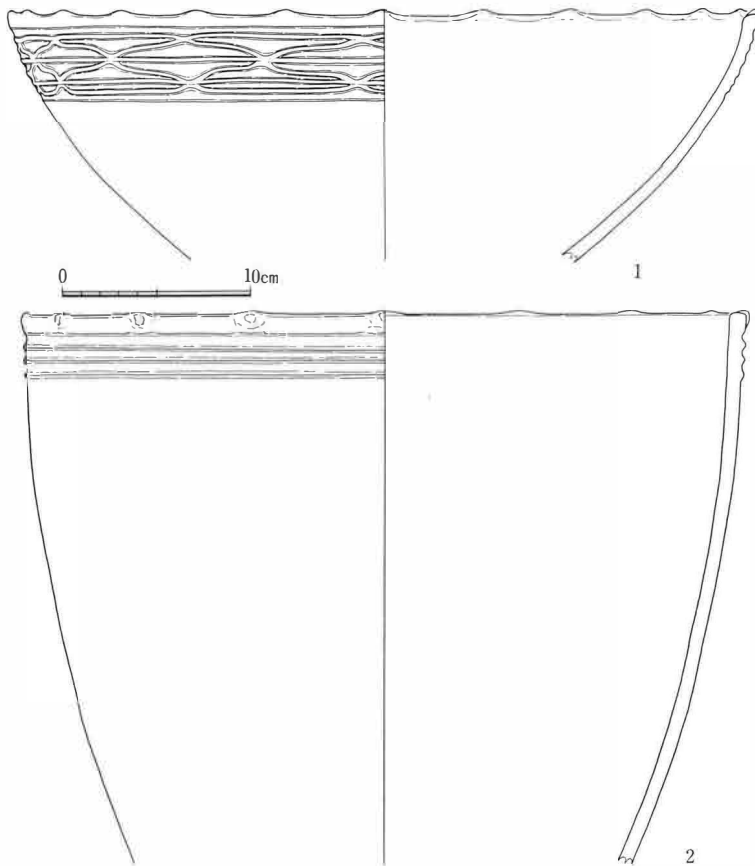


図14 SK-105出土土器①(1:4)

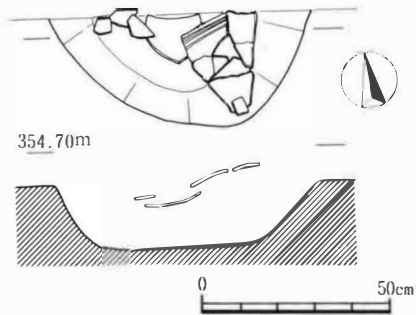


図15 SK-105 (1 : 20)

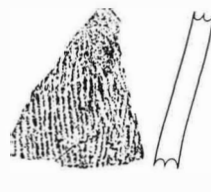
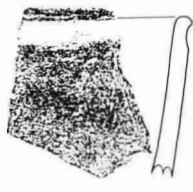
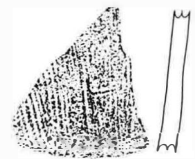
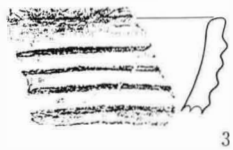
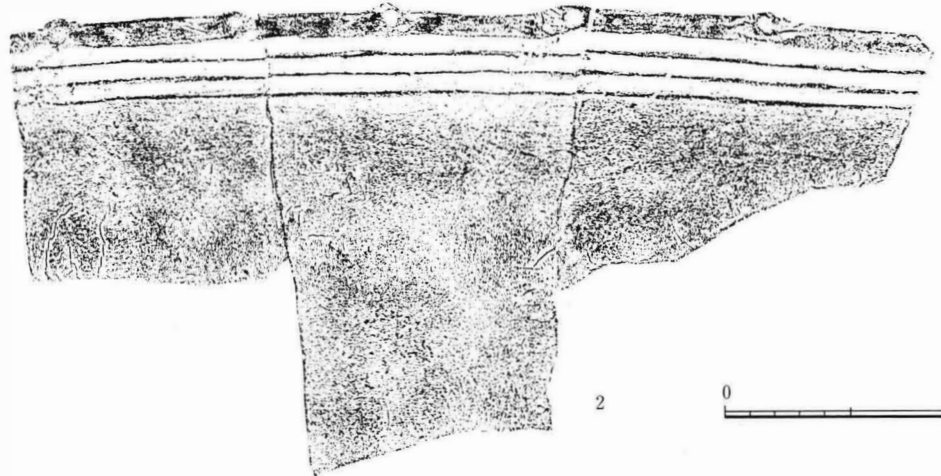
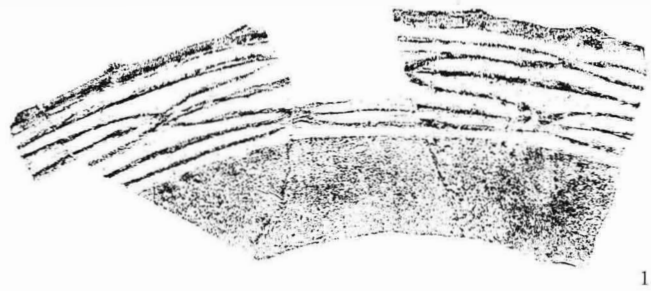


図16 SK-105
出土土器② (1 : 3)

排水路出土土器

II区を分断して聖川に注ぐ排水路改修の際に、調査員により採集された。下半を除いてほぼ完形に復元され、土器棺墓として利用されていた可能性が指摘される。

口縁部を無文帯として胴部に細密条痕が施される大形甕であり、浮線文系土器甕の系譜下の終末に位置するものと理解される。条痕原体は細かい櫛状工具と推定され、条が不揃でやや乱雑である。

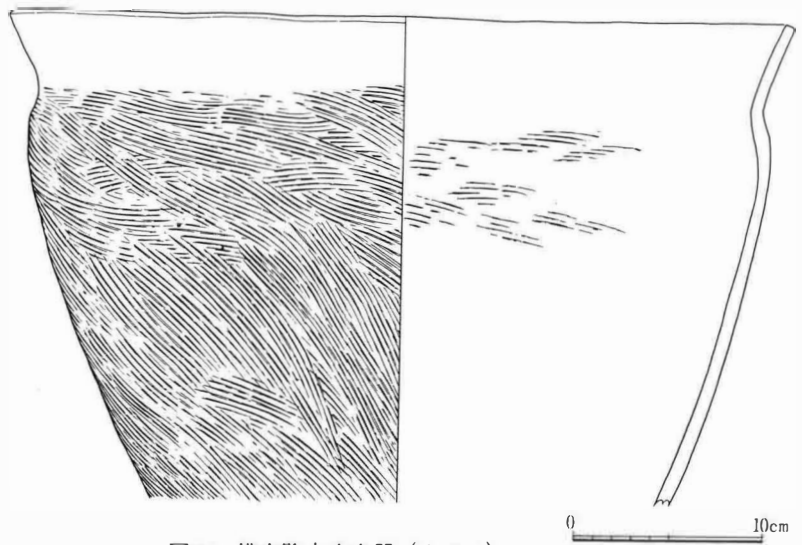


図17 排水路出土土器 (1 : 4)

2 弥生時代II期

SK-42 (B区)

径0.6mの円形土壇の中央にやや傾いて壺形土器が埋納され、その出土状態から、再葬墓としての可能性が指摘できる。なお、土器内容土中より骨片等の確認はない。

胴上半に最大径を有し、櫛状工具による横線文と羽状文を交互に配して下半部を無文とする。器面の調整手法も兼ねあわせた条痕を廃し、櫛描文のみによる文様構成をとる細頸壺は、庄ノ畑式段階としては異質の櫛描文的様相をもつといえる。

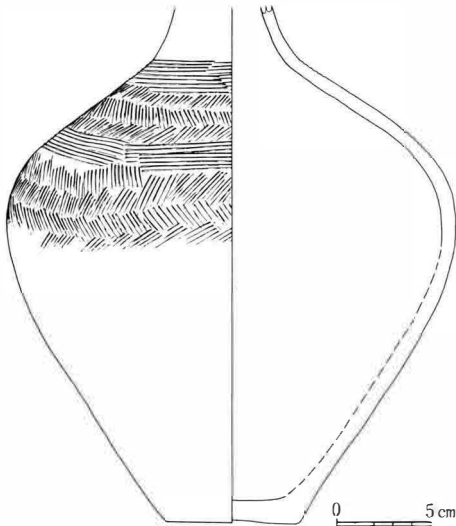
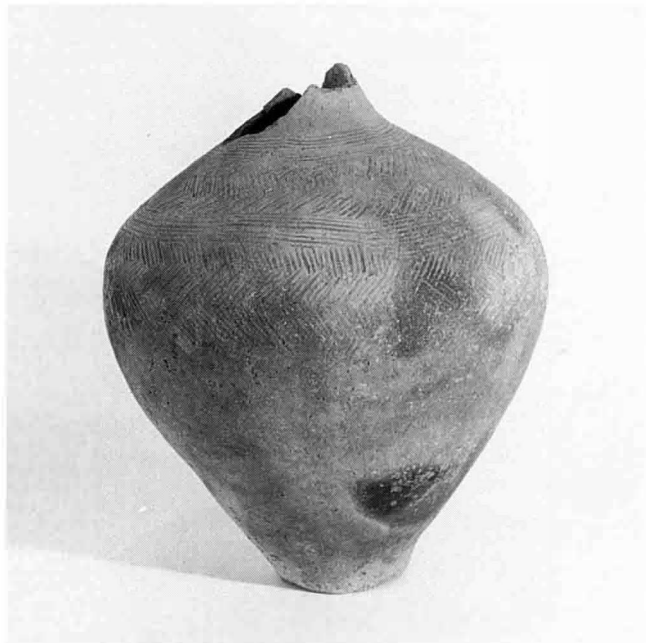


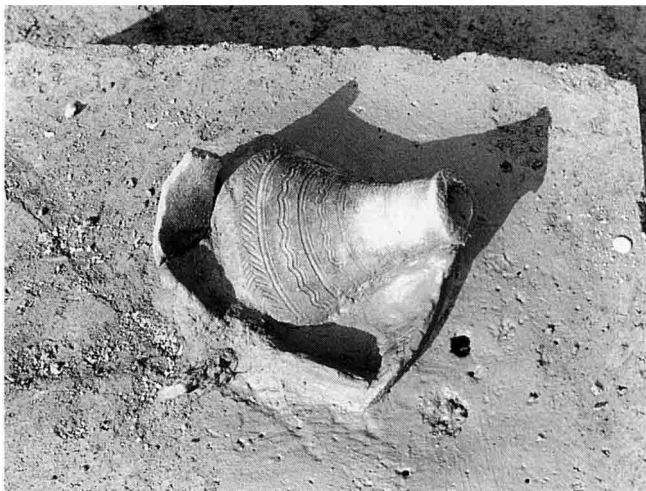
図18 SK-42出土遺物 (1:4)



B区下層出土土器

検出面においての一括出土土器(1・2・4~6)、及び単独出土土器(3)である。遺構としては明確ではないが、前者土器群は一括の廃棄、後者条痕文壺は土器棺墓としての利用が考えられる。

後者土器群では、多段横帯の櫛描文細頸壺(1)、沈線工字区画内に縄文を充填した大形細頸壺(2)、条痕文甕(5)に、ハケ調整甕(4)が共伴する点大いに注目される。SK-42細頸壺にあらわれる櫛描文的影響とともに、西日本弥生土器的な調整技法(ハケ調整)の流入を予測させる。



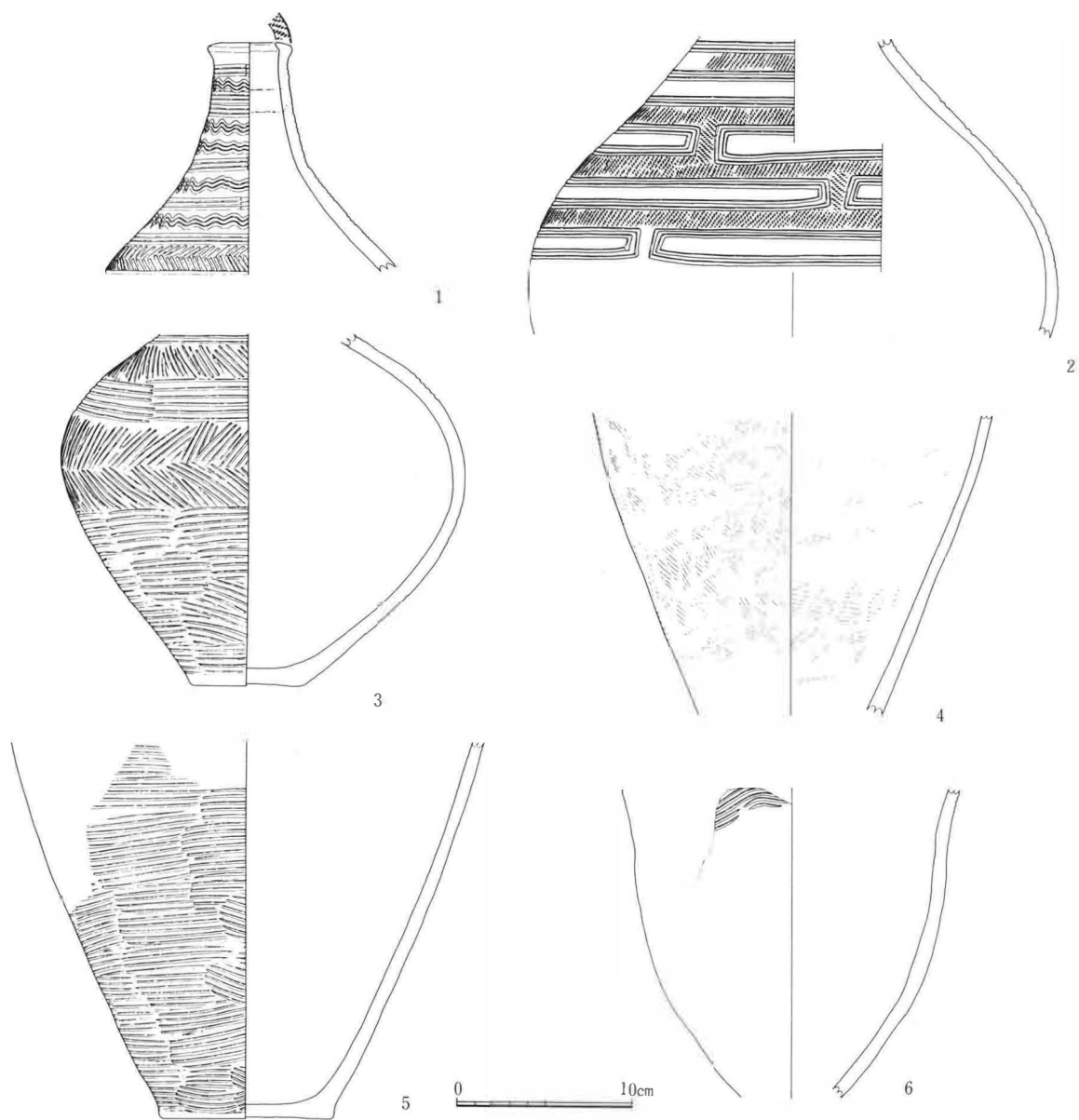
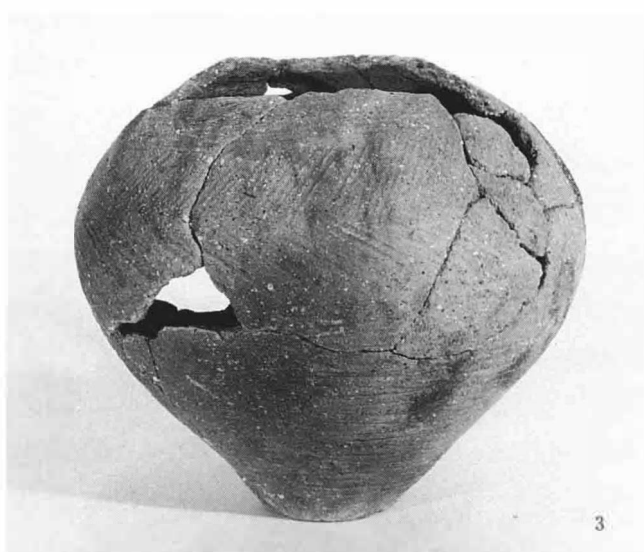


图19 B区下層出土土器 (1 : 4)



SB-107 (SIA区)

調査区の南側で検出され、SB-99と重複する。東側約半分は調査区域外にあるため判然としないが、東西方向4.5mの楕円形を想定する。柱穴は7個確認できたが、配列は不規則で形態は不明である。炉は住居中央よりやや南に位置しており、床面から6cmの浅い掘込炉となる。炉内は炭化物が堆積し周辺には焼土が散布していた。床面は軟弱で、凹凸が著しく不明瞭である。土器の取り上げに際しては覆土出土と床下出土とを区別して取り上げ、整理ではそこに着目して作業・分類を行なった。しかし床面が不明瞭であったこともあり明確な分離はできなかった。

完形となる土器は存在しないものの、復元された個体は多く数える。これらの土器はいわゆる「庄ノ畑式」と併行関係になるもので、器種には壺と甕がある。本稿では、文様に関して、栗林式前段階としての初源的櫛描文を想定させる櫛状工具を用いた施文を櫛描文、伝統的な調整的手法を兼ね備えた施文を条痕文、と扱うこととする。

櫛描文は横線文や波状文(5・8)・羽状文(4・6)などこの時期成立する横帯文構成が主体となる。8の胴下半部は櫛状工具による細密条痕である。12は口縁端部に縄文を施し、内外面ハケ調整した後、外面には櫛状工具による条線、内面は篋ミガキを施す。

条痕文は櫛描文に比べその出土量は少ないが、壺・甕ともに存在する。小破片が多い。

2は頸部と胴部に、24は頸部に篋状工具による平行線文が施され、丁寧に篋ミガキされる遠賀川系統に位置付く可能性をもつ大形の壺形土器である。13は胴部に変形工字文を施し、区画内に縄文を充填する。最大径を胴部にもつ大地式の甕形土器である。2・24の壺、13の大地式甕及び1の口縁部破片、10の底部破片などいずれも西日本的要素をもつ土器である。また59の浅鉢(I期)と29・30の壺(III期)は混入品であろう。

先に述べたよう当住居址出土の土器は「庄ノ畑式」の段階に併行してくるものが中心となるものである。B区・D区・SIA区で該期の遺構が多く検出されていること、また検出面・包含層内より遺物が多量に確認されていることなどから、当地周辺が該期の中心的な居住域として把握されるものである。なお、当遺跡の南方約1kmに位置する塩崎遺跡群・市道松節一小田井神社地点(長野市教委1988)の調査では、該期の住居址2軒を始めとして31基にも及ぶ木棺墓群が確認されている。塩崎遺跡群を含めた千曲川自然堤防上一帯に、該期の居住域群が展開されていることを予想させるものである。

ここに提示した土器群は、住居址出土のII期良好資料であると判断される。従来、該期庄ノ畑式段階については、出土資料に制約があり不明瞭な点が多かったが、西日本弥生土器との併行関係を含めた前後の編年観に、以降再検討を迫る知見も含まれると指摘できる。今後周辺地域における事例・資料の増大を待ちたい。

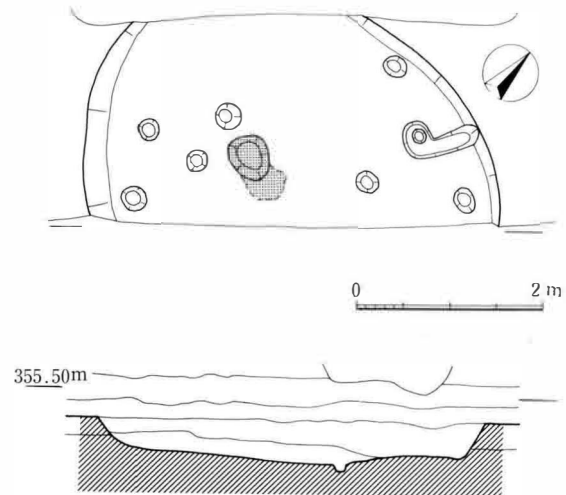
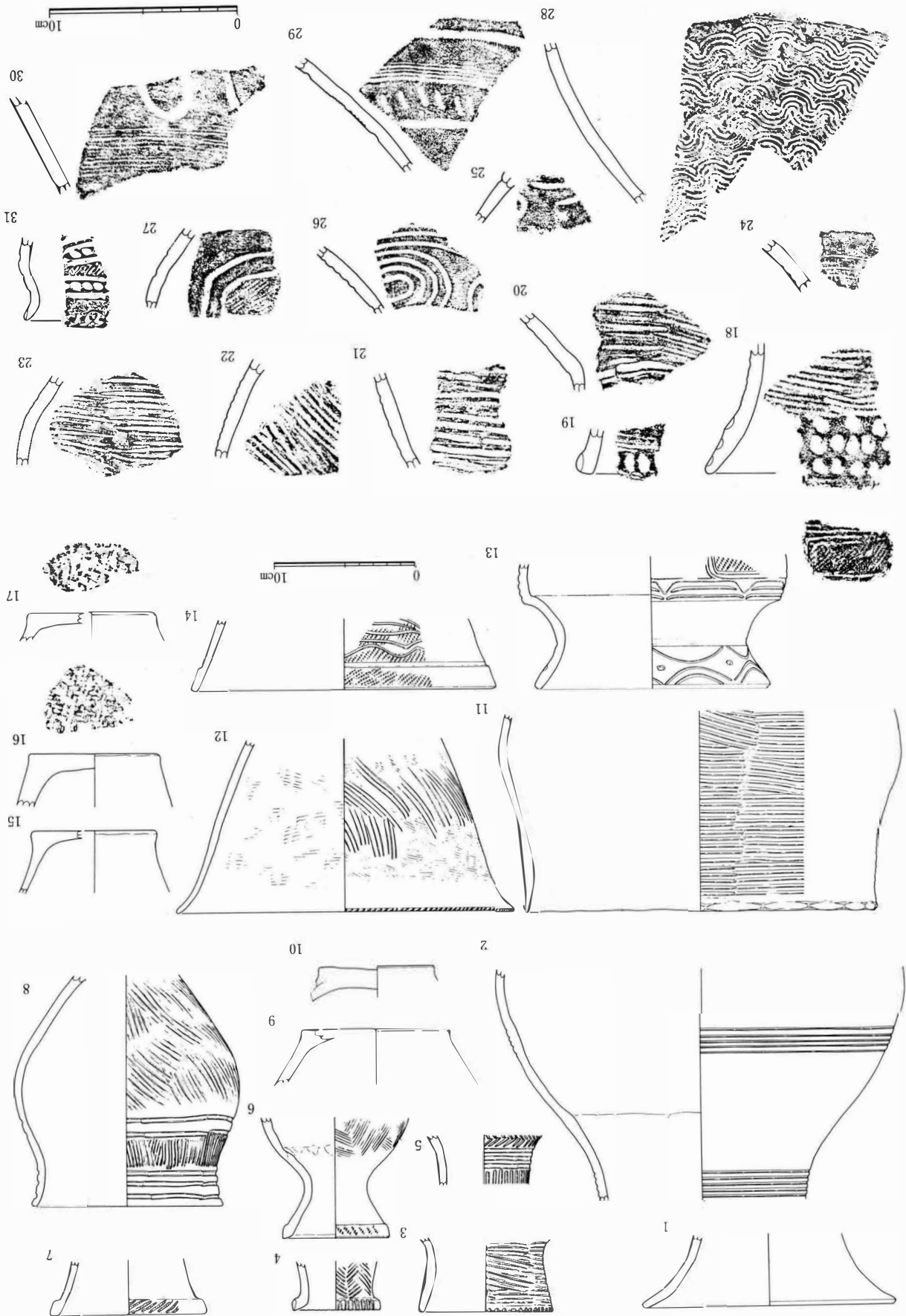


図20 SB-107 (1:80)



图21 S B-107出土器① (1~17-1: 4、他-1: 3)



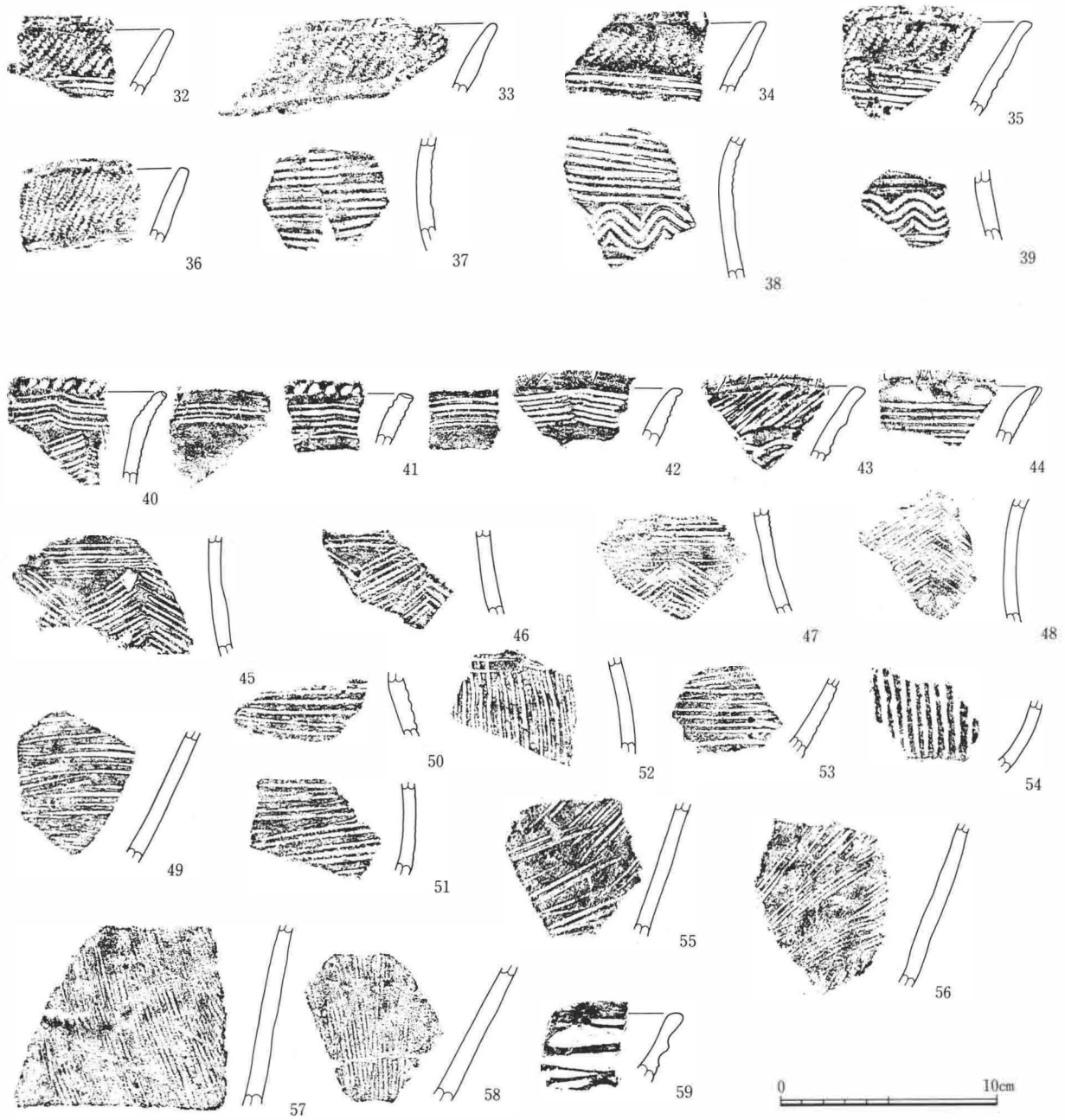
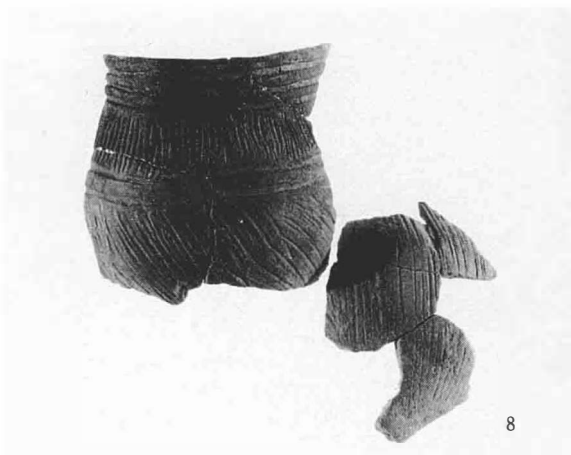


图22 SB-107出土土器② (1 : 3)



3 弥生時代Ⅲ期

SB-10 (Ⅲ区)

径4.6mの円形を呈し、床面中央に径80cm深さ25cmの炉を備える。底面に火熱による焼土塊が認められず、内部に炭化物・灰を混合して充満させる掘り込み構造の炉は、該期の古段階に特徴的である。以降当地で主流となる、掘り込みが浅く底面に焼土塊を有する「地床炉」とは形式を異にする点注意される。その系譜を求めるとき、西日本において、住居中央ピットとも呼ばれる炉構造と共通することも重視されよう。

遺物は、床面に密着することなく、南西部分に集中して壁際ほど出土位置を高くして分布する。住居廃絶後、竪穴内が半ば埋没した時点で、破片として一括投げ込まれた廃棄の状態を如実に示すものであろう。

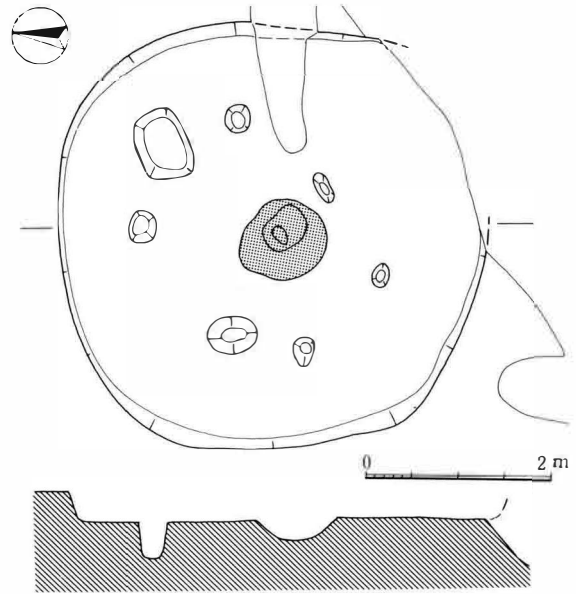


図23 SB-10 (1 : 80)

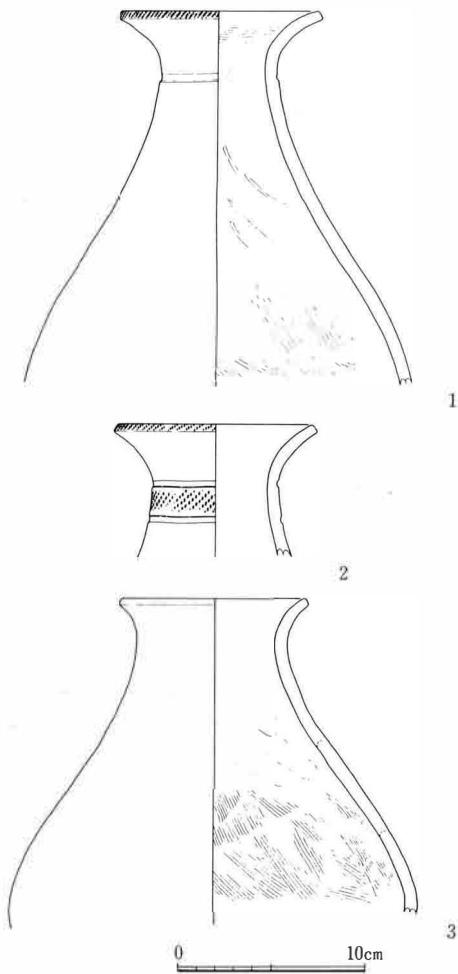


図24 SB-10出土土器① (1 : 4)



覆土中遺物の出土状態



完掘の状態

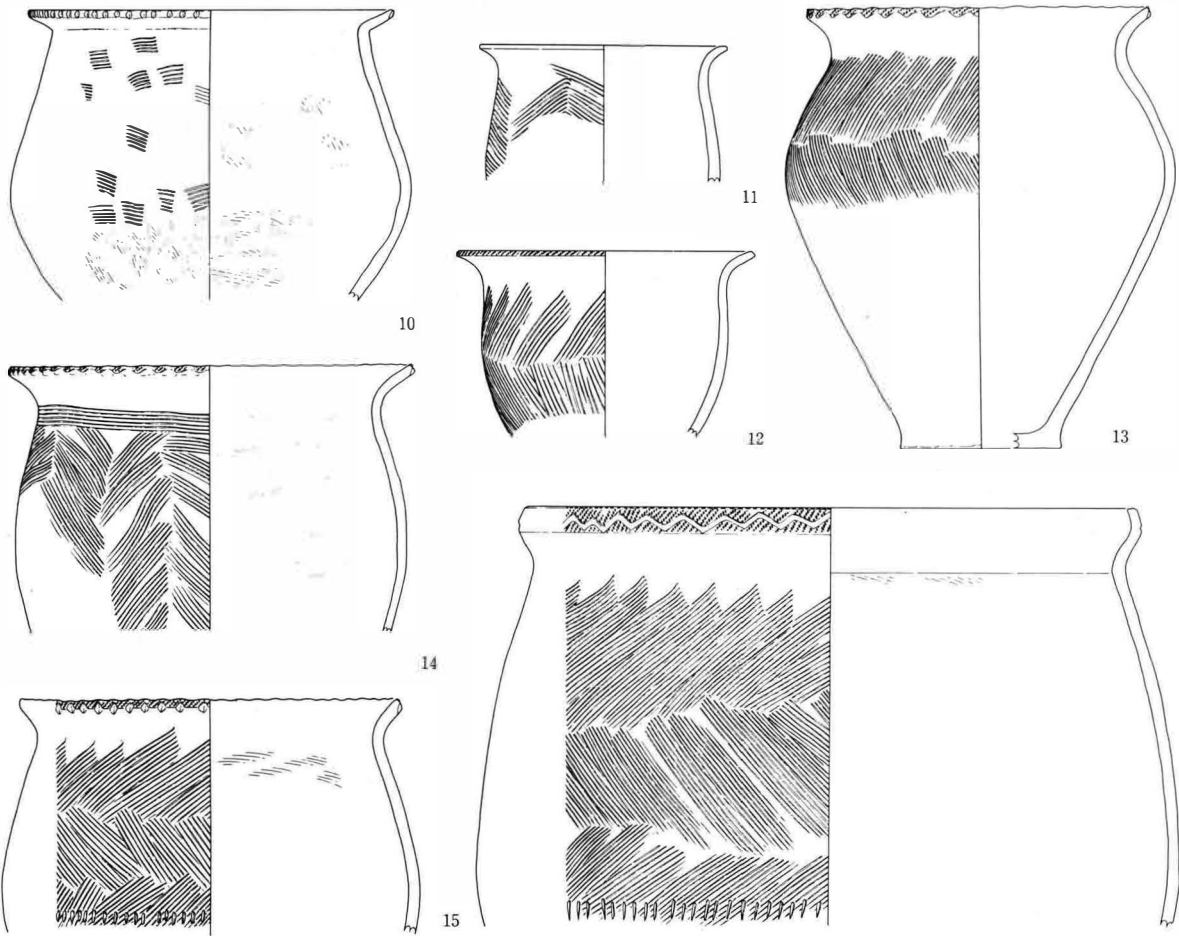
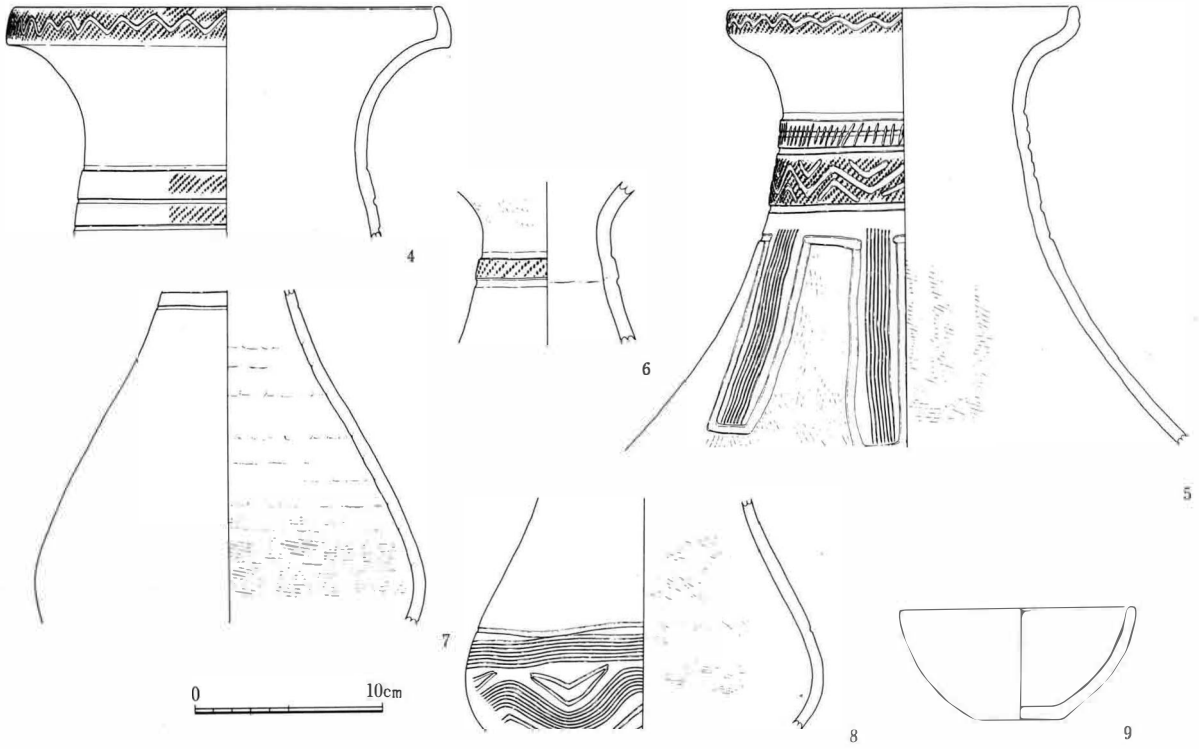
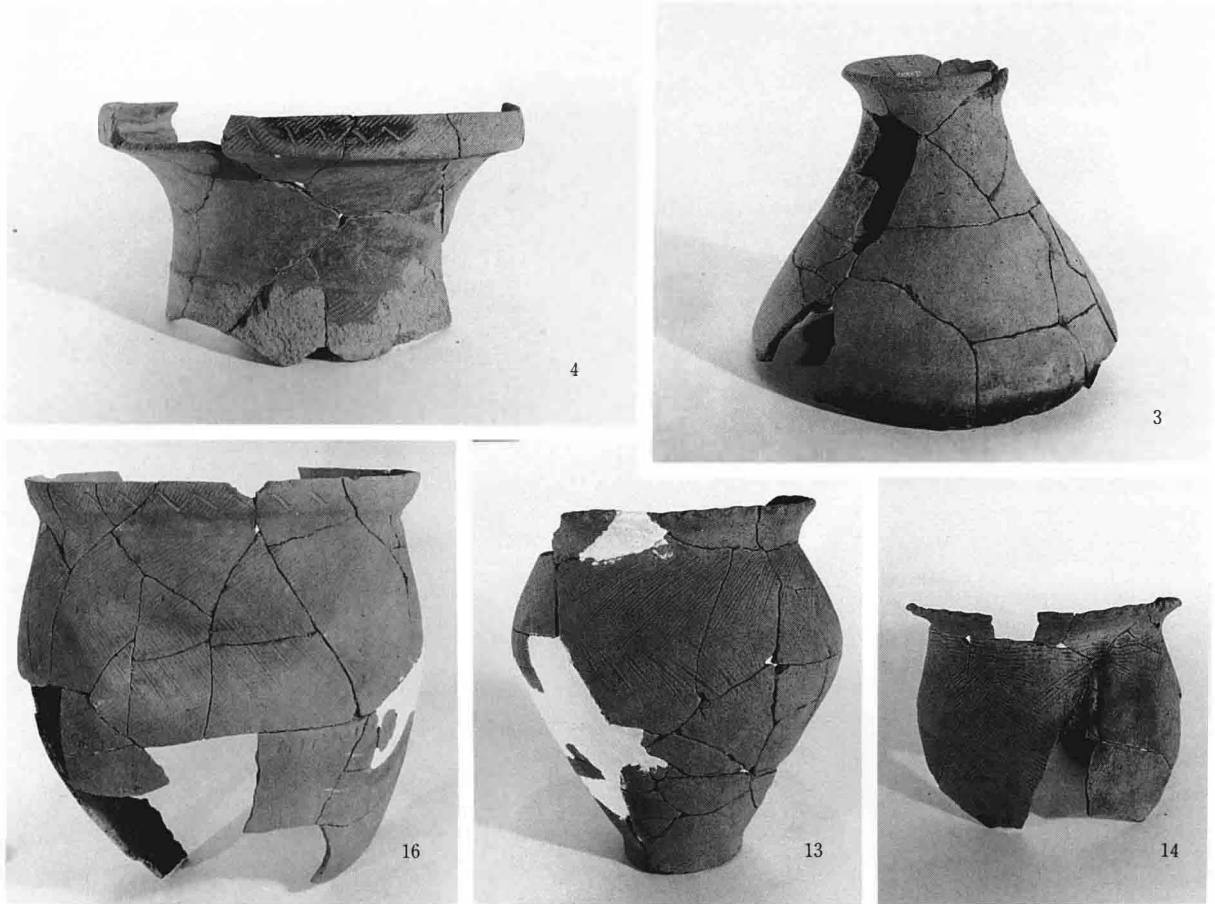


图25 SB-10出土土器② (1:4)



完形となる土器は存在しないものの、細頸壺（1～3・6～7）、受口太頸壺（4・5）、各種文様構成をもつ甕（10～15）、受口大形甕（16）など、良好なセット関係を示す。栗林式の中でも中葉の時間的位置に属するものと考えられる。

SB-14 (III区)

上部に平安時代土壌が重複し、約半分が調査範囲外にあるため形態は判然としないが、円あるいは楕円の平面形が予想される。床面はほぼ中央に1.5mの範囲に炭化物が集積し、その中央部にやや浅い掘込炉が存在する。炉周囲の床面は堅緻となる。

遺物は、床面とその直上に一括廃棄された状態が観察される。復元作業を経ても完形となる個体は存在しないが、比較的原形を保つ土器の存在が目立つ。細頸壺（1～6）は、いずれも多段にわたる横帯文が頸部下に施文されことを特徴とする。平行沈線による区画内を、縄文あるいは櫛描文により充填、またはは無文帯とする手法であり、庄ノ畑式に成立した多段横帯の文様構成を継承発展させたものといえる。土器の様相としてはSB-10に先行し、栗林式のなかでも古相を示す。

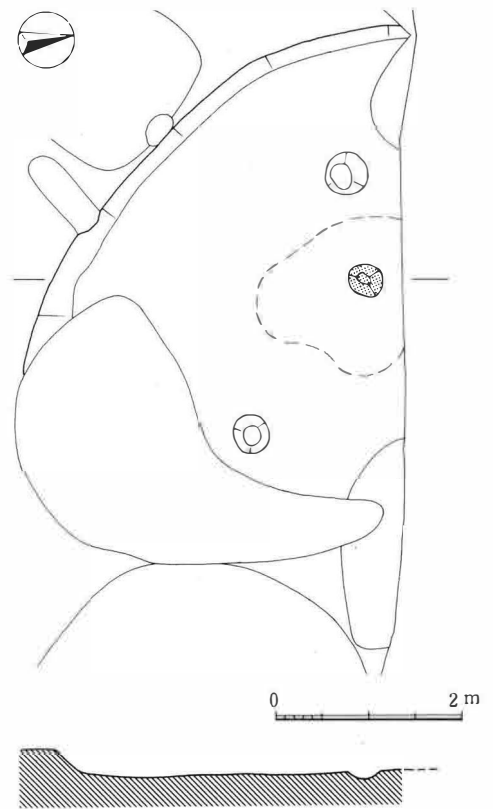


図26 SB-14 (1 : 80)

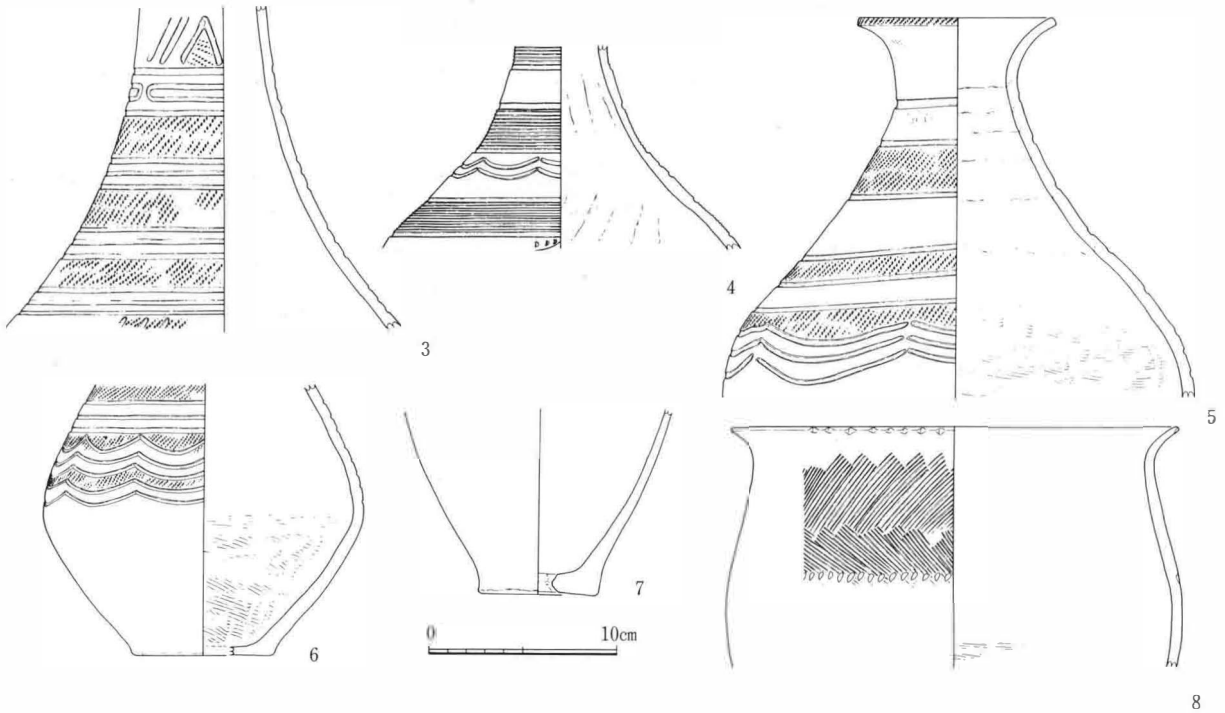
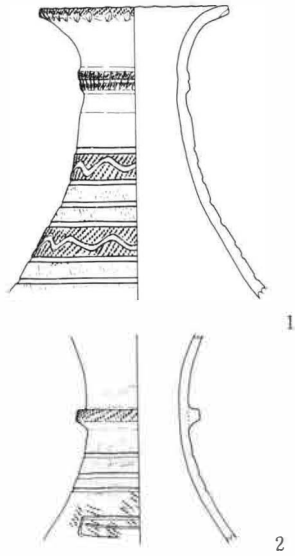


图27 SB-14出土土器 (1:4)



SB-55 (A区)

東側を古墳時代周溝墓により破壊されているが、南北方向4.4m程度の隅丸方形住居と予想される。やや中央より偏った位置に炉と推定される焼土の分布が認められる。地床炉と思われるが、床面も軟弱であり判然とはしない。

覆土上層から炭化材の小片が混入し、床面直上には大形の炭化材が検出されている。その出土状態には、部分的・不規則な集中傾向が観察される。炭化材に混じって完形に近い土器5個体が、半ば原形を保って出土し、いずれも2次火熱による変質を受けている。これらの出土状態から、廃絶した住居内に木材や土器が二次的に廃棄され、火を放たれた状況を予測することが可能となる。いわゆる焼失家屋とは区別しておくべきか。

図示した4個体の土器の他、壺下半部1点が存在するが、その他の土器破片出土量は極わずかである。浅鉢(3)は赤色塗彩された上、つば状口縁の上面に漆と推定される黒色塗料により鋸歯文が施されている。弥生土器のなかでは例の少ない彩文土器の優品である。細頸壺(1・2)は、頸部と胴下半の文様帯間が広く無文帯となり、構成が分離される。多段に連なる横帯文盛行後に、新たに主流を占める栗林式新相の文様構成といえる。

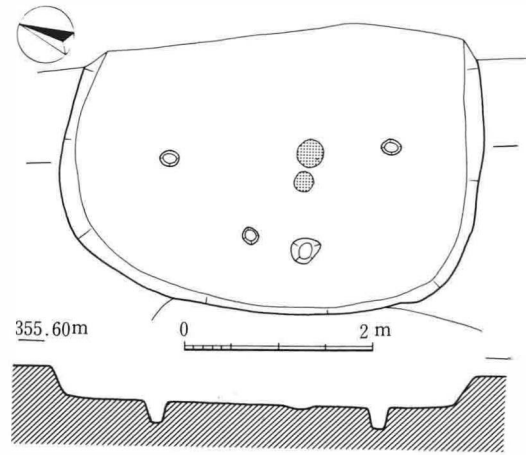


図28 SB-55 (1:80)

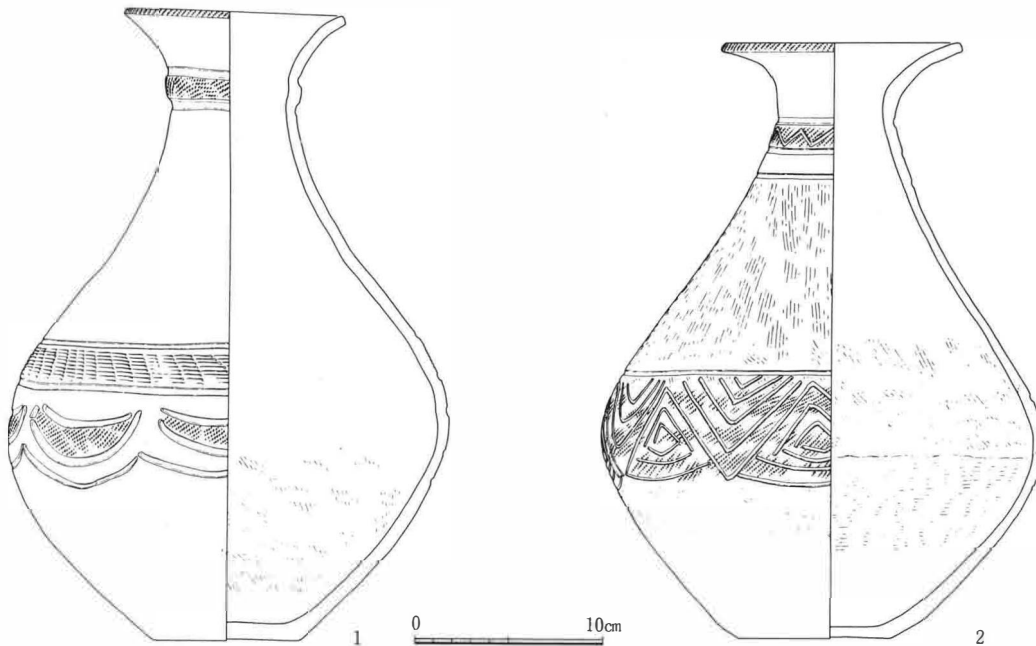


図29 SB-55出土土器① (1:4)

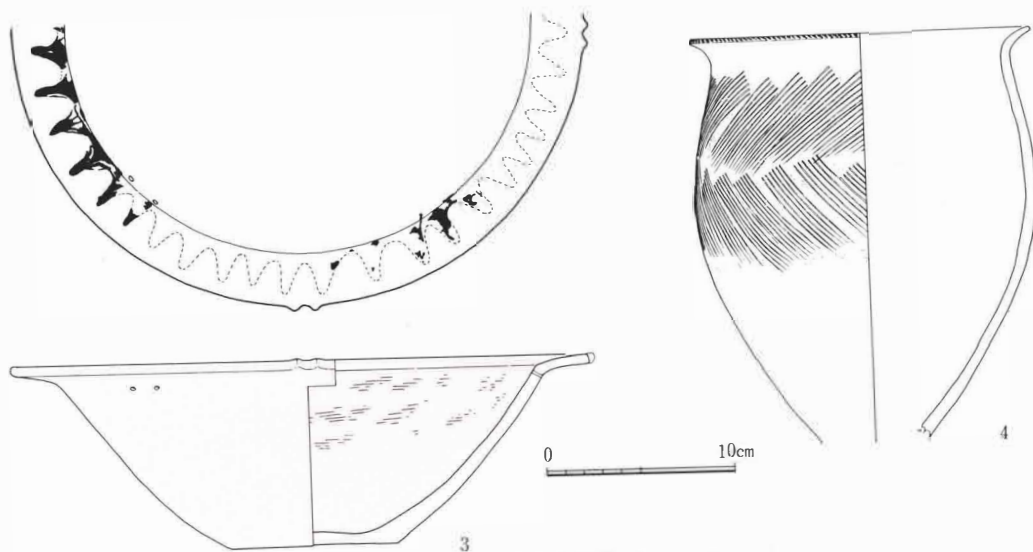


图30 SB-55出土土器②(1:4)



4 弥生時代V期

SB-6 (II区)

約半分が調査範囲外にあるが、短辺3.2mの長方形住居と考えられる。住居としては小形の部類に属し、明確な柱穴を確認していない。床面から覆土中層にかけて多量の土器出土が認められ、比較的原形を保つ破損品を、そのまま廃棄あるいは投棄した状況と予想される。

出土土器には、高坏(1~4)、壺(5~10)、小形台付甕(11)、甕(12~15)、小形鉢(16)があり、典型的な箱清水式土器の一群といえる。ただし、当遺跡内出土の該期土器を新古に分かつとしたなら、施文や口縁部形態の特徴から、古相に位置付けられるものである。

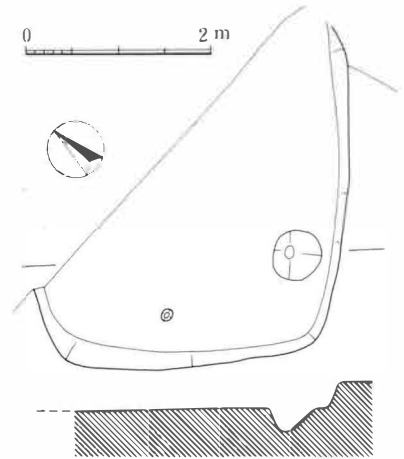


図31 SB-6 (1:80)

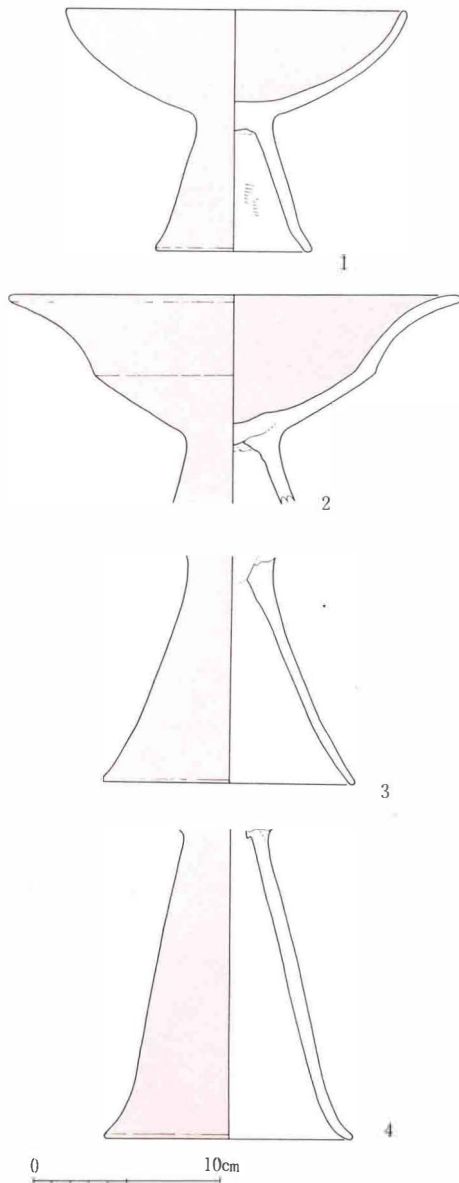
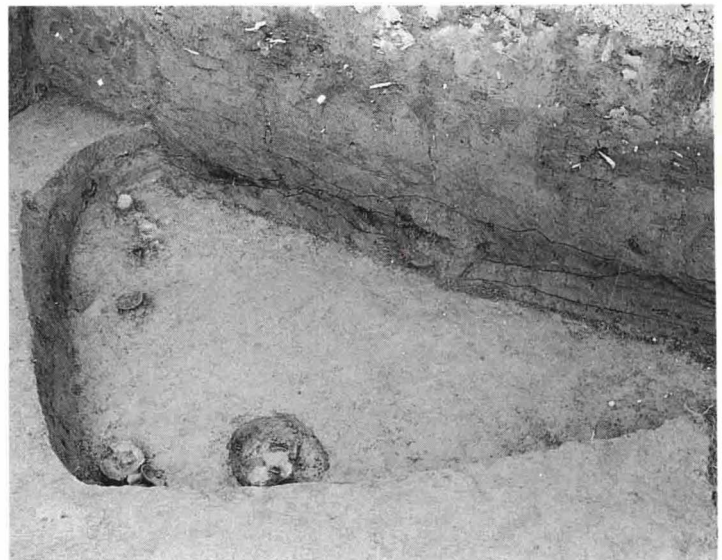


図32 SB-6 出土土器① (1:4)



覆土中遺物の出土状態



完掘の状態

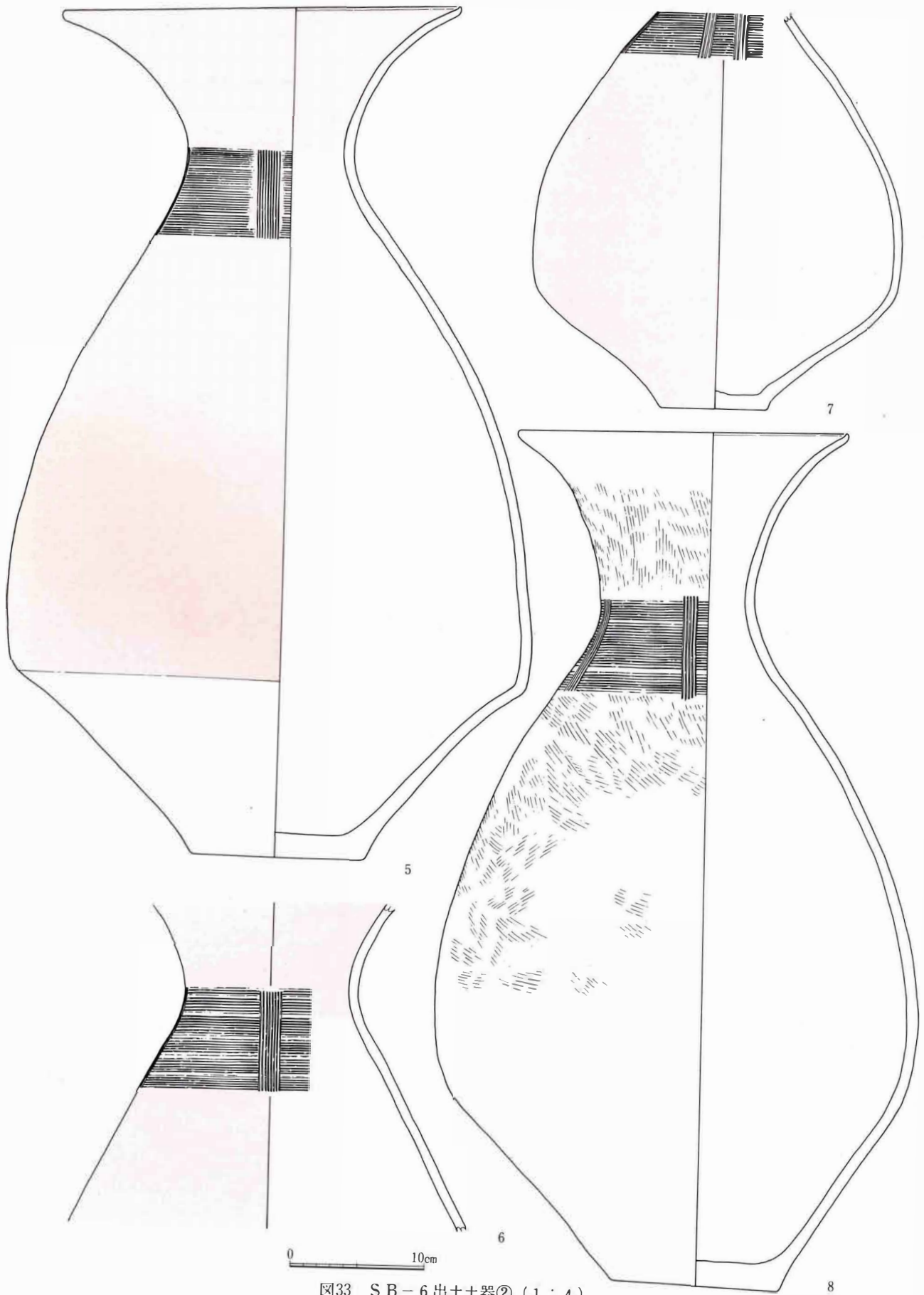


图33 SB-6出土土器②(1:4)

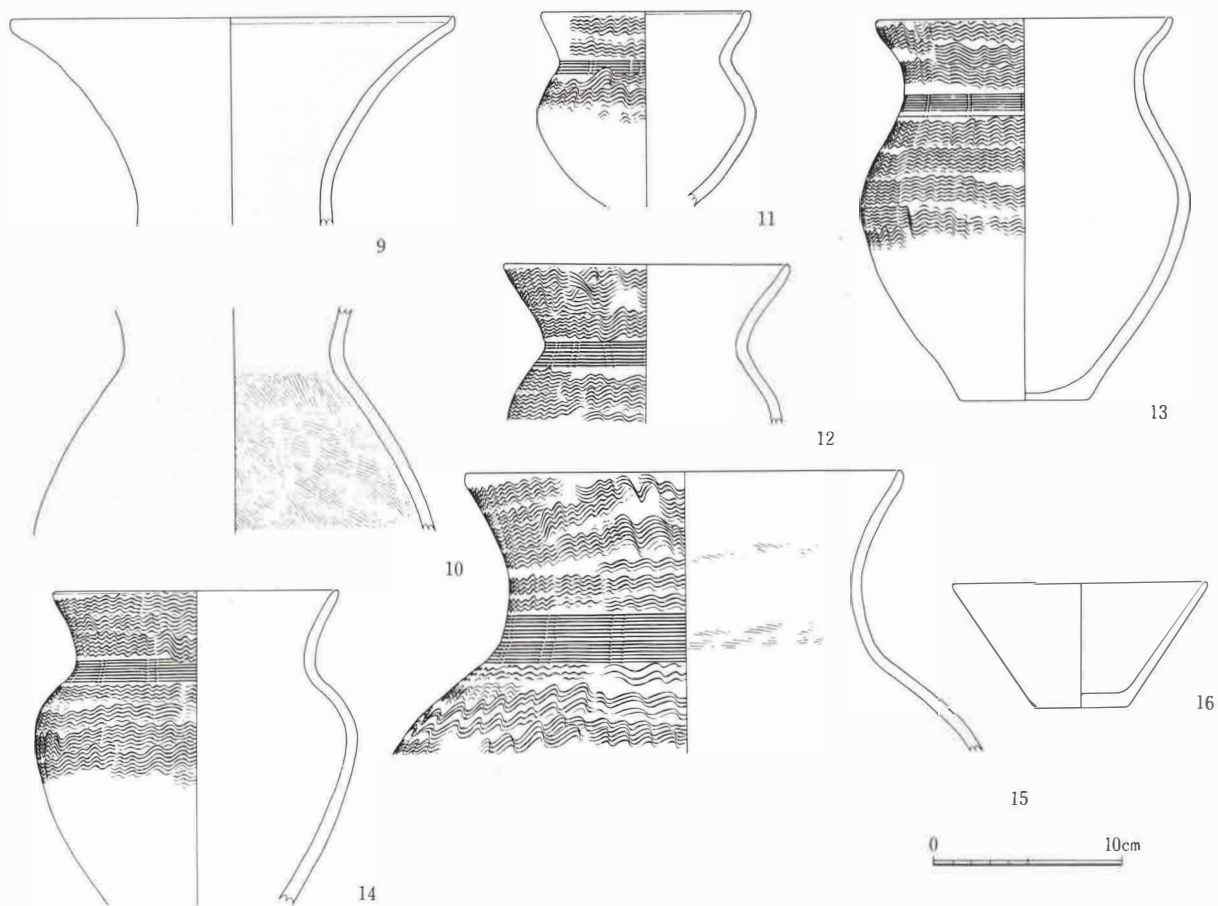
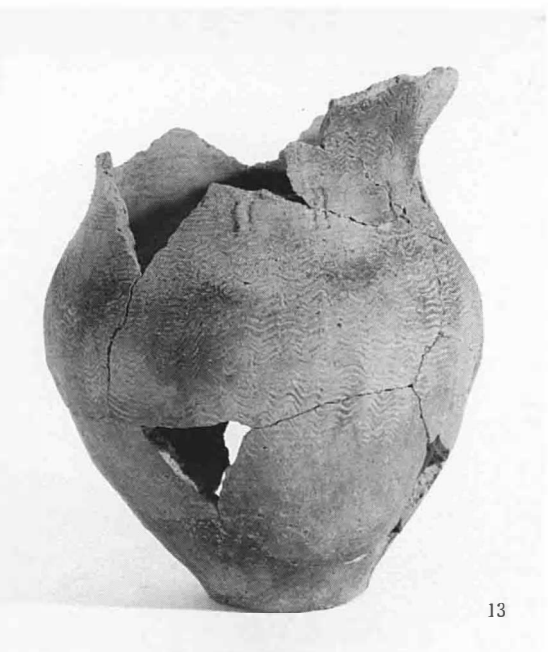
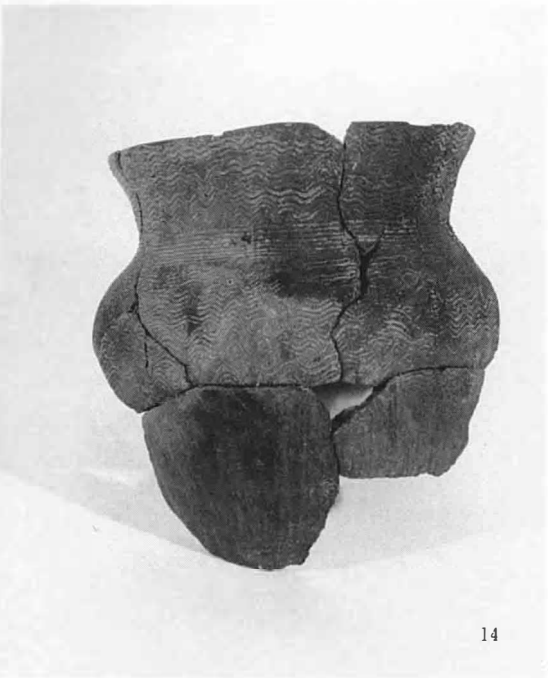


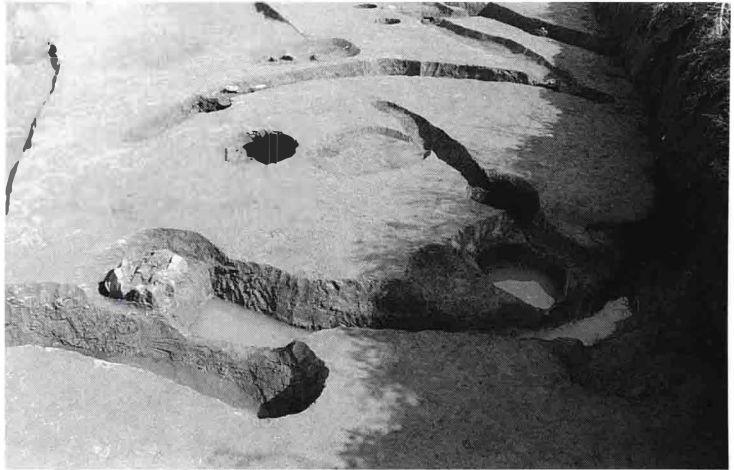
图34 SB-6出土土器③(1:4)





SDZ-4 (III区・弥生V期周溝墓群)

径約7mの円形周溝墓であり、相対する2か所を掘り残して開口部としている。同じく径約8mのSDZ-5と接した位置関係をもち一連の構築によると考えられる。確認面からの溝の深さは40cm前後であり、溝中より壺1点と土器棺を検出している。周溝の中央部分に土壌が存在しているが、出土遺物から平安時代の所産と判断され、周溝に伴う埋葬主体は未検出のままである。



SDZ-4

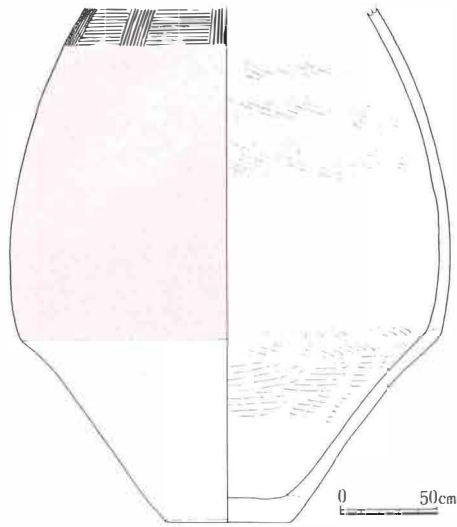
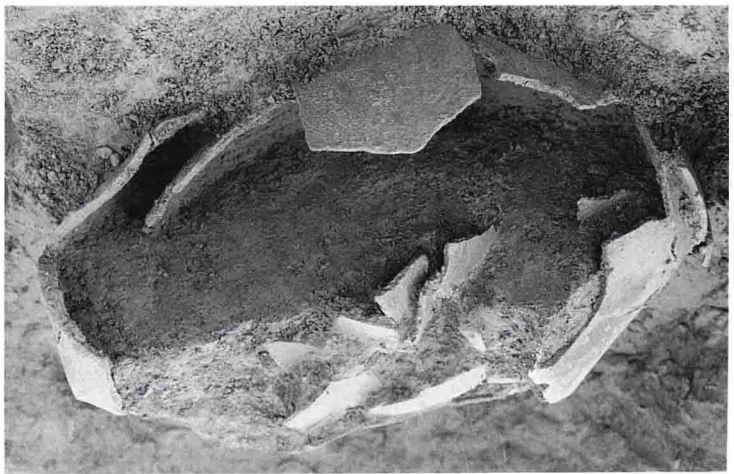


図35 SDZ-4 出土土器 (1:4)



SDZ-4 周溝内の土器棺

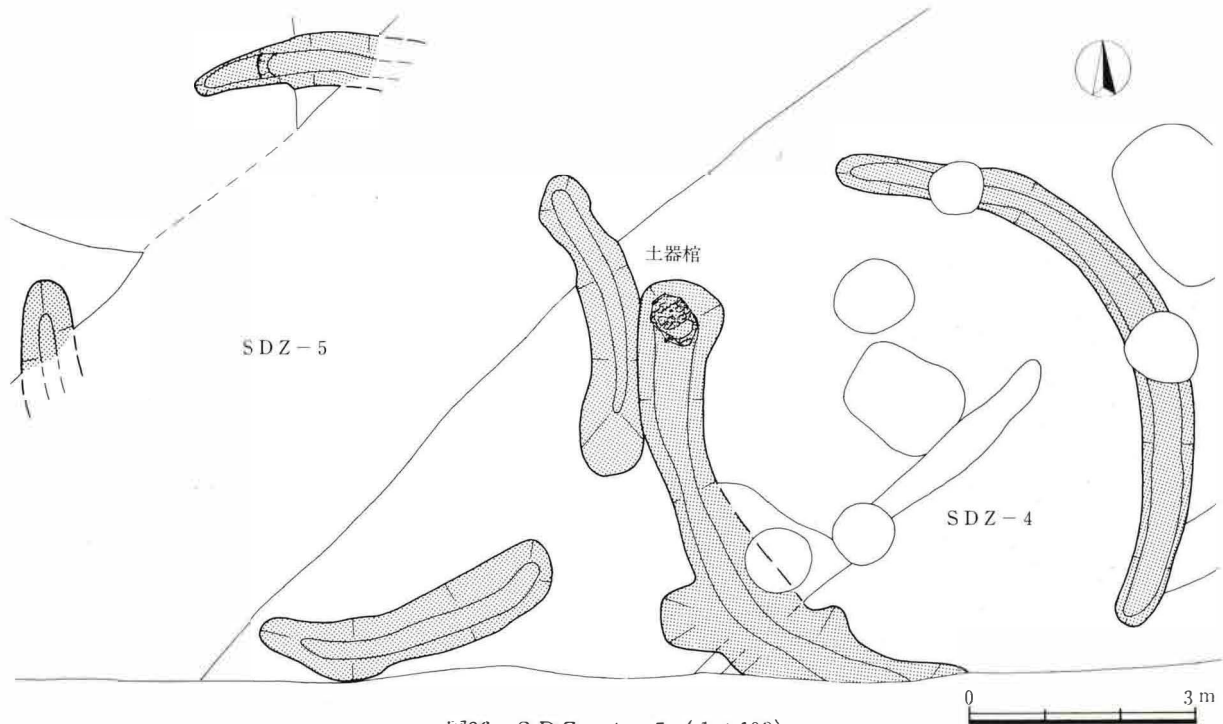


図36 SDZ-4・5 (1:100)

SDZ-4 土器棺

円形周溝の開口部に接して埋置されたものであり、当初から埋納されたものか、あるいは、周溝墓構築の後いくらかの時間を経て設置されたものか、判別できない。ただし、土器棺埋置部分の溝幅が広がっている事実から、本来の溝とは別に、土器棺埋置のための掘削が存在したことは明らかである。口縁部を欠失した大形の箱清水式壺2個体を合せ口にし、出土時での計測で全長は70cm強をはかる。合せ口部分は上棺を下棺の口に覆いかぶせ、入れ子に近い状態といえる。内容土の水洗により、淡青色のガラス小玉3点と微小な骨片を検出している。骨片は火熱を受けており、混入品であることも考えられる。

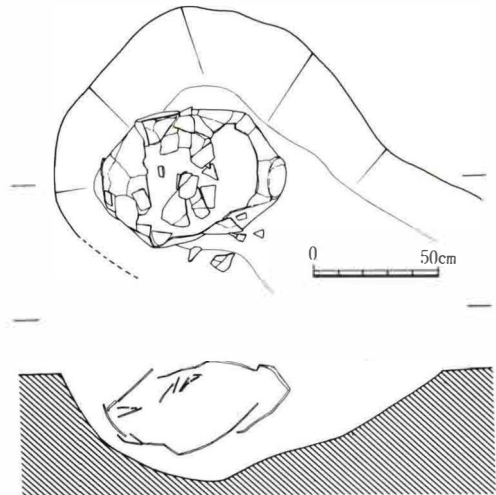


図37 SDZ-4 土器棺 (1:6)

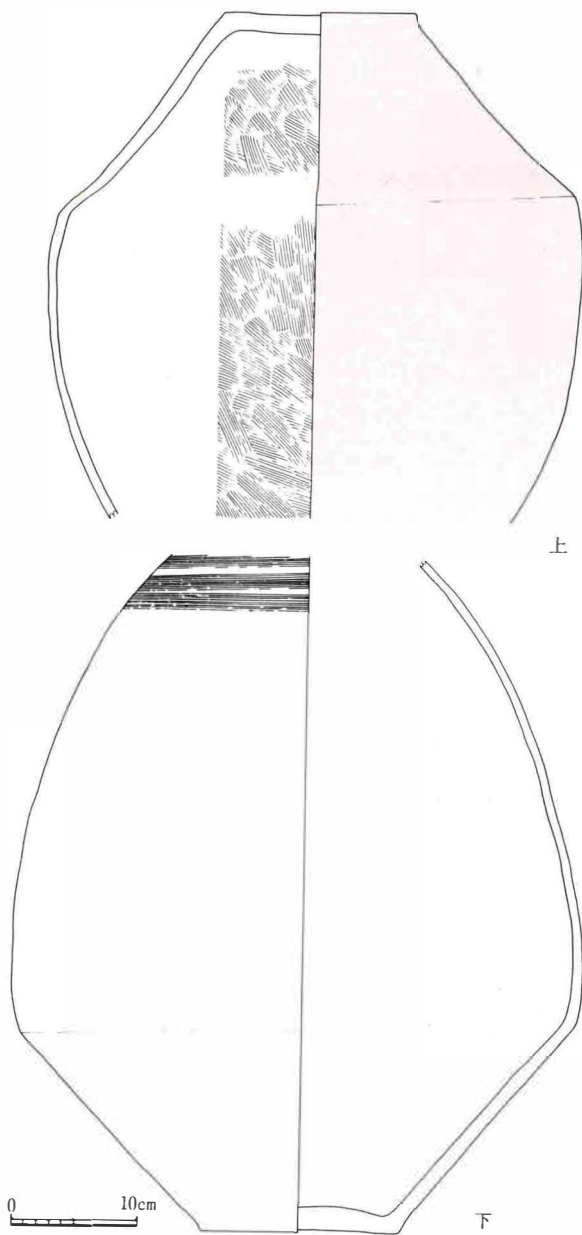
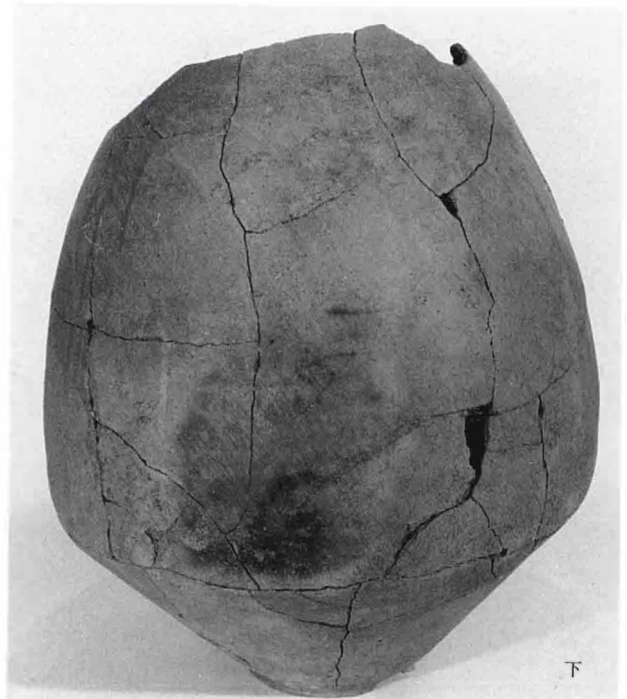


図38 SDZ-4 土器棺 (1:6)



SDZ-7 SK-10 (III区・弥生V期周溝墓群)

円形周溝墓(SDZ-7)とその埋葬施設(SK-10)と目されるものである。北側に方形周溝墓が重複しているため、周溝の全形を知ることができないが、径8m程度の円形区画によると推定され、東側に開口部を確認できる。溝幅1m前後、深さは30cm程度と浅く、溝内には破碎した状態の土器集中箇所があり、復元の結果3個体の土器(2~4)となることが確認されている。

区画内中央部の埋葬施設であるSK-10は、2×1.2mの墓壇内に被葬者の人骨痕跡とともに、それに副葬されたと考えられる高坏の坏部(1)、淡青色ガラス小玉9点、鉄剣、鉄釧、の出土をみている。その出土範囲から推定して、幅0.5m、長さ1.5mの木棺を墓壇内に埋納した状態が復元できる。人骨の遺存状態は悪く、部位も特定できず、わずかにその痕跡範囲を確認するに留まる。被葬者の体位、副葬品との位置関係など埋葬の形式に不明な点を残すが、鉄釧位置を手首と想定するなら、鉄剣の位置する方位が頭部に当たる可能性は指摘できよう。この場合、想定される木棺規模から判断して、被葬者の下肢は折り曲げられた状態で棺内に位置することとなる。

なお、鉄製品については本章8節に詳述されるが、一連の墓壇群と想定している土壇から、鉄鏃(SK-11)、鉄釧(SK-12・14)を検出しえたことは特筆される。

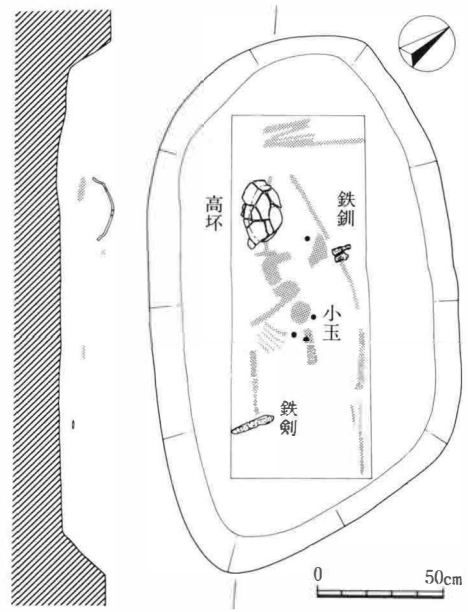


図39 SK-10 (1:30)



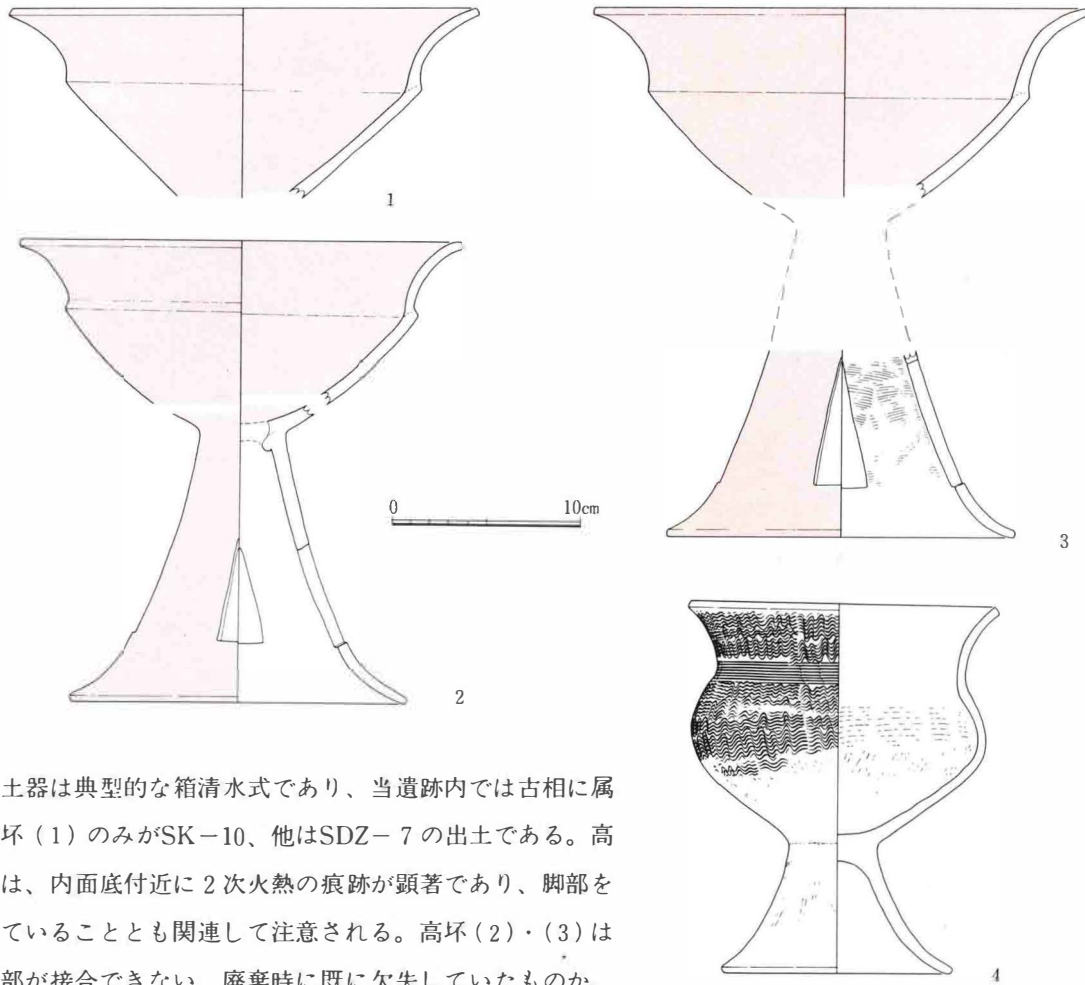
SK-10とSDZ-7



SK-10 遺物出土状態



SDZ-7 遺物出土状態



出土土器は典型的な箱清水式であり、当遺跡内では古相に属す。高坏(1)のみがSK-10、他はSDZ-7の出土である。高坏(1)は、内面底付近に2次火熱の痕跡が顕著であり、脚部を欠失していることとも関連して注意される。高坏(2)・(3)は坏部脚部が接合できない。廃棄時に既に欠失していたものか、それ以降検出時に至るまでの間失われたものか、埋葬行為に伴う遺物の性格を考えるうえで、重要な課題といえる。

図40 SK-10・SDZ-7出土土器(1:4)



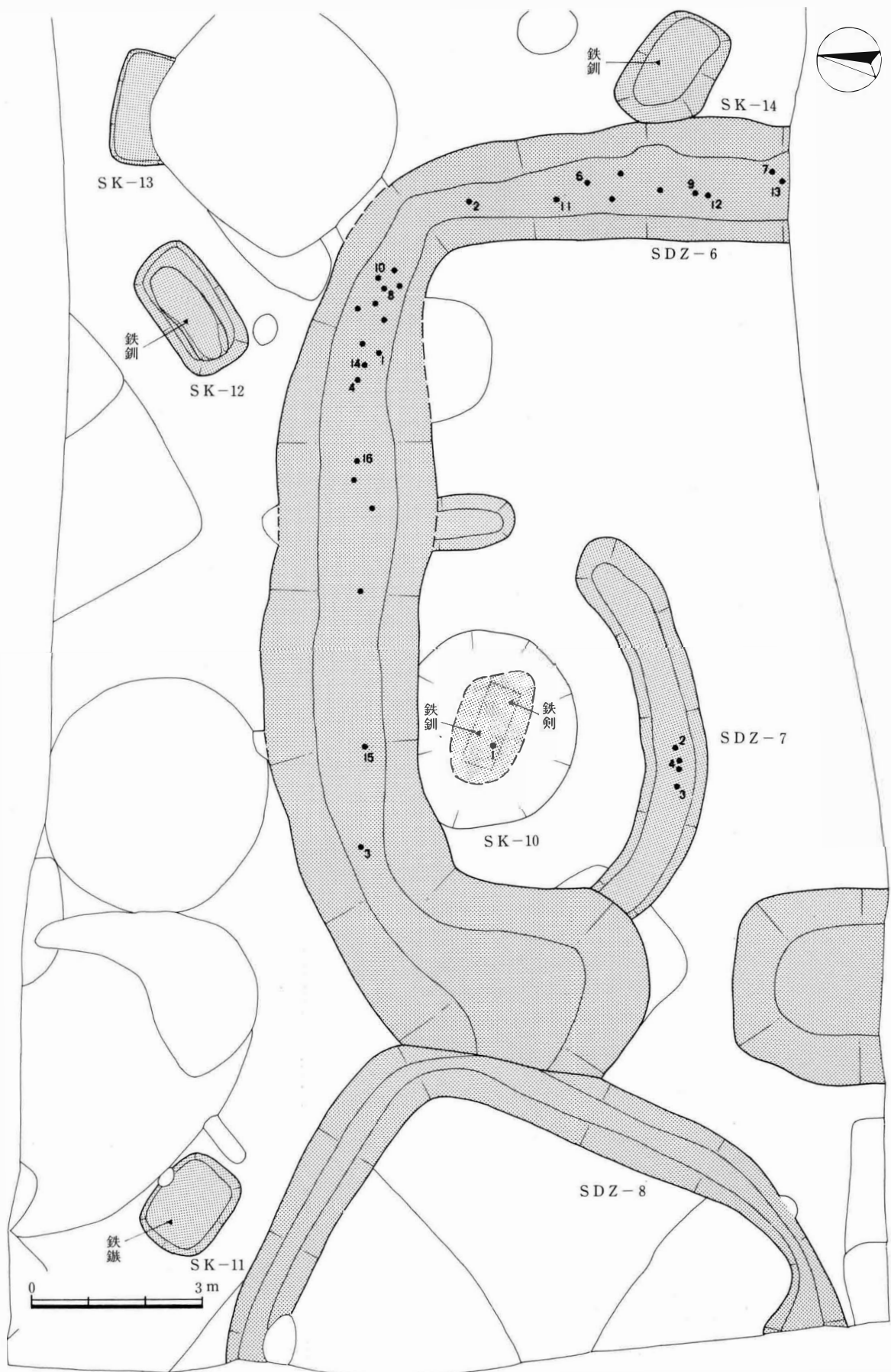
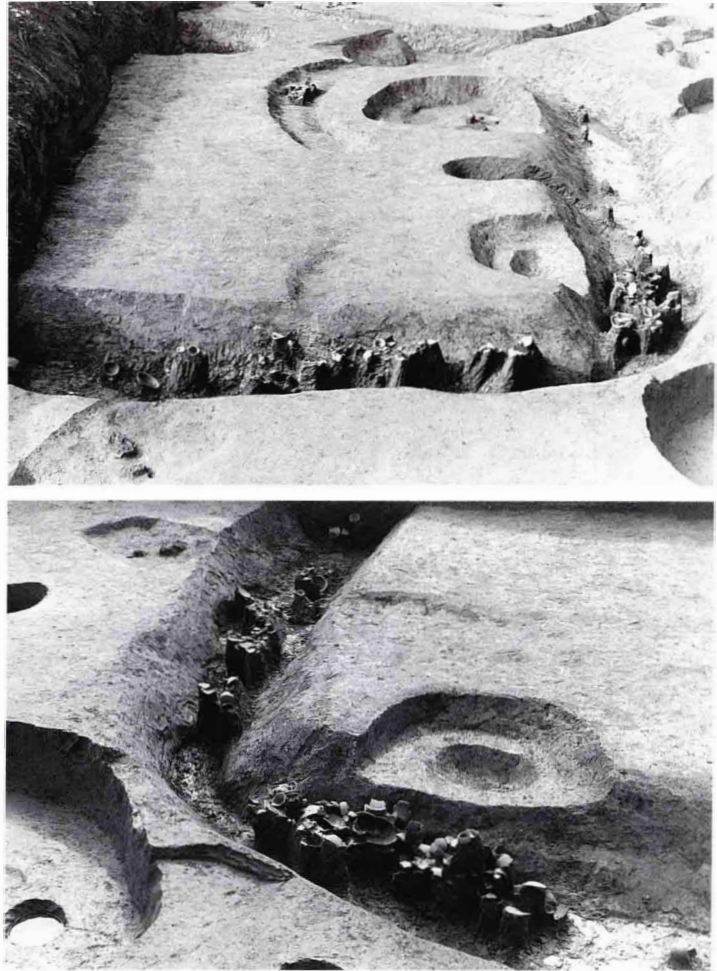


図41 SDZ-6~8・SK-10~14 (1:100)

SDZ-6 (III区・弥生V期周溝墓群)

幅最大2.8m、深さ最大0.7mの大溝により区画された最大長16.7mの大形の方形周溝墓であり、西側の一辺中央付近を幅1.5m程掘り残して開口部としている。円形周溝SDZ-7を一部切り込み、方形周溝SDZ-8とは西側で溝を接する位置関係にある。溝区画内の埋葬施設は確認できず、周溝墓としての規模からも、ある程度の盛土を想定しておきたい。

周溝内からは多量の土器出土が認められる。部分的に集中拡散傾向があり、出土位置も溝底面近くから覆土最上層にまでわたる。完形に近い状態にあるもの、破片として一括遺棄されているもの、様々であり、その廃棄の経過には複雑な要素が存在すると予想できる。出土状態からしても、土器の所属時期に若干の時間差を考慮する必要があるが、総体としては箱清水式のなかでも新相を呈し、円形周溝墓出土の土器群とは明確な時間差を感じさせる。



SDZ-6 遺物出土状態

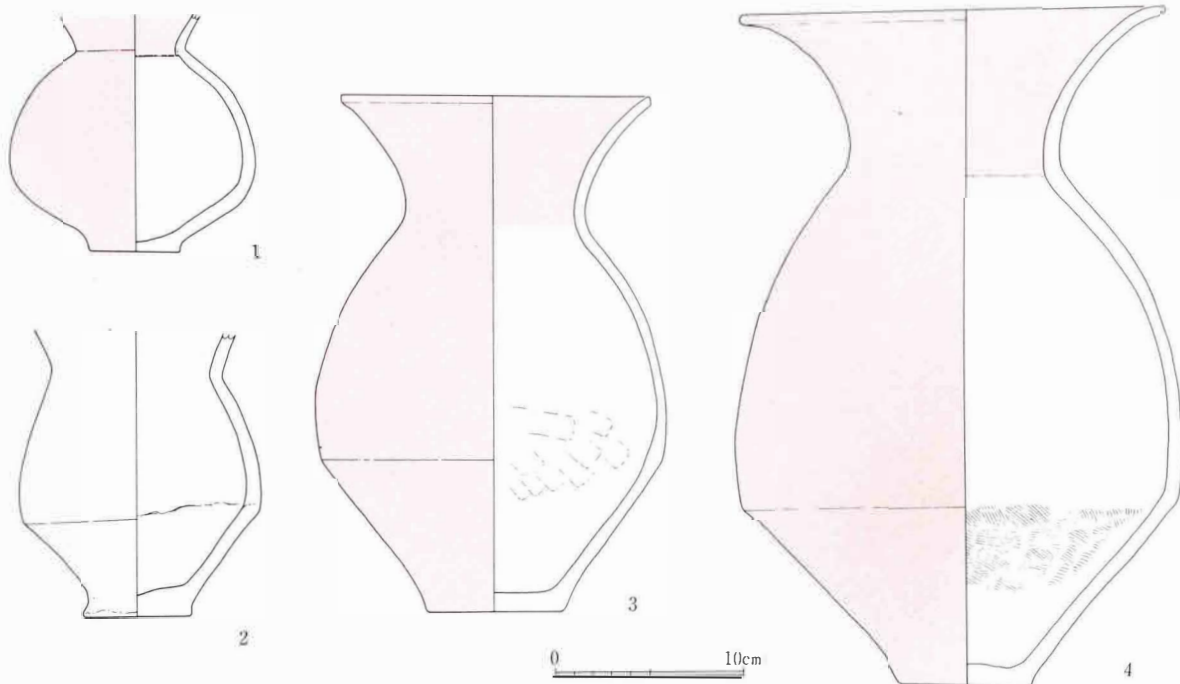


図42 SDZ-6 出土土器① (1:4)

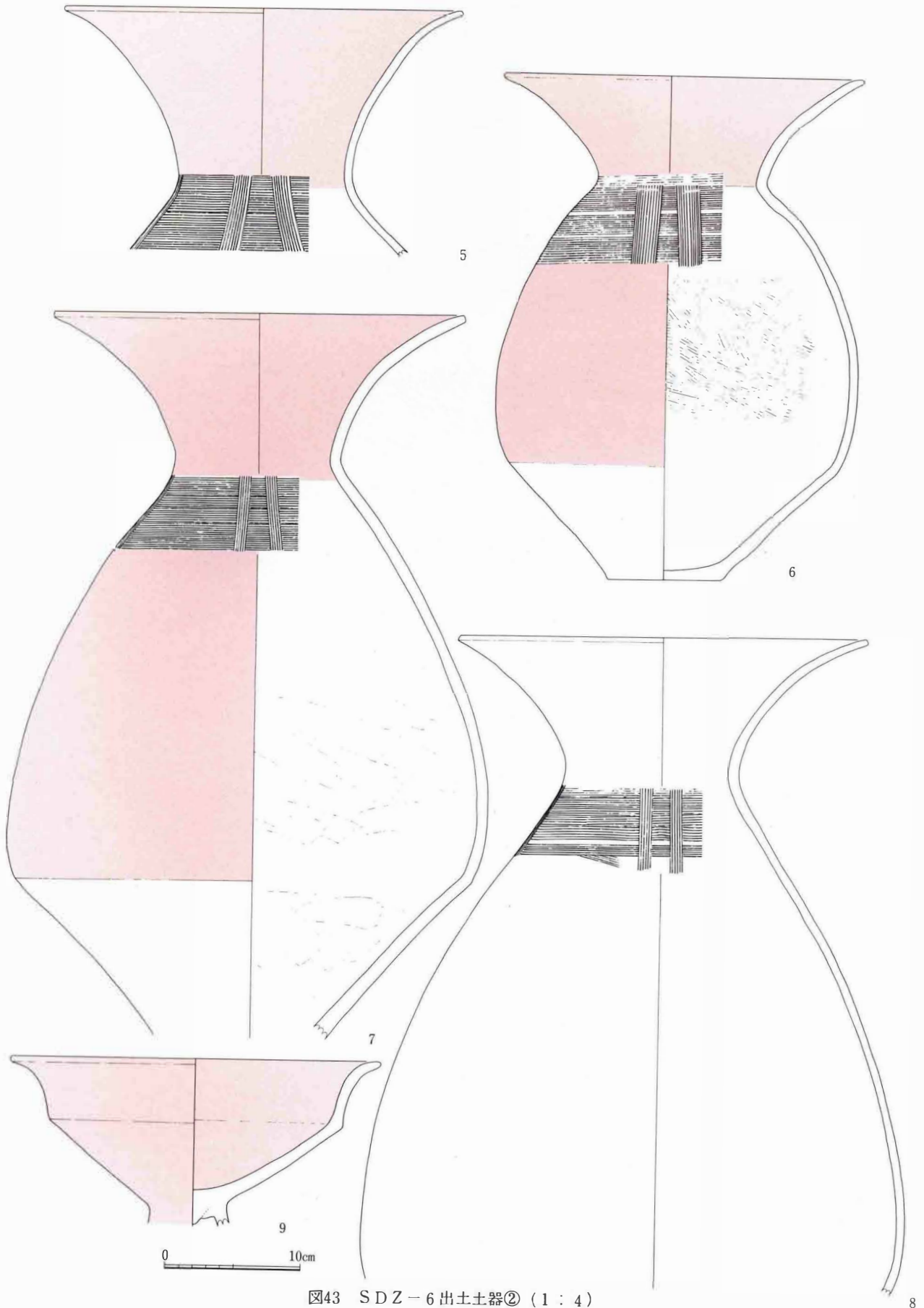


图43 SDZ-6出土土器② (1:4)

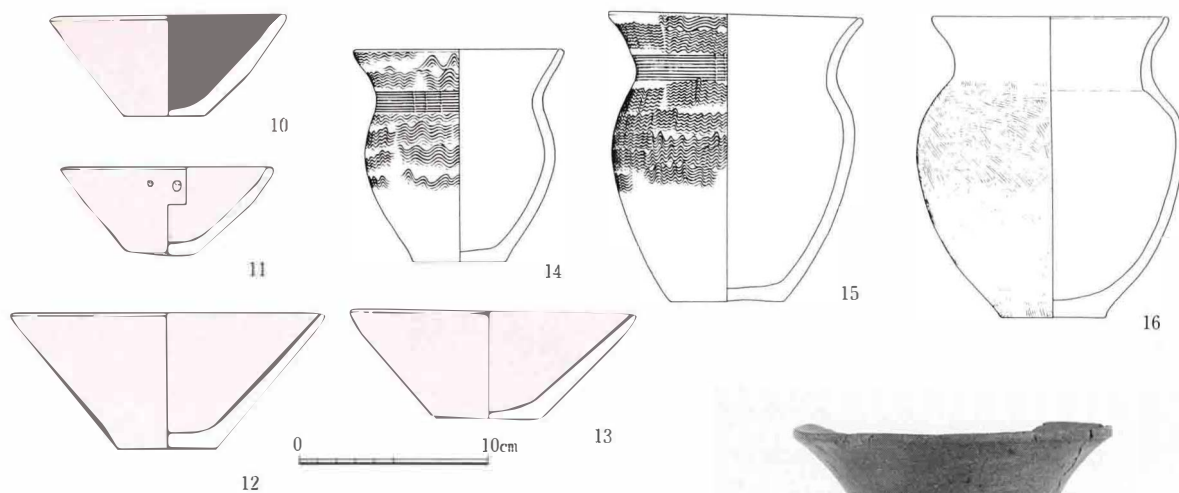
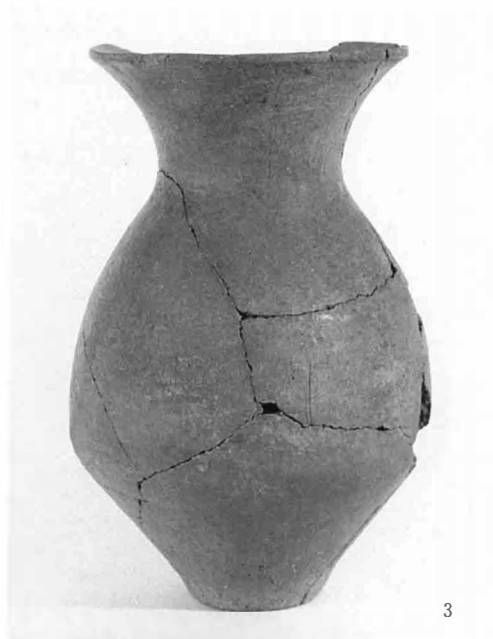


图44 SDZ-6 出土土器③ (1:4)





SDZ-6 出土土器群は、当遺跡出土の箱清水式のなかでは新相を示す一群となる。古相と考えた前掲のSB-6 出土資料と比較すれば、各形式における形態的变化や施文要素の変化の方向を抽出することができよう。

それにも増して、箱清水式における強い斉一性の存在に関して、大きな注意を払わざるをえない。古相新相を通じて、若干の変異は存在するものの、壺や甕形式内での形態分化が僅少であり、赤色塗彩や施文法則も遵守されている。極端に言えば壺1形式、甕1形式にとどまるものであり、きわめて統一的な型式内容を基本とすることが、箱清水式の大きな特徴といえる。

5 古墳時代

SB-70 (B区)

一辺4.5mのほぼ正方形に近い住居形態で、床面に4本の柱穴を配置、中央よりやや偏った位置に地床炉を設けている。該期の竪穴住居としては比較的小形の部類に入る。住居外周を取り囲むように並ぶ柱穴は、3間×4間の掘立柱建物と考えられ、棟持柱を伴うようである。当遺構とは直接のかかわりを持たないと判断しておくが、時代を近接した古墳時代の所産である可能性は高い。

床面の中央付近からは、床面からやや浮いた状態で多量の土器が集中的に出土している。全て破砕しており、原形をとどめた状態のものは目立たない。住居廃絶後しばらくの埋没過程で、短期間に、一括して廃棄投入された遺物であろう。出土破片のほとんどが接合関係を持ち、多くが復元を可能とする個体である。完形個体は存在しないが、欠失部を除いてほぼ原形に近くまで復元されたもの30個体近くを数える。出土状態からも、一括性の高さが指摘される、該期の良好な一括資料として位置付けられる。

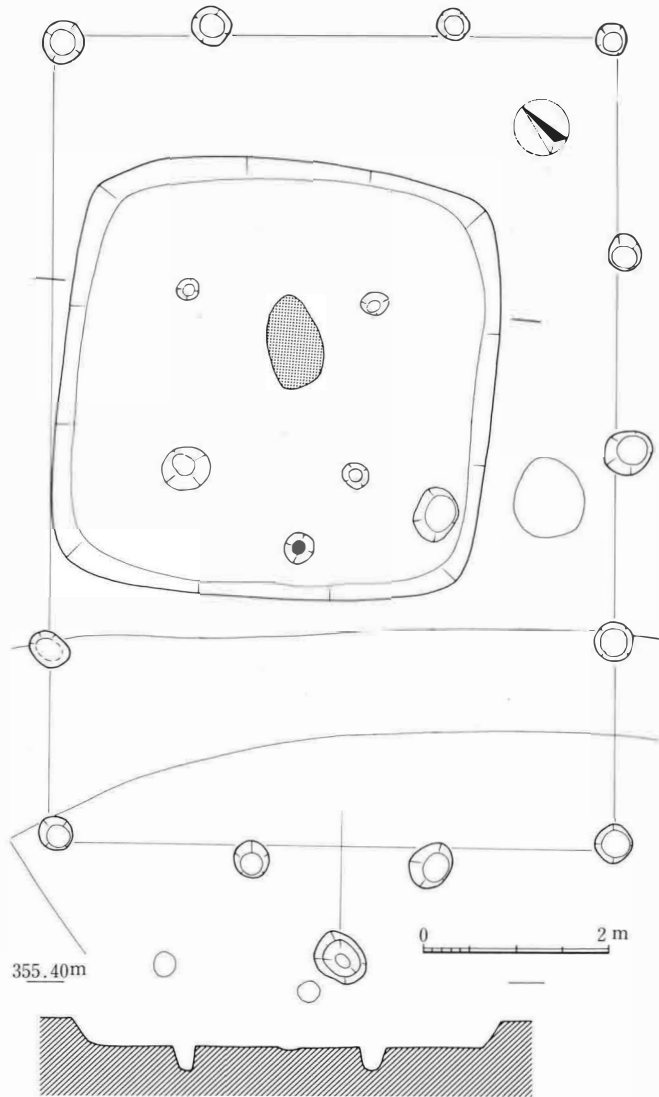


図45 SB-70 (1:80)



SB-70と掘立柱建物



SB-70 遺物の出土状態

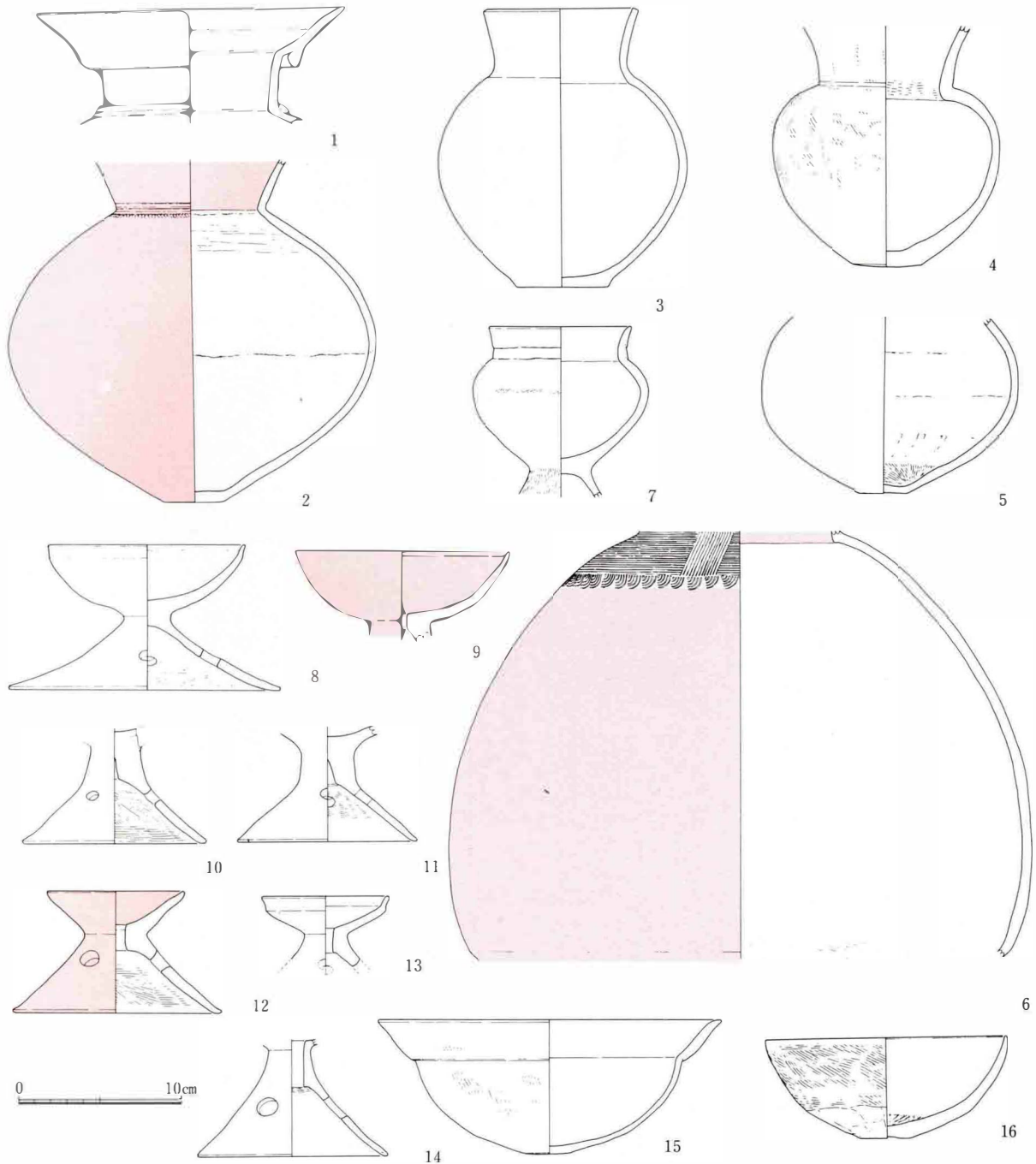


図46 SB-70出土土器①(1:4)

SB-70出土土器群は、多様な組成を呈し、有段口縁壺(1)、赤色塗彩壺(2・6)、小形壺(3~5)、小形台付鉢(7)、高坏(8~11)、器台(12~14)、鉢(15・16)、小形甕(17~19)、甕(20~28)により構成される。壺・高坏・器台における赤色塗彩、壺(6)頸部下文様帯などは前代の箱清水式の系譜下に位置し、一部に弥生土器の伝統を残す。一方、高坏・器台・鉢など小形精製土器の一群が明確であり、甕におけるミガキ手法をほぼ喪失している点は、箱清水式土器接点からの距離を感じさせる。当遺跡出土の土師器のなかでは古相に位置づくが、当該地で布留1式併行と目される更埴市灰塚遺跡出土資料に比較して新しい様相をもつ。ただし、布留2式併行期に流入すると考える畿内系高坏が存在しないこと、箱清水式系譜の装飾要素を遺存させることを重視すれば、その時間的な位置付けは微妙といわざるをえない。灰塚遺跡出土資料の年代論とも関連して注目すべき資料となる。

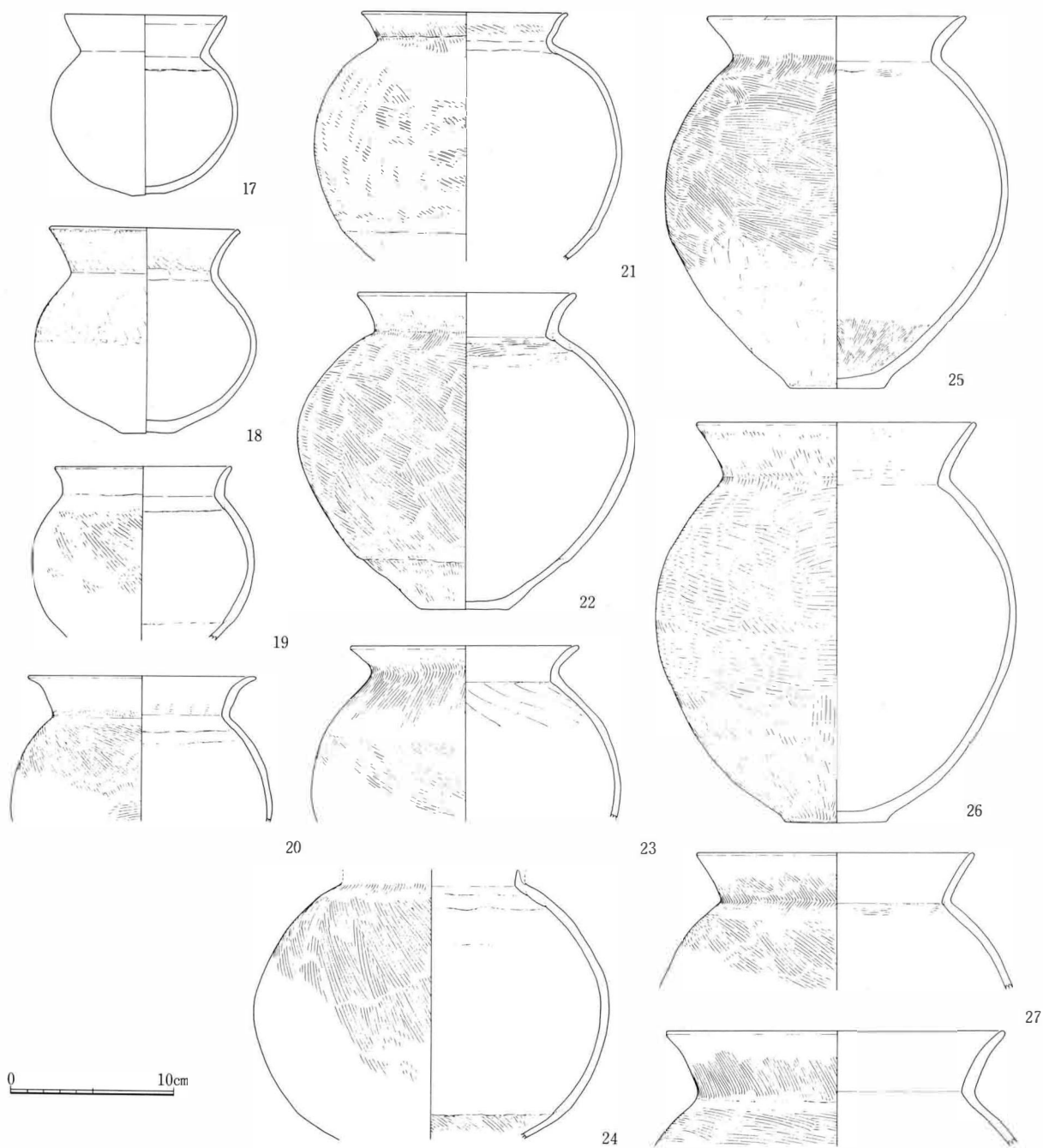


图47 SB-70出土土器② (1:4)

28



8



12



7